

与那国民俗芸能の継承に向けた調査 及び人材育成計画策定事業報告書



与那国民俗芸能の継承に向けた調査、及び人材育成計画策定事業報告書

平成31年度沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業
与那国民俗芸能の継承に向けた調査、及び人材育成計画策定事業報告書

令和2年(2020年)2月
一般社団法人与那国フォーラム

発行日：令和2年2月27日
編・発行：一般社団法人与那国フォーラム
「与那国民俗芸能の継承に向けた調査、及び人材育成計画策定事業」事務局
〒907-1801 沖縄県八重山郡与那国町字与那国1107番地
印刷：クリエイティブファクトリー・パパラギ
〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町5丁目12-9
支援：沖縄県、公益財団法人沖縄県文化振興会

一般社団法人与那国フォーラム

目次

I. はじめに（事業概要）	4
II. 平成 28 年度「与那国民俗芸能の継承に向けた調査、及び人材育成計画策定事業」	9
1. <調査概要>	
2. <シンポジウム概要>「交流会・民俗芸能の継承を考える」	
(1) 事例報告：竹富島	
(2) 事例報告：西表島祖納	
(3) 事例報告：西表島干立	
(4) 事例報告：小浜島	
3. 小括　－シンポジウムを終えて	
4. 展望　－人材育成に向けて	
III. 平成 29 年度事業報告	28
1. <調査報告・所感>	
(1) 鳩間島豊年祭（練習）	
①与那覇ひとみ（舞踊）	
②前濱由紀（太鼓、舞踊）	
(2) 白保（石垣島）（練習）	
(3) 白保（石垣島）（本番）	
(4) 黒島（練習、本番）	
(5) 竹富島（練習）	
2. 芸能交換会・シンポジウム	
「民俗芸能の未来のために、今できること～継承者育成の実践と精神～」開催	
(1) シンポジウム	
①パネルディスカッションテーマ設定	
②パネリストコメント紹介	
(2) 小括	
3. 展望	
IV. 平成 30 年度事業報告	51
1. 舞踊・地謡座談会「民俗芸能の未来のために、今できること」議事録	

- (1) 議案
- (2) 議事録紹介
- 2. 小岩秀太郎講演録
- 3. 第2回民俗芸能交換会「民俗芸能の未来のために、今できること」報告
 - (1) 日程
 - (2) 会場
 - (4) 芸能交換会登壇者
 - (5) 参加人数
 - (6) 関係団体
 - (7) 実施概要

V. 平成31年度事業報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99

- (1) 八重山調査報告
 - ①波照間島（ムシャーマ調査）
 - ②小浜島（結願祭調査）
- (2) シティブディ復活に向けた継承者育成に関するヒアリング報告
 - ①組踊地謡継承者育成会議報告
 - ②組踊立方継承者育成会議報告
 - ③狂言継承者育成会議報告
- (3) 郷友会ヒアリング報告
 - ①在沖縄与那国郷友芸能愛好会
 - ②在石垣与那国郷友会
- (4) まとめ 一人財育成計画のねらい
 - ①ヒアリングのまとめ
 - ②シティブディの運営体制について—伊江島方式と多良間方式
 - ③マネジメント人材の育成
 - ④他島との芸能交流を通じた、継承者育成の在り方

VI. 資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 123

- 1. 平成29年度民俗芸能交換会・シンポジウム「民俗芸能の未来のために、今できること～継承者育成の実践と精神～」芸能出演者一覧・写真
- 2. 平成30年度第2回民俗芸能交換会「民俗芸能の未来のために、今できること」当日配布資料・写真

I. はじめに（事業概要）

与那国島の民俗芸能の継承は、主に島内の東、西、嶋仲、比川の自治公民館（集落）ごとに踊座、棒座、狂言座などの、「座」と呼ばれる地域の継承組織を中心に行われてきました。また、戦後民俗芸能の継承を支援する組織として、与那国民俗芸能伝承保存会が結成され、工工四の発刊、さらにコンクールや発表会などの開催を通じ、与那国民俗芸能の普及と発展に努めてこられました。その結果、与那国の民俗芸能は昭和60年には「与那国島の祭事の芸能」として国の重要無形民俗文化財指定を受け、その前後には国内はもとより、海外でも与那国民俗芸能伝承保存会を中心として多くの公演を重ねてこられました。

しかし近年、「座」については棒座を除いて、後継者の不足が懸念されており、各集落における民俗芸能の継承が危ぶまれる状況になっていると思われます。また与那国民俗芸能伝承保存会についても、5年ほど前から役員の高齢化や会計の不在などによって実質的に活動できない期間が続きました。与那国民俗芸能伝承保存会は、2017年7月に総会を開いて組織再編を行い、活動を再開していますが、継承者をいかに確保するかに苦心する状況が続いています。それでも、与那国民俗芸能伝承保存会による学校の郷土学習での舞踊指導は25年以上続けられています。このため現在、町内での芸能の保存・継承は実質的に、舞踊については与那国民俗芸能伝承保存会と「座」、棒踊は「座」、そして唄三線は研究所を構える個人が主に支えているという現状であるといえます。こうした状況に対して、町教育委員会もこれまで芸能に関する技術の記録化、並びに継承者の育成などを図ってきましたが、継承者の減少スピードには追いつけてはいないと思われます。このように、従来の方法や仕組みだけでは継承が追いつかなくなっていると考えられるため、これまでの方法を見直しながらどのような継承のための仕組み、体制を作るかが喫緊の課題と考えられます。

しかしながら、実際に継承者の育成を図る際、国指定の文化財となっているがゆえに、補助金等の対象から外れてしまう場合があるなど、支援について民間助成のメニューが十分にあるとはいえ、継承はむしろ地域社会にゆだねられてしまっているという複雑な事情があります。そこで、一般社団法人与那国フォーラムでは芸能の継承・保存とのバランスをとりながら文化振興を図っていく人材を育成し、そのうえで島内の座などと調整しながら継承者を支援していく体制を構築していく必要があると考えました。そのような理由から、平成28年度に沖縄県、（公財）沖縄県文化振興会「沖縄文化活性化・創造発信支援事業」に、「与那国伝統芸能の保存・継承に向けた調査、及び人材育成計画策定事業」を提案し、採択を受けました。

この事業では、近年、継承者の不足が懸念されている与那国の民俗芸能における舞踊や地謡を、どのように育てていけばよいのかについて、まず現状を調査してみる、という課題から始まりました。しかも与那国だけではなく、主に、八重山の他の公民館についてもどのような継承の取り組みがなされているか調査し、さらに与那国の継承者自身（舞踊、地謡）が調査員になることで、その島の芸能関係者と交流して課題を共有することも目的にしていました。そのような目的で、初年度は与那国と同じく国の重要無形民俗文化財指定を受けている竹富島、西表島の祖納、干立、そして小浜島へ伺い、まず、公民館長や顧問の方々から祭事の運営や継承

の取り組みについてお話を聞き、祭事の現場にもお邪魔させて頂きました。そのような成果報告として、平成29年の1月20日には、この4公民館の館長、顧問と、与那国の教育長にDiDi与那国交流館に集まって頂き、私たちの調査報告と、それぞれの公民館から、祭事を継承するためにどのような取り組みを進めているかお話ししてもらい、シンポジウム「交流会 民俗芸能の継承を考える」を開催いたしました。

この年の調査とシンポジウムの議論で明らかになったことは、まず与那国では継承において世代間の空白ができてしまっているという課題でした。特に、継承者の少ない地謡と女性の舞踊においては、どこの自治公民館も現役の指導者が既に70代（1名は60代半ば）でありながら、実際に行事などに出演するのは主に30～40代が担っており、しかも、傾向としては毎回特定のメンバーが出演することが多く、その分練習などの負担が偏ってしまうという状況でした。また、イベントによっては本番までの練習期間が十分とれないことも多く、そうした状況に対して、若手からの焦りや懸念の声が多く聞かれました。このような世代間の空白は、たとえば干立でも発生しているように見えましたし、また他の島でも発生リスクを常に抱えていると思われました。しかし、他の島が与那国と違っていたのは、地域社会における様々な世代や社会的立場(公民館、保存会、郷友会など)の人びとが空白を作らず、安定した継承を維持するために、協力し続けていることでした。また空白が既にできてしまったと思われる公民館でも、それを埋めるような工夫が指導者や郷友会などによってなされていました。そして、これらの地域の人々がこのように努力し続けられるのは、集落を維持するためには芸能を含む祭事が欠かせないものであるという、集落における関心の高さが背景にあると思われました。逆に、祭事芸能に対する組織的な協力という意味では、関心の薄さが懸念されたのは、与那国の自治公民館の方でした。たとえば舞踊について、各自治公民館で継承を行っている踊座と、与那国で最も多くの演目を継承している、各集落を越えた組織である与那国民俗芸能伝承保存会の連携は、少なくとも人材育成においてはみられず、また郷友会との関係でも、町内の祭事芸能に関する組織的な連携は、全くみられませんでした。このような中で、本来リーダーシップが期待される指導者層は高齢化などにより、協力体制の構築は難しくなっていました。加えて、本来ならば現役の身近で指導できるはずの50～60代の人びとが、民俗舞踊の世界からかなり抜けてしまっているという状況がみられました。

この、平成28年度事業の反省から、世代の空白を取り戻し、安定した継承人口を回復していくためには、与那国民俗芸能の関係者が郷友会も含めてネットワーク化を図り、協力体制を再構築していく必要がある、と考えました。またそのためには、郷友会も含めた与那国の人びと全体が、祭事行事の継承に関する関心や意識を高めていく必要も感じられました。そこで、この二つの意味で、まずは、同様の問題を抱えながら、組織化や関心の高さが明らかになった他の八重山地域の芸能関係者とネットワーク化を図ることが有効な方法ではないかと仮定しました。そのような問題意識から、平成29年度も引き続き、同じ一括交付金を使った沖縄県、(公財)沖縄県文化振興会「沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業」の採択を受け「与那国民俗芸能の継承に向けた調査、及び人材育成計画策定事業」を、3年間にわたり実施していくことになりました。

この事業では、世代間の空白によって厳しい継承環境に置かれている現役の世代が、今後自己研さんを積み、世代の壁を乗り越え、師匠世代と次世代（進学のため与那国を旅立つ前の中学生以下）を繋ぐコーディネーターの役割を果たしていけるよう、支援することを主な目的としました。その方法として、一年目に当たる29年度は、与那国の舞踊や地謡の継承者たち（30～40代）が、八重山を中心として島外の祭事芸能を調査し、事例を学びながら、同時に島外の芸能関係者と交流をすることでネットワークづくりをする、という作業を試みました。この年度には、平成30年の1月26日にその報告会と、芸能の実演による交流の機会を兼ねた芸能交換会・シンポジウム「民俗芸能の未来のために今できること～継承者育成の実践と精神～」を開催しました。この芸能交換会では、与那国から30～40代の舞踊と地謡を合わせて十数名を、与那国民俗芸能伝承保存会名義で竹富公民館にお連れし、竹富公民館とお互いに芸能の披露を行うこと、そして、やはり竹富、小浜、西表島祖納、干立で、これまで地謡などの継承者を実際に指導してこられた指導者の方々と、東京から（公社）全日本郷土芸能協会、（公財）日本離島センターの代表者をお招きしました。それぞれの地域における芸能継承、特に幼少期からの取り組みについてご報告頂き、後半は、与那国と竹富の芸能をお互いに披露する時間となりました。この事業の実施により、島外での調査や、芸能交換会に参加した与那国の若い継承者たちが、交流やネットワークづくりによって、普段自分たちが懸命に練習している踊りや地謡の価値や意義を見直し、今後の継承に対して前向きな意見や感想が聞かれたことは、大きな成果であったといえます。しかし、交流に参加した若い継承者たちが手に入れたそのような成果を、師匠を含む、与那国の他の芸能関係者に対して、今後どのようにして広げていくかということが、改めて大きな課題として浮き彫りになりました。そしてこの課題を解決していくためには、今の現役世代にアプローチするだけでは不十分ではないかということが、参加してくれた継承者たちと与那国フォーラムとの間で共通認識となったのです。

そこで、平成30年度事業では、事業内容に若干の修正を加えました。つまり、現役世代にコミットするだけでなく、空白の世代の上に位置する師匠たちにも、これまでの継承の在り方を見直して頂くための機会提供として、島外との交流や調査などに参加してもらうようにする、ということです。そうした作業を通じ、現役世代と情報や問題意識を共有することで、現役世代と師匠世代とのコミュニケーションが円滑になり、現役世代の継承環境を整えていくことにつながると考えました。

平成30年度では、このような目的のもと、師匠同士の交流や情報交換を図るべく、竹富島、小浜島、西表島祖納、干立の芸能指導者の皆さんに、与那国の祖納豊年祭をご覧頂き、また各自治公民館でのバリヌシ（慰労会）に参加して頂いたうえで、翌日に与那国の舞踊や地謡の師匠、学校の校長、自治公民館長などと意見を交換する「舞踊・地謡座談会」にご参加頂きました。この座談会では、DiDi与那国交流館の運営協議会会長の波照間永吉先生に座長をお願いし、継承者の育成における、公民館や研究所と、学校との役割分担や協力の在り方について、さらに、継承者育成という視点から、祭事における公民館と学校との協力の在り方について、皆さんに話し合ってもらいました。その結果、学校教育について行政に提言することや、子供たちが芸能に魅力を感じられるよう、地域の側でも取り組んでいくこと、そして、与那国で10年

に一度行われ、組踊や狂言が披露されていたシティブディができなくなっているため、復活を町に提言していくことなどがまとめられました。また、この年の竹富島の種子取祭には、与那国の唄三線と太鼓の師匠をお連れし、やはりその後の交流会にて、意見交換の機会を持ちました。そのような事業の仕上げとして、平成31年2月2日に与那国中学校体育館にて、竹富公民館の皆さん約40名にご参加頂き「第2回民俗芸能交換会 民俗芸能の未来のために、今できること」を開催いたしました。この芸能交換会では、与那国の東、西、嶋仲、比川、久部良の各自治公民館から舞踊1点ずつ、竹富公民館からも、東、西、仲筋の3集落から舞踊を1点ずつ、さらに狂言部から狂言を1点、与那国からも、東狂言座から狂言を1点、ご披露頂きました。関係者だけで約140名、来場者を含めると、約300名の、大規模なものとなりました。芸能交換会の目的は、お互いに奉納芸能を披露することでしたが、本来、島の外に出してはならない竹富島の種子取祭の演目（今回は舞踊がそれにあたります）を与那国でご披露頂いた竹富公民館の皆様のご厚意には、本当に、頭が下がるばかりです。

この平成30年度の事業を通して、与那国の師匠たちの間からも、これまでの継承の在り方を見直し、他の集落や他島との交流や情報交換の重要性を認識するご意見やご感想が聞かれるようになりました。しかし、それによって現役世代とのコミュニケーションが円滑になり、問題意識を共有できたとは、まだいえない状況だと認識しています。むしろ、今回の第2回芸能交換会実施にあたり、練習や準備における段取りや調整が、必ずしもうまくいかないケースがみられました。そもそもそうした役割を担う、世話役、幹事役を担うような人が、継承組織において少なくなっているのではないかと、とも思われました。そのため、平成31（令和元）年度の課題として、集落の継承組織におけるマネジメントを行う人材の育成方法を検討するための調査も、課題に入れることになりました。さらに、与那国では久しく、公の舞台で狂言や組踊が演じられていないのですが、これらの復活のために、これまで10年に一度開催され、平成29年はその年にあたりながら開催されることのなかった祭事、シティブディを復活させる必要があることが明らかになったため、シティブディ復活に向け、どのような準備をすればよいのか、それについて組踊の経験者たちにお話を伺い、また、行政側の協力の在り方についても調査することを課題としました。さらに、今年度は与那国の継承組織と郷友会との交流の機会を作るため、特に在沖縄与那国郷友会にお願いし、郷友会から与那国へ踊りを習う人を派遣して頂き、与那国民俗芸能伝承保存会から指導を受ける、という取り組みにも着手しました。また、他の島で芸能継承に取り組む人々への調査や、芸能継承者との交流の事業も、これまで本事業に参加していなかった与那国出身の高校生を対象に、実施いたしました。

この事業報告書は、こうして平成28年度から平成31年度までに行ってきた事業の中で、わかってきたことを報告するものです。最後に、まとめとして、今後の与那国における人材育成の在り方に対する見通しを述べるとともに、今年度は別紙として、人材育成の具体策をご提案する、人材育成計画書を発行させて頂くことになりました。4年をかけても、民俗芸能の人材育成に関して、与那国や他の島々の皆さんから十分にお話を聞けたとはいえませんし、また、皆さんから聞いたお話を十分理解できたともいえません。それでも、間違っているところをご批判頂いたうえで、この報告書が、人材育成のより良い方法を皆さんにお考え頂く際の資料に

なることを願うばかりです。

令和2年2月
一般社団法人与那国フォーラム
「与那国民俗芸能の継承に向けた調査、及び人材育成計画策定事業」事務局

Ⅱ. 平成28年度「与那国民俗芸能の継承に向けた調査、及び人材育成計画策定事業」

1. <調査概要>

【調査日程】	【調査地】	【調査対象】
平成28年11月4－6日	竹富島	「竹富島の種子取祭」
平成28年11月13－16日	西表島祖納・干立	「西表島の節祭」
平成28年12月5－8日	小浜島	「小浜島の種子取祭の芸能」
平成28年12月10－13日	竹富町教育委員会・ 竹富島・小浜島・ 西表島祖納・干立	各祭事に関するヒアリング、 及びシンポジウムに関する 打ち合せ。

本調査では、まずそれぞれの祭事の当日にお邪魔し、見学をさせて頂いた。その後公民館長を中心に、それぞれの祭事の運営の仕方や予算、また祭事における芸能継承の現状と取り組みについてお話を伺った。なぜ芸能そのものだけでなく、祭りの取材をするのかといえば、民俗芸能が披露されるのは祭りの場であることが多く、芸能継承の仕組みを知るにはまず祭りの運営そのものを知る必要があると考えたからである。

本調査の報告、及び与那国の人びととこれら地域の人びとが芸能の継承について共に考える機会を創出するため、1月20日（金）18：30より意見交換会を実施することとした。「交流会・民俗芸能の継承を考える」と題し、竹富島、西表島の祖納・干立、小浜島の各公民館より、現役の公民館長、さらに地謡の指導者など、長年その地域の芸能を支えてきた人たちを招聘した。与那国からは、与那国町外間守吉町長、与那国町教育委員会崎原用能教育長をはじめ、各自治公民館長、座の関係者など約70名に集まって頂いた。

2. <シンポジウム概要> 「交流会・民俗芸能の継承を考える」

日時：平成29年1月20日（金） 時間：18:30 - 20:30 会場：DiDi与那国交流館

<パネリスト>

- ・上勢頭 篤（竹富公民館館長） ・新本 光孝（琉球大学名誉教授・竹富町史編集委員会委員）
- ・前本 隆一（竹富公民館顧問） ・花城 正美（竹富町教育委員）
- ・屋 重美（祖納公民館館長） ・崎原 用能（与那国町教育委員会教育長）
- ・那根 操（竹富町民俗芸能連合保存会事務局長）
- ・山下 義雄（干立公民館館長） ・石垣 長健（干立公民館元館長）

<司会>

遠藤 美奈（（公財）沖縄県文化振興会）

以下では、当日のシンポジウムの内容を基に、小池による各調査地での報告と、それをふまえた各パネリストへの質問、それに対するコメントの要旨を記載する。

（1）事例報告：竹富島

竹富島には、種子取祭の取材のため11月4日夜から6日の午後まで訪問した。宿泊は元公民館長のご自宅にお邪魔し、その日の深夜12時過ぎから行われる世乞い（ユークイ）に参加した。世乞いでは神司一行を前公民館長宅前で家人とともに出迎え、家の庭で巻踊りを踊り、神司一行を家に上げた後に祈願を行い、古謡を唄う。

西、東、仲筋の三つに分かれて行っていた世乞いの一行は、遅いところで深夜2時くらいまでには終わる。朝5時には根原家¹へ集まったのち、朝の祈願のために世持御嶽へと神司や役員らが向かう。二日目の種子取祭がはじまっていく。

二日目。朝の祈願と奉納芸能である狂言が終了したあと、一旦解散し宿舎に戻った。8時半には神司一行が宿舎の前を通るといふことで、迎える人々が沿道に衣装を身につけて立っていた。このために、人々がボランティアで早朝道の掃き掃除をしていた。中には東京から、このボランティアのために通ってくる人もいたという。その後10時半頃から始まった世持御嶽での奉納は、夕方5時頃まで続き、その後祈願をもって全日程が終了した。

三日目。朝10時に公民館へ島内の各団体長、及び石垣、那覇、東京の郷友会長が集まり、今年の種子取祭の反省会を行っていた。その後午後1時より、公民館の支払い議会が行われた。これらの反省会からも、種子取祭が郷友会を始め、島内外の多数の関係団体の結束のもと執り行われる大規模なものであることが伺われた。



¹ 玻座間御嶽を祭る宗家。同家は玻座間御嶽の神、根原金殿の子孫とされている。

竹富町史編集委員会編『竹富町史第二巻竹富島』竹富町役場（2011年）pp.473-474

<コメント要旨>

上勢頭 篤（竹富公民館 館長）

（祭りの組織について）

島外の郷友会も含め、なぜ多くの人々が結束して、
こんなに大変な祭事を行えるのでしょうか？



——3月31日に、竹富公民館で総会を開き、来年度の種子取祭の日程と次期公民館長が決まります。また夜には公民館を構成する3集落ごとに集まり、公民館役員を選出します。4月2日には、顧問と神司にお願いし、その年の24回の祭事行事の日程を決めてもらいます。4月10日頃に各集落から議員を集め、公民館議会を開催し、その日程を決定します。その日取りの決まった祭事表を、4月15日までに各支会へ伝えます。石垣、那覇、東京の郷友会にも伝えます。郷友会は、種子取祭が毎年行われるため、来るのがだんだん楽しみになってくる人や、種子取祭に来ることで地元とのつながりが深まることを期待し、種子取祭が終わった翌日には、来年の日取りを聞いてくる人も多いです。竹富には「うつぐみ」という言葉にある通り、なんでも一人ではやらなくて、皆でやるという気質があります。特に郷友会は親島と協力しないと縁が切れるみたいな感じがあるので、種子取祭には必ず全員帰ってきてやる、というのが伝統的にあります。公民館長はかならず、石垣、那覇、東京の各総会に出席し、昨年のお礼と今年の協力をお願いします。芸能も各郷友会から出すものが増えてきており、毎年帰るのを楽しみにしています。特に生まれ年の人たちは、同窓会も兼ねて種子取祭に併せて島に帰るため、12年間積み立てをしています。お正月に帰らなくても、種子取祭には戻ってきます。それに加えて観光客も増えています。期間中、1,000~2,000人は集まっています。



<コメント要旨>

前本 隆一（竹富公民館 顧問）

（祭事を行う理由について）

何故水田のない竹富島で、
数百年にもわたり種子取祭が行われてきたのでしょうか？

——なぜ祭りを行うか？我々百姓は、作物が育たなければ生きてはいけません。では豊作を誰に頼むか？それは神様にしかお願いできない。だから、今年播種した作物を、「どうか豊作にさせてください」と願うのが祭りの始まりでした。播種をしたら豊作させる、豊作にしたら、そのことを神様に報告するお祝いをする。まだ実ってはいないけれども、豊作の願いを込めてあらかじめお祝いをする「予祝」をする。だから予祝においてその喜びを祝うために発生したのが芸能なのです。

竹富島には田んぼがない。しかし種子取祭を盛大にやる。竹富島は粟の種子取です。竹富島は西表島にも水田をもっているが、しかし粟がなければ生きてはいけません。刈り取った粟は積んでおくが、これをシラと言います。シラは税金など、目的別に作っておく。このうち、来年の種用のシラから種を取ることを種子取と言います。種子を取ってから、畑に播種するまでが種子取です。播種した作物が、豊作になるように願いをする。種子取祭は甲申の日からはじまる。奉納芸能は六日目に始まる。四日目の、戊子の日に種をまく。その翌日に清めをする、その翌日に、奉納芸能を行う。奉納芸能は、播種した種が芽吹くことを祝うものです。ムイムイの願いといって、種をまいたものが発芽して、生えてくることを祝う踊りです。奉納芸能は二日間行います。九日目に、支払議会を行います。その際、各郷友会から幹部が出席し、反省会を行います。今年の種子取祭はどうだったか？またどのようにして継承していくか？郷友会の要望を聞きながら、継承について考えています。

現在、はっきり言えば継承は大変難しい状況にあります。かつては踊り、狂言、棒などの踊り手はたくさんいたが、竹富島は終戦後、昭和22、3年頃までは2,300人余りの人口がありました。しかし昭和40年頃には300人ちょっとしかいなくなりました。どんどん狂言も、踊りも難しくなって、竹富島の人だけでは狂言もできなくなったので、昭和45年に仲筋の狂言部は演目を半分石垣の郷友会に持たせました。それからは、石垣の郷友会と竹富島の人で継承するようになってきているが、それも難しくなっています。人がどんどんいなくなっていくし。これをどう継承していくか、大変な問題になっています。あと10年ぐらいは続くだろうと思います。しかし、そのあとはどうなるかわからない。これはどこもそうであろうけれども、子供のときから狂言や踊りを見せて、稽古させないとこれは継承できない問題です。今年も校長先生にお願いして、子供に種子取祭の講和をして、興味を持たせるように活動しています。





(2) 事例報告：西表島祖納

祖納には、11月14日から15日の日程で調査に伺った。まず、祖納公民館に芸人（男性出演者）が一堂に集まり、屋重美術館長の挨拶によって祭事がスタートした。男性芸人が出発したあと、公民館でミルクの面を身に着ける儀礼が行われ、それが終わるとミルクとアンガー（女性の踊り手）たちが公民館を出発。浜辺の会場に到着すると、まず男性芸人たちが爬龍船を海に出し、その後ヤフヌティという演目が披露された。ヤフヌティとは櫂のことで、芸人たちが櫂を一斉に振る踊りを披露していた。踊りは2～3列縦隊になって行われるが、與那覇有羽²によれば、この列の後方で太鼓を叩く人たちの唱え言葉のメロディが、与那国の〈〈木遣〉〉という演目の唱え言葉で使用されるものと酷似していた、という。その後、狂言、棒などの芸能が披露されていくが、この奉納芸能の前に、会場に建てられている国指定重要無形民俗文化財の記念碑に一同が一礼をしたのちに、芸能が披露されていった。国指定を受けたことを、とても大事にしている様子であった。棒には、小学生も出演していた。また演目の解説、並びに芸人一人一人のプロフィールまで、司会によって紹介されていた。小学生に至るまで、出演者を大事にしている様子が伺われる。

翌日には、今年ミルク役を務めた人の家に、公民館長、顧問、公民館役員など関係者が集まり、お礼を述べていた。ミルク役になったのは、祖納出身者の2世で、現在沖縄本島に在住している人物である。今年49歳の生まれ年にあたるが、節祭も今年ミルク役で出演するまでは見たことがないということであった。49歳の早生まれの男性がミルク役を務めるという慣例になっているから、このような人物が選ばれたという。この男性は約十日前から祖納に戻り、ミルク役としての指導を受けてきた。この指導を受ける中で、自分にも島の血が流れていることを実感し、この日は「感無量」と涙ぐみながら感想を述べておられた。

² 與那覇有羽。平成28年度、本事業調査員。与那国の数少ない若手地謡 継承者。

<コメント要旨>

屋 重美（祖納公民館 館長）

（移住した出身者が祭事をしたいと思う理由について）
公民館長ご自身、島外に一度出られたあと、祭りのことなどが気になって祖納に戻られたと伺いました。祖納の人が島外に住んでいても戻って祭りをしたいと思うのは、何故なのでしょう？



——移住した者が、何故祭りに参加したいと思うか？これは、今我々が一番突きつめたい問題です。人口が少なくなっていく中で、どうしたら人を増やせるのか？そのことについて一生懸命取り組んでいるからです。島外の方は祭りに参加したいから、移住してきて、祭りに参加しています。

20数年前、明治学院大学の学生が節祭を数年間手伝いに来ていたことがありました。その後一部は祖納の生活文化が気に入り、二人ほど家庭をもって住んでいます。彼らは三線を弾き、歌も歌うので、集落の中心人物になっている。それが人を増やす一番の方法ではないかと思います。いきなり節祭に参加するのではなく、アルバイトや手伝いなどで住み込み、長期にわたって島の文化を体験すると、気に入って来てくれる。公民館では現在、外から来た人が長期にわたって住み込み、祭りなどの生活文化を体験できるよう、宿泊施設をつくろうと取り組んでいます。

自分が島外に出てから、戻ってきたのは26歳のときでした。それから船子やミルクの役をはじめ、様々な役をしてきて、現在公民館長を務めています。もちろん祭りの行く末は心配です。祖納を出た者は、自分の出身集落をバシマ（自分の島）といいます。節祭で郷友会に声をかけると、喜んで飛んできます。それは、自分が島の一員であるということの確認であるからなんです。そしていいことに、今の祖納の節祭では、帰ってきた者全てに役がある。小さい者から、お年寄りまで。持ち場や役職の継承の中で、まだ若い郷友会の人もその一端を担っています。島に思いを寄せるからこそ、島に帰ってきて、祭りに参加したいと、いずれは島に住んで、祭りを支えていこうという人が増える環境づくりを、今祖納では取り組んでいます。

<コメント要旨>

那根 操（竹富町民俗芸能連合会 事務局長）

（次世代育成の課題について）

子どもたちを節祭の棒に出していらっしやいましたね。画期的な事かと思われます。その点からも、熱心に芸能を指導されていらっしやると拝察しますが、次世代の育成において、課題だと思われることは何でしょうか？



——竹富町民俗芸能連合保存会の事務局を務めております。

祖納公民館の副館長もやっています。前本隆一先輩も仰ったように、島の人口が減っていく中で、550年も続けられたこの節祭をどうしていくかという心配は、確かにあります。自分は現在66歳だが、小学五年生のときに初めて行事に参加することが出来ました。その頃は人口も多く、小学五年生にならなければ棒は打てなかった。今は保育所の子供まで入れてやらないと、その棒系の数を満たすことが出来ない、というぐらいになってきています。

祖納の節祭は、約2週間前からトリチキ（練習期間）に入ります。その時間は、公民館の放送もありません。銅鑼の音の合図で、集落の皆に知らせています。子供たちは、毎晩夜7時半の銅鑼の音で、公民館に集合してくる。夕方、青年の皆さんが船をこぐ練習をするために銅鑼を打つと、子供らが、部活をしても、浜に走ってくるぐらい、子供たちも祭りに熱心です。子供たちがこのように燃えている中で、節祭の行事は二日間に渡って行われます。その間学校は郷土学習のため、休みになる。祭りの当日、衣装を身に着けて、多くの皆さんの前で芸を披露するときの、子供たちの喜びと目の輝きはなんともいえない。地域の皆さんは、子供たちの演技を見て、この子供たちが地域の芸能を担っていくものなんだなということで、子供たち一人一人紹介するときには、学年と、たまには担任の先生の名前も付けて紹介しています。すると、子供たちも一生懸命やる。このように、子供たちも持ち上げながら、やっています。

地域の学校は西表小中学校ということで、祖納、干立、白浜、三つの地域が一つの学校になっています。祖納と干立は行事の日程が重なっていて、なかなかお互いの芸能も見ることが出来ない。今年はたまたま12年ぶりに、祖納と干立の節祭の交流会を行うことができました。祖納の子供たち、干立の子供たち、白浜の子供たちが集まってやるなかで、子供たちがお互いの衣装などを褒めたたえている。子供たちは中学を卒業すると島を出てしまうので、それまでに島の文化を体に染めておかないと、いつ帰ってきてても、すぐに中に溶け込む体制は取れないだろうということで、行事には必ず参加させています。

子供たちの三線教室を、毎週火曜日に開いて、島の歌を子供たちに教えています。今から15、6年前、与那国に来た時に、当時中学一年生ぐらいだった与那覇有羽君が、一人で堂々と三線を弾きながら与那国の歌を我々に聞かせてくれたときから、うちの子供たちも人前で三線が人前で弾けるようにと、取り組んでいます。

竹富町には、教訓歌のデンサー節というのがあります。このデンサー節大会もしばらくは

やっていたが、もう12年間も休んでしまった。与那国のスンカニ大会はずっと続けていますね。やはり継続することが力だなと思い、今回提案したところ、今年から復活して、なんとかやっていくことになりました。今のうちに子供たちに、教訓歌であるデンサー節を覚えておかないと、子供たちが大人になった時、自分たちの子供に教えることが出来ない。今回復活させることになった喜びもあります。子供たちが島を出る前に、島の文化をしっかりと体に染めていてもらいたいということで、今子供たちと色んなことで関わって、教えています。



(3) 事例報告：西表島干立

11月14日、祖納集落の節祭を午後2時すぎまで取材したあと、小池のみ干立集落に移動し、干立の節祭を取材した。午後3時頃、干立公民館に集合していた芸人などの関係者が、公民館の敷地内に立てられていた旗頭を中心に、海岸の会場へと出発した。与那国ももちろんそうだが、沖縄県内の多くの地域では移動時に旗頭を一旦倒し、横にしてから運ぶと思われるが、干立の旗頭は立てた状態のまま移動していた。倒れないよう複数人が、街路樹などをよけながら移動するので、かなり技術の必要な作業ではないかと思われた。

海岸に到着後、ヤフヌティとよばれる芸能を披露してから、2艘の爬龍船による舟漕ぎ競争を行った。この日はたまたま晴天に恵まれたが、この時期は荒天になることが多い。ただし、どんな荒天であっても必ず舟は出すとのことであった。目の前の海岸での船漕ぎののち、しばらくして海岸の目の前にある御嶽へと移動し、女性たちのアンガー踊りと呼ばれる巻踊りから奉納芸能がスタートし、続いて男性による、棒、狂言の披露へと続いた。その後に獅子舞が登場して場のお浄めを行ったあと、干立のミルクが登場し、子供たちとアンガーを従えて御嶽の境内を行進した。その間にオホホが登場するという一連の流れがあった。この奉納芸能が披露される間、山下館長自らが司会を務め、芸能の解説を行っていた。

御嶽での奉納芸能が終了したあと、集落で司を出す家であるフタバ家、カイレ家に移動し、同家の庭にて演目の数は減ったものの、御嶽と同じ芸能を、アンガー踊りから獅子舞まで、同じ順番で披露していた。最後に公民館へと戻り、再びアンガー踊りから狂言まで、御嶽やフタバ家、カイレ家で行ったのと同じ演目を同じ順番で披露していた。公民館ではこれをツツミと

いって、これで終了という意味だそうだが、御嶽での奉納芸能には出演できなかった子供たちなど、練習に参加した全ての人たちが芸能を披露していた。このように、同じ演目を祭りの間1日中繰り返し披露していたのが、干立の節祭における芸能の一つの特徴と感じられた。また干立集落の芸人たちは比較的若い人が多かったが、後日山下館長に伺ったところ、集落には移住者が多く、踊り手の多くも移住者であるという。このような移住者が多く住む集落の中で、公民館長としてはまだ若い30代でありながら、山下館長は故・儀間正二郎氏（干立地謡師匠）から古謡や地謡を全て習った身として、自ら芸能の継承の中心になって、踊り手や地謡への指導を行っている。

<コメント要旨>

山下 義雄（干立公民館 館長）

（芸能を習う側の、動機について）

子供の頃から古謡など、熱心に芸能を学んでこられたことと拝察しますが、そこまでして芸能にのめり込んだのは何故なのでしょう？

——干立から参りました、山下です。このような伝統芸能の継承について意見交換の場に呼んで頂き、ありがとうございます。これまで伝承を担ってこられた先輩方の前で意見するのは大変恐縮ですが、これまで先輩方から指導して頂いた経験をもとに、今思っていることを述べさせて頂きたいと思います。

自分の名前は山下と言うとおり、沖縄にはない名前だと思います。母は西表島祖納の出身だが、父は大阪から西表に仕事の関係で来て、そのまま気に入って住み着いた、俗に言うナイチャーです。自分は島で生まれ育ちました。干立では、自分の父の世代、60～70代の方々が非常に少ない。その上の先輩たちの子供世代に当たる方々だが、ほとんどの人が村から出て行ってしまった。自然環境も含め、島での生活が厳しいなかで、子供たちには島外へ出て出世して欲しい、と思うのが当時の親世代の気持ちだったのではないかと思います。自分の世代でも、「十五の春」で、中学を卒業して都会に出るわけですが、その中で島に帰ってくる地元の青年はなかなかいません。

そういう中で、自分も八重山高校に進学後、大阪の高校に編入をしました。都会にあこがれて出たわけですが、たまたま阪神大震災に遭いました。ちょうど18歳のときでした。そのときコンビニエンスストアで働いていたのですが、震災後に被災者たちが被災した店舗に群がり、物がなくなるまで取り勝負で買って行く光景を目の当たりにし、都会の怖さを感じ、19歳で島に戻ってきました。島に戻って何がいいかというと、自然の素晴らしさ、そしてゆっくりとした時間、落ち着いた人々の生き方でした。この自然の中での暮らしが素晴らしいものであることを再認識しました。自分の父も漁業をしていたので、子供の頃から漁業に親しんで育ってきました。今は観光ガイドと漁業で生計を立てています。そういう中で伝統行事が季節ごとに



巡ってくるため、子供の時から見てきた先輩たちにあこがれて自分も行事に携わってきました。同世代で子育てをしているのが30代にあたりますが、自分と兄以外は皆移住者で、地元の人がいません。

自分の息子が高校生ですが、島に戻ってこない限り、次の後継者もない、というのが現状です。本当にギリギリのところを色々な人たちで支えてきた行事でもあります。自分が古謡を習った先輩も、70代近くになるまでお祭りや、お祝いごとの度に三線を弾いて、地謡をしたり、祭りの段取りなどを若い人に教えていました。しかし、島外出身者にとっては覚えることも難しく、教わってもなかなか覚えることが出来ませんでした。「自分は年だからもう、お前たち若い者にまかす。特にお前はもう、覚えただろう。お前にもう、この祭りの歌を、任せるぞ」と言われたことをよく覚えています。初めは嬉しかったのですが、「だけど、お前が次に渡すまで、お前の責任だぞ」と言われ、逆に怖くなりました。本当に次の世代が祭りを続けられるようになってくれないと、自分もあのおじいのように続けなければならないのかと。

しかし、自然の中で人々が助け合って暮らすことにあこがれてきたし、今もそこに良さを感じています。特に、祭りは日取りが決まっていて、それは土日に合わせているわけではない。だから休日にあわせて皆が集まることはできません。干立の若者は自然が好きな人が多いので、観光ガイドをしている人が多いです。なので前もって日取りが分かれば自分で仕事を調整し、祭りに協力をしてくれています。逆に、それが楽しいとも言われます。ただ生活するだけではなくて、ここでいい暮らしがしたい。お金を稼ぎたいければ都会でもっといい仕事はたくさんあります。なぜわざわざ西表に移住して生活したいかといえば、ここで皆といい暮らしがしたいからだ。だからどんなに夏場が稼ぎ時でも、仕事を断ってでもその季節の行事に参加しています。だから少ない人数でも助けあって生きていく中で、特に今の親世代が、子供を育てながら地域の行事を楽しんでいると思います。そのため、今後も子供たちにこの良さがきちんと体験させられて、この生活にあこがれを抱き、一旦島を離れても、また島に戻ってきてくれるように、自分たちもまた子供たちに教えていきたいと思っています。

<コメント要旨>

石垣 長健（干立公民館 元館長）

（地謡の育成について）

地謡が減るとしたら、その原因はなんだと思いますか？

干立の地謡には、将来地謡が減るような心配はないですか？

——今回與那覇さんから、与那国では地謡をする人が二人しかいないと聞いて、びっくりしました。

——與那覇：若い人が、です。すぐ上が70代なので。

——どうのことだろう？と。私たちの集落に比べれば、10倍以上の人たちが与那国にはいます。でも、その中で若い人たちの地謡が二人しかいないというのは、どうしてだろうか？今日この会場を見ても、若い人の顔をあまり見かけないですね。自分の地域の文化や芸能に関して、興味があるのだろうか？たぶん、興味があったら今日も来ているはずだろうし、色んなことを勉強して、自分からやりたい、と思う気持ちがあるだろうと思います。なので、年配の人たちも地域の行事の大切さ、面白さを若い人たちにも教えていくのも一つの手段だと思いません。

干立地域では、地謡が減っていく可能性がないか、ということですが、山下館長から話があった通り、現在Iターンで入ってくる若い青年が、たくさんいます。ほとんどの人たちがそういった行事に対して、非常に興味をもって、協力してくれています。それで今、地謡をする人が二人、三人と、徐々に増えてきています。たぶん、私たちの地域では、大丈夫だろう、これから先も、山下館長もまだまだ若いし。また竹富町の様々な行事を見ていると、若い人で地謡をやる人もたくさんいます。これはやはり、地域の文化に誇りを持ち、自分も参加しよう、という気持ちで取り組んでいることだろうと思います。なので、与那国では地謡をやる若い青年が二人しかいないということですが、これは、地謡をやる人も、若い人を引っ張り込んでやろう、という気持ちが大切だろうと思います。

（4）事例報告：小浜島

小浜島では、「小浜島の盆、結願、種子取祭の芸能」という形で、3件の祭事の芸能が国から重要無形民俗文化財に指定されている。中でも、結願祭は島外の郷友会なども参加し、かなり盛大に行われるものと聞いていた。しかしあいにく、西表島祖納・干立の節祭と日程が重なり訪問することができなかった。

しかし、祈願や芸能を行う傍ら、その年のサトウキビの生産状況などについても報告を行う農事懇談会など、現在でも農業に密着した種子取祭が12月に行われることを知り、種子取祭の調査を実施することにした。与那国でも種子取祭を始め、農事歴に基づいていると思われる祭事は多く、人々の生活と祭事芸能の関わりを考えるためには好個の事例になるのではないかと考えたからである。



朝7時頃、今回調査にご協力頂いた新本光孝氏（琉球大学名誉教授・竹富町史編集委員会委員）の自宅を訪ねると、既に祭壇にはススキなどが備えられ、家の中での祭事の準備がととのえられていた。正装した新本氏が祈願を行ったのち、小池も祭壇に手を合わせ、新本氏より祭壇に供えられた御神酒、御塩を頂いた。家庭内の祭事が終了すると、少し休憩をしたのち、午前9時頃に南集落の嘉保根御嶽に同行した。こちらでは司の祈願の終了後、集まった集落の男性たちによってニーウリという古謡が謳われた。種子取祭で古謡を歌うのは男性だけとのことである。昼前に嘉保根御嶽での儀礼が終了すると、司を先頭に列を作って御嶽を出た。ここでも男性だけが三線を弾きながら歌う光景が見られた。

午後、新本氏のご案内で北集落のあるお宅に伺った。この家では、ヤマニンジュと呼ばれる男性の仲間たちが、家の中に集まり種子取の歌詞を民謡に乗せて歌う、ヤーマールという行事が行われていた。聞けばこの行事は、ヤマニンジュそれぞれの家を廻るため、日中から深夜の12時頃まで続くという。その日深夜まで、このヤーマールに同行させて頂いた。

翌日は再度南集落の新本氏宅に伺い、その後、午後1時に集落の福祿寿を祀っている大嵩家へ新本氏に伴って訪問、同宅で行われた集落の農事懇談に参加した。ここに集まったのは全員男性であった。福祿寿への祈願ののち、やはり全員が古謡を歌い、また種子取の歌詞を民謡に乗せて歌っていた。この歌の合間にその年の農業の生産状況などが報告され、農業と祭事が密接に関わっていることを伺わせた。またこの種子取の祭事中は稲の成長を願う意味で胡坐をかき、静粛にしなければならないということで、正座もしてはいけない、手も叩いてはならないと教えられた。この農事懇談会は17時頃まで続いた。



<コメント要旨>

新本 光孝（琉球大学名誉教授・竹富町史編集委員会委員）

（祭事が生活の中に持っている意味、あるいは意義について）
種子取祭はとても生活に密着した祭事であると拝察しますが、小浜の生活では、種子取祭のような祭事の儀礼は、
今も生活の中で重要な意味をもっていらっしゃいますか？



——種子取祭は、種を苗床にまいて、その生育を静かに願うというのが、しきたりになっています。小浜の人口は、昨年の12月現在で715人。自分が島に帰ったのが8年前。66歳まで勤めて。帰ってきてから公民館役員を務めました。嬉しいことに、当時の人口が約400名だったのですが、あれよあれよという間に増え現在、竹富町内では、西表島について2番目に人口が多い島となっています。祭事の中でも、豊年祭の規模が一番大きい。それこそ郷友会も、誰それとなくやって来る。「豊年祭のために命が惜しい」という人もいるほどです。しかし、あれを公開するわけにはいかない。しかも、我々島の間人だけで、規律正しく行っています。豊年祭が無くなるということは、まずない。この祭事だけは、永久に残り続けると思います。それは自分の経験からわかることです。

集落の行事について説明するためには、少し公民館についてお話ししたいと思います。小浜の公民館は、北部落と南部落から構成されています。ちなみに、花城先生は北部落、自分は南部落の間人です。公民館長は、両部落の中から一人を選任します。副館長は、各部落に一人ずつ選任されます。副館長の下に、理事、幹事がさらに一人ずつ選ばれます。それから、部落会の役員ですが、副館長が部落会長を務めています。そしてもう一つ特徴的なのは、各部落に中主という、大体40歳、50歳代の男女が7、8人、両部落にいて、彼らが両部落の祭事を支えています。

お盆、旧の7月13日から15日までですが、小浜の場合は16日に、盛大にお祝いをしています。その後に節祭、我々は結願祭と呼んでいます。どういうわけか、村のウヤンキ³は節祭と呼んでいます。理由はわかりません。後継者問題については、郷友会、学校の全校生徒、全教職員、保育園児、医者、看護師、郵便局長、警察官、総動員で祭事を行っています。そうしないとたない。ここで交流を深めて、部落民とも、公民館とも仲良くやっていくという仕組みを作って、非常に盛大に行っています。そして種子取祭、自宅でもお祭りし、司が願う言葉と同じ言葉をかけています。これらの祭事は、島の言葉が分からなければできません。そのため、子供たちにも徹底して島の言葉を教えています。これは老人会が中心になって取り組んでいます。

³長老達。竹富町史編集委員会編『竹富町史第三巻 小浜島』竹富町役場（2011年）p.365

<コメント要旨>

花城 正美（竹富町教育委員）

（祭事に取り組む動機について）

ヤーマール⁴、深夜まで大変な行事かと拝察します。
これをする人も島では少ないかと思いますが、
何故こんなに熱心に続けていらっしゃるのでしょうか？



——10数年前、自分も久部良中学校で大変お世話になりました。そのときの同僚が与那国中学校の田原校長、久部良中学校の東浜校長、そして今日会場に来ている城間艶子（現、上地艶子）です。蔵元先生、東迎さん、与那覇さんなど先輩方がそろっているなかで、ずいぶん時間が経ったと思いますが、このようなテーマで今日一緒にお話ができることに大変感謝しています。

竹富島、西表祖納、干立と報告がありました。これについてはやはり、同じ竹富町である小浜島も共通する課題、一緒に考えるべき問題が色々あり、いい勉強になっています。小浜の結願祭は、小浜では節といいます。今日は結願祭の写真を持参しました。参観者も、70歳以上の方々から、若い者までが島では一番の召し物である手織りの着物を付けて、舞台を囲んでいるのが小浜ならではのものであり、まずは自慢したいと思います。長老から長幼の順で若い者が後ろの方から順に座り、食事をしながらですが、整然と過ごしています。

農耕に基づいて祭りが行われることは、どこも一緒だと思います。これに伴って、前本さんが仰ったとおり、かつては生きるか死ぬかの時代だから、神に対する敬虔な気持ちはすごく強いものがあつたのだらうと思われま。小浜の祭事は、この敬虔な気持があつたればこそ続いているのだらうと思っています。御嶽を大事にしているところは祭りも生き生きとしています。竹富にしても、西表にしても、御嶽には神々しさを感じる。与那国も十山御嶽を大事にしてこられたのが分かります。これは祭りとも密接に関わることだと思います。種子取については、朝、各戸主が種もみを水田にうずめたあと、家々の祭壇に祈る。それから各御嶽に行って、願のアヨーをするという流れになります。御嶽をすませてからお昼後に司の家、そしてヤマニンジュの長老の家から回ってきて、夕方、夜になると仲間を呼んだり、懇意にしている者同士で家々を廻ります。夜になれば酒が出て、三線を弾きながら、種子取のアヨーの歌詞（与那国にもあると思います）を歌います。

小浜の種子取には竹富の種子取や、小浜の結願祭のような派手さはありません。ニーウリなので静かにしなくてはならない⁵。三線や太鼓はなしに、祈りの気持ちが大切になる。これは

⁴ 各御嶽での祈願のあと、家々を回って古謡を歌い、稲の生長を予祝する行事。

竹富町史編集委員会編『竹富町史第三巻 小浜島』竹富町役場（2011年）p.395

⁵ どっしりと座敷に腰を下ろす人々同様に、苗代に撒いた種籾もしっかりと根を下ろすことを予祝する意味がある。竹富町史編集委員会編『竹富町史第三巻 小浜島』竹富町役場（2011年）p.395

アヨーにあたります。小浜にはアヨーが6曲あり、ゆっくりした歌です。なかなか興味を持たないということも、確かにあります。これには敬虔な気持ちがあればこそ、歌を年齢と共に好きになっていくだろうと思います。小浜のアヨーで一番難しい曲、ククルダギアヨーは、与那国のトゥグルダギの歌詞をもじっています。不思議なことです。非常に難しい曲を、お経を読むような気持で挑戦しながら、家々を回って続けていきます。自分が教職で現職の時には、これを朝までやってそのまま出勤したことがありました。ここまでひきつけるのは何か？幼少の頃には童歌や、島の民話とか、昔話を聞かせるなど、成長期に応じた話をするのが血となり、肉となると、現場にいて思います。これからも考えていきたいと思っています。最後に、繰り返しになりますが、このようなテーマで一緒に考える機会を与えてくださったことに感謝しております。今後とも、与那国と共に、発展できるよう一緒に考えていく機会を持てればと思っています。みーふあいゆー。



3. 小括 —シンポジウムを終えて

ここで、各パネリストからの報告をもとに、それぞれの島の実情から与那国の参考になりそうなポイントを抜き出して、紹介したい。それは翻って、それぞれ濃淡はあれども、今回ご出席頂いた各島にも共通するテーマではないかと思われる。

まず竹富島であるが、郷友会も含めた、祭事に関わる各団体間の結束力の強さがあげられる。その強さの背景には、行事ごとに会議を開き、議論して決めるという手続き重視の姿勢が感じられる。

西表島祖納集落では、屋館長の言葉を借りるならば、郷友会の人びとも含め、祭事に関わる人々が島というコミュニティの一員であるという高い自覚と誇りをもっていることが鮮明であった。この意識の高さは、祭事のたびに子供からお年寄りまで、必ず参加者には持ち場と役職があるので、そのような目に見える形で確認することができる。またそのような誇りと自覚

をどのように次世代へと伝えるかという点に関して、子供たちに教えるだけでなく、祭事に出すなど、思い切った工夫をしていることが分かる。もちろんそれだけが正解ではないが、地域においてどのような方法が最適か、工夫を凝らすための一つの参考にはなるだろう。加えて、今年は12年ぶりに干立集落との芸能交換会を実施したという。特にその交換会に出た子供たちが、普段は同じ学校に通いながら、そのときは公民館ごとに分かれて衣装を身に着けた姿をほめたたえ合う姿は、異なる集落でもお互いに交流をすることで、自分の集落への刺激と誇りに繋がっていくことを示す好例ではないかと思われる。

干立集落では、山下館長のような若い世代が引っ張っていることが印象的であったが、それは翻って、次世代に継承の役割と責任を早期に譲った集落の先輩たちの潔さをも表していると思われる。山下氏に教えた師匠は、70代まで現役で演奏していたというが、それは師匠の責任というよりも、次の継承者が世代的に山下氏まで空いてしまった空白を埋めるための、止むを得ない事情であったのだろう。それでも、若い山下氏に「祭りの歌を任せる」「お前の責任だ」という言葉をかけたのは、むしろ若くても次世代に任せようという潔さを表しているのではないだろうか。

逆に山下氏自身は大変なプレッシャーと責任感を感じて継承に取り組んでおられるが、このことは、継承において世代が空いてしまうことのリスクと、責任を負わされた若い世代の負担を如実に表しているように思われる。このことを端的に示すのは、山下氏自身が我々のインタビューに答える中で、自分たちより下の世代への継承には世代の空白がほとんどないのであまり心配しておらず、むしろ自身が先輩から継承した古謡などを、元々島の言葉がわからない島外出身者（つまり同世代の住民）に対してどのようにして伝えていくかについて、苦心している様子であった。

そして石垣長健氏の言葉からは、次世代に譲るにしても、そもそもどうやって祭事や、その中で演奏し、芸を披露することの面白さを指導者が教えられるかについて、その重要性とそれを示さなければならない教える側の責任の重さを表しているだろう。いずれにせよ、郷友会など島外の人びとと戦略的に提携して祭事の運営や継承を行おうとする竹富島などと比べ、むしろ島外出身者が多いにも関わらず、地域の中での継承に力を入れているように感じられた。

小浜島については、新本氏のお話からは地元コミュニティの結束力の強さがまず感じられた。特に結願祭では、島外出身の警察官や教職員なども一緒に祭事に参加することで、コミュニティの結束力がより充実したものになることが強調されていたが、そもそもこのような祭事を行う公民館を支える存在として、中主の存在は重要であろう。今回新本氏の話の中から詳細は述べられなかったが、本シンポジウムの前に大久英助小浜公民館長に我々がインタビューした際、この中主が郷友会など島外に住む島出身者を出演者として祭事に参加させる際、実質的な声かけを行っているとのことであった。また世代的にも、ちょうど40代～50代と、他の島では抜けている世代が中心的な役話を担っていることも、世代の空白を作らないという意味で、注視するべき点だと思われる。

このようなコミュニティの結束力の強さの背景として、花城氏が述べたような集落の祭事、神事に対する敬虔さ、真摯な取り組みの姿勢があるのではないだろうか。こうした態度を子供

たちに伝えていくには、やはり氏も述べたように、民話や昔話などを通して、いかに島の文化に親しみを持ってもらうかについての工夫が必要となるのだろう。それは、島外からの移住者を島の生活文化になじませようとする、西表島祖納における屋館長の取り組みにも通じるものがあると思われる。伝え方、なじませ方については地域ごとに工夫する必要があるが、いかにして伝えるかが共通の課題となっていることは、今後の工夫のためにも今回確認しておく必要があると思われる。



4. 展望 一人材育成に向けて

今回の八重山調査には、一般社団法人与那国フォーラムから小池康仁、與那覇有羽の2名が参加した。このうち與那覇有羽は現役の唄者であり、与那国の民俗芸能や琉球古典芸能にも造詣が深いことから、今回の調査地で演じられた芸能と、与那国の民俗芸能の間に、歌詞や唄のメロディ、踊り手の身体動作など、いくつかの類似性、もしくは共通点を見出していた。本事業では、芸能の継承のためにはどのような在り方がモデルとなるかを調べることに主目的となっているため、必ずしも芸能の技術に関する比較研究が必要なわけではない。しかし、與那覇有羽のような継承の現場に関わる若手が本調査に従事したことは、これから与那国が継承の方法を検討していく際に、上記のような芸能に関する現場での経験や知識の裏付けが有利に働くことは間違いないだろう。加えてどこの調査地でも、これからの与那国の継承を担わなければならない若手である與那覇が勉強のために訪れたことは、好意的に受け止められたと考えられる。

今回の調査をふまえると、継承のためにはその地域社会における様々な世代や社会的立場(行政、公民館、保存会など)の人びとが協力していかなければならないことは、どこの島でも共通しているように思われる。そのような中で、与那国フォーラムはどのようにすれば与那国の地域社会全体が継承にむけたスムーズな協力の仕組みを作ることができるのか、具体的な方法を考案していく必要があるだろう。

そこで、与那国フォーラムの一つの強みとして考えられるのは、與那覇有羽のような若手の継承者が事業に従事していることである。彼のような立場の人が、各世代や社会的立場の人びとを繋いでいき、社会の中堅ぐらいの年まで研鑽を積めば、ちょうど小浜島の中主のような、芸能の指導者層と若手を繋いでいくコーディネーターのような役割が担えるかもしれない。

加えて、本事業の調査を進めていく中で、現状を改善しようとする動きがみられることもわかってきた。具体的なものとしては、まず与那国民俗芸能伝承保存会の崎原孫吉会長が会の立て直しに動き始めており、また與那覇有羽の呼びかけに応じ、同会の師範や、若手の地謡などが唄三線の練習会を定期的に与那国島歴史文化交流資料館内で開くようになった。さらに、同会に所属する若手の女性舞踊家を中心になって、同会に属していない与那国の各集落にいる若手の女性たちと一緒に、踊りの練習会を発足させることになった。同会の発足時には小池、與那覇も同席させて頂いた。また、来年度以降与那国フォーラムとしても彼女たちの練習に協力していく旨、約束した。

特に若手の地謡や女性たちは與那覇有羽と同様に、今残っている各公民館の民俗芸能や唄三線の演目をできるだけ調べ、身に付けようと動き始めている。しかし問題は、現在30~40代前半が中心の彼女たちに対し、与那国では本来指導できるはずの50代~60代までの芸能経験者の多くが島外に出てしまったり、第一線から退いてしまったりして、継承には世代間の空白ができてしまっていることである。これを埋めるためには、自ら聞き取りをするなどして調べていかななくてはならないが、それをしない限り、何を残すべきなのか判断する情報が乏しいのではないかと考えられる。

そこで与那国フォーラムが行う支援の方法として、彼女たち若手と連携し、共に調べ、あるいは調査方法などを共有していくことが考えられる。加えて、與那覇有羽が発見したように、与那国で情報を得るのが難しくなっている、八重山にはまだ与那国と類似する芸能が残っている場合がある。そのため場合によっては本事業のような継承方法を学ぶ事以外にも、そうした八重山の芸能情報を調べることで、何らかの参考になるかもしれない。

そうした意味で、与那国島内で世代や社会的立場を越えた芸能に関する情報交換のネットワーク作りを進めると同時に、今回の竹富、西表、小浜を皮切りに、八重山の中でもネットワーク作りを進めていくことが、今後の継承を助けていくことになるのではないと思われる。その一助として、たとえば那根操氏が指摘したように、他の地域の芸能を見せ合う勉強会などが企画されてもよいだろう。

次に、そのような横とのつながりを意識して、与那国フォーラムが社会的に果たす役割についても考察したい。今回の調査では、与那国フォーラム内で事務局を務める小池、芸能の継承者である與那覇の他に、芸能研究者が2名ほど同行する機会があった。一人は(公財)沖縄県

文化振興会文化芸術推進課の遠藤美奈氏であり、もう一人は竹富町教育委員会総務課町史編集係の飯田泰彦氏である。二人とも当然ながら、与那国フォーラムとはそれぞれ別の業務でたまたま同行したに過ぎないが、それでも現場で聞いた専門家の立場からの視点とコメントは、対象地域の芸能に対して基礎知識の乏しい小池と與那覇にとっては、どこに注目して調査し、相手とコミュニケーションをとるべきか判断する際、大いに参考になった。特に情報交換のネットワーク作りという点において、芸能の情報を専門に扱う研究者の協力は（具体的な協力の在り方はこれから考えるとしても）今後とも不可欠なのではないかと思われる。

そうした意味で与那国フォーラムが今後本事業において社会的に果たすべき役割は、与那国の若手芸能者が、中長期的には次世代継承のためのコーディネーターとなっていくために支援していくことを目的として、当面①与那国の若手芸能継承者と島内の芸能継承に関わる様々な立場の人びととのネットワーク作り支援、②島外、特に八重山地域を対象とした、他地域の芸能関係者、及び研究者とのネットワーク作り支援、の2点に集約されるのではないかと考えられる。

このようなビジョンのもと、来年度の事業計画を作成していきたい。今後とも与那国町をはじめ、八重山ひいては県内外における関係各位のご指導、ご支援を期待するものである。

Ⅲ. 平成 29 年度事業報告

将来、与那国民俗芸能の中堅指導者層となる島の現役世代、及び次世代を担う子供たちへの人材育成を支援するため、与那国、及び類似性のある八重山における人材育成の状況を調査した。特に、今年度は当フォーラム職員以外に与那国の芸能の担い手を調査員として任命し、調査を通じて八重山の民俗芸能関係者とのネットワーク化、及びネットワーク強化を図っていく目的で、次のような調査を実施した。

与那国では、舞踊、地謡を中心に、町内の各座、及び与那国民俗芸能伝承保存会での練習を取材し、育成状況を調査した。調査は祭事行事のほか、カジキ釣り大会や町制70周年記念行事などの行事ごとに行われる練習、学校教育で行われる人材育成も対象とした。

八重山地域の中で前年度調査対象としなかった黒島、鳩間島、石垣島白保を対象に、与那国町内と同様の方法で調査した。加えて、今年度のシンポジウム、芸能交換会の受け入れ先である竹富島の種子取祭についても、昨年度に引き続き、練習と祭祀当日の2回に分けて調査を行った。

1. <調査報告・所感>

ここでは、今年度行った八重山での調査報告を記載する。調査員のうち、小池、田里、與那覇以外は当フォーラム職員ではなく、与那国の舞踊、及び地謡の担い手である。また與那覇は職員であるが、地謡の担い手でもある。

今回の八重山調査は昨年度の調査対象には入らなかった八重山の島々を中心に日程を立てた。昨年度は国指定重要無形民俗文化財を持つ地域に焦点を当てたが、今年度はそれに限らず、与那国と比較的状況が似ていると思われる八重山の離島をできるだけ広く調査し、それらの島々とのネットワークづくりを重視した。対象は、次の島々である。鳩間島（豊年祭）、石垣島白保（豊年祭）、黒島（東筋集落結願祭）、竹富島（種子取祭）。これらのうち、鳩間島の豊年祭は台風のため見学不可能となり、実際に調査ができたのは練習のみである。それぞれの旅程と調査員を下記に記載した。次に練習を中心に、各調査員の報告の一部を紹介する。

- ・ 鳩間島……………與那覇有羽、与那覇ひとみ、前濱由紀（練習：7月21日～23日）
- ・ 白保（石垣島）……………與那覇有羽、米澤恒司
（練習：7月23日～25日、本番：7月27日～28日）
- ・ 黒島……………田里鳴子、小池康仁（練習・本番：10月13日～16日）
- ・ 竹富島……………田里鳴子（練習：10月20日～22日）
米澤恒司（練習：10月20日～22日、本番：10月29～31日）
小池康仁（本番：10月29日～11月1日）

(1) 鳩間島豊年祭（練習）



①与那覇ひとみ（舞踊）

初めに感じたことは、在石垣、在沖縄の郷友会の力が大きく、そのメンバーが島の芸能を支えていると思ったことだ。特に婦人会が中心となり、舞踊の練習をしていた。やはり女性陣が、パワーがあると活気に満ちていた。同じく与那国でも嶋仲地区は女性陣のパワーがあり、芸能面でも行事がなくても自主的に練習している。

与那国は決して多くはないが、島に若手が戻り、行事や芸能に携わっているので、郷友会が島に戻り行事のために芸能をすることはないが、若手が戻らなくなると、鳩間島と同じようなことになるだろう。在石垣鳩間郷友会のメンバーの皆さんは、「鳩間のために」「行事や芸能を絶やさないように」「これからは若い世代をどうやって巻き込もうか」等、与那国と同じような現状が見られた。

聞き取りをして、私の中で疑問に思っていたことが確信に変わったものがあった。「芸能を受け継いでいかないといけない！」と強く思う瞬間に、そう思うのは何故だろうか。芸能を通して神と対話をしているかのように感じた時、この感覚を一人でも多くの人を感じる事で、芸能に対する感じ方や接し方が違ってくるのでは？と思っていた。この調査で「自分が芸能を奉納した時に神様と一体になれたように思えた。そう思えたことで、やっぱり芸能は大切だなと思った。」と話してくれる方がいた。難しいが、このような感覚をどうやって感じていくか、育てる側の姿勢もとても問われるような気がしている。

②前濱由紀（太鼓、舞踊）

私の母は地域の”チス（師匠）”と呼ばれる、踊り座の責任者をしていました。私自身、姉妹ともに物心ついた頃から踊りや太鼓など、地域の芸能に親しんできました。

鳩間島は与那国とはだいぶ違うというのが第一印象でしたが、若い人が少なく、移住者が多い、などの問題が共通している所が気になりました。芸能を見ると地域の芸能がもつ良さみたいなものが伝わり、豊年祭当日に演じられる芸能がどう踊られるかがとても楽しみになりました。

(2) 白保(石垣島) (練習)

米澤恒司(唄三線)

●横目博二さんインタビュー

- ・白保で研究所を開き、地域の芸能を支える中心となっている。
- ・一番気がかりなのは、アヨー後継者。御嶽で歌を歌える人がいなくなってきた。CDを流してやるところもある。唄が一定のリズムではないので難解で覚えづらく、余程興味のある人でないとできない。
- ・白保の方言は衰退している。その点、宮良部落は活発に継承されている。やはり、方言の中心は人数の多い登野城方言が中心。とうばら一まも、各集落の方言の歌い方が消えていつている。工工四ができたことも、消えていく要因になっている。とうばら一まは、登野城方言の歌い方がメインになっている。その点、与那国は離れているので、守られていると思う。
- ・横目さんは、元々、伊原間出身で、23歳のときに、当時住んでいた本島で大濱安伴先生に弟子入り。安伴教室では工工四を見せないで、先生と向き合い歌い方や指の運びを見て覚えさせるという指導方法で、横目先生もその指導方法を継承している。各自の感性を育てるのが大事。
- ・最初の頃は、「子供たちをあんなレベルまで教えてすごいね」とよく言われていたらしいが、実は子供に教えるのは労力はいらぬ。子供たちは素直に真似てくれる。学ぶことというのはまねる事。逆に、大人に教えるのが大変。
- ・横目さん自身、コンクールによって育てられたという意識が強く、生徒にもコンクールを目標に頑張らせている。しかし、子供は落ちた時がとてかわいそうなので、完璧なレベルに達してから受けさせている。
- ・部落の三線を弾くとき、流派の違いはあまり感じたことがない。
- ・白保では、親が三線を弾けないので子供に習いに行かせるケースが多い。横目さんは自分の子どもたちには強制的に習わせた。

●宮良操さんインタビュー

- ・25年間祭りの司会を行う。今年もサポートしている。
- ・白保学講座というのがあり、不定期で開催されている。70名くらい参加している。内地出身の参加者も多い。方言、祭りの由来、旗頭の意味などを学んでいる。こういうことを知ることはとても大切だと思う。
- ・豊年祭の2週間前に幹部会を開く(14~5名)。練習日などを決める。
- ・名物の「稲の一生」の行列が始まったのは、昭和23年から。その後ミルクも入って来たらしい。空港問題の時、公民館が二つに割れ、豊年祭も2回行われ、旗頭も2本あったらしい。空港問題が決着し、片方の公民館が自然消滅。平成8年から通常通りに戻る。
- ・青少年が豊年祭に参加し、体験させることが、将来的にとて大事なことになっていくと思っている。ここが一番のキーポイントだと思っている。
- ・今回の豊年祭は、四年生以上の子どもが参加している。幹部会で決められたらしい。あまり小さな子供が出ると、「おゆうぎ」みたいで豊年祭の質が落ちるといふ指摘があったらしい。
- ・稲の一生の行列は、4班に分かれて行われている。練習を見学に行った1班の班長は、本土出身。祭りのあとのブガリノーシで今回の大役を終え、地域の人に認めてもらったことをとて喜んでいて。今年の豊年祭のこと、来年に向けてのこと、真剣に議論していたのには驚いた。

(3) 白保 (石垣島) (本番)



米澤恒司 (唄三線)

- ・ミルクの行列と一班の「稲の一生」の練習を見て、本番さながら、とても真剣に行われていたと感じた。ブガリノーシも穏やかに行われていた。
- ・豊年祭本番を見て、時間は長かったがそれを感じさせない、本当に面白い豊年祭だった。見せる豊年祭だな、と思った。
- ・観客も非常に多く、とても熱気があった。たくさんの観客に見られているというのをモチベーションにして、頑張っているようだ。
- ・司会がとても上手で、色々説明してくれたことにより、理解が深まった。
- ・班が団結して練習、本番を行うことによって、地域のコミュニティの結束が強まっていると思う。
- ・白保も地域の人、Uターンの人、本土の人、いわゆる「合衆国」らしいが、とてもうまくいっているように見えた。
- ・若い地謡の人も見受けられたが、年配の人が多かったように感じられた。
- ・50代、60代の方が後輩のためにとても考えており、実際それに伴って行動しているなど感じた。組織的にもしっかりしているように感じられた。
- ・夕方から夜にかけて行うことで、とても雰囲気があったように思う。
- ・前日のムラプーリンの方が余興と神事も含めて、より白保らしさが感じられるのでは？と思った。
- ・今回白保豊年祭を見て、逆に与那国の豊年祭の独自性を感じることができたと思う。

(4) 黒島（練習、本番）



小池康仁、田里鳴子（与那国フォーラム）

今回調査参加の小池、田里は芸能の担い手ではないため、インタビューを通じて抱いた自分の感想ではなく、インフォーマントが何を話してくれたかについて報告する。具体的には、各インタビューにおいて相手の発言の中から、特に本事業の参考になりそうなコメントを抜粋し、「」で示した。



■ 10月13日 10:42

喫茶店（真栄里）にて、与那国出身者を家族にもつ蔵下芳久氏（文筆家）に、在石垣与那国郷友会や竹富島郷友会の状況、及び今後の与那国における人材育成の方法などについてインタビューを実施。「与那国の中では集落ごとの競争が無くなっている。昔は長期滞在の、旅の芸人から芸を盗もうとした。村同士で喧嘩になるし、做ったものは他の村には見せなかった。」

「与那国の民謡については、先輩たちの語る場が必要だ。『与那国の魅力を上げるために、どうするか?』。そういうものが『好きな人』を引っ張り出せばいい。」

「芸能を統一したら、衰退する。特定の歌ばかり継承することになる。」

「郷友会の参加できる、大きな大会を作ってはどうか? 石垣の郷友会は、すぐに動ける。」

■ 15 : 48

八重山商工高等学校にて、同校夜間部教員で与那国出身者であり、黒島出身者と結婚し黒島の郷友会員になっている比屋定由美子氏に、在石垣与那国郷友会と在石垣黒島郷友会、並びに黒島での芸能関係者の育成の状況と、黒島での祭事の運営状況などについてインタビューを実施。

「石垣黒島郷友会の意識は高い。距離的な近さが影響している。」

「(石垣からの)距離のためか、与那国出身者は価値観が他の島出身者と少し違っている。高校生でもそうだ。」

「与那国の人は、目指すものが外に向かっている。黒島は違う。黒島は、島に居られるなら、ずっとおつてもいいという。教育も、離島に貢献できることを考える。黒島でできることを考える。」

—田里:与那国では、各家庭に一人教員がいるといわれるくらい教育熱心だ。親は、島に帰って来るなど言う。

「与那国の生徒は競争心が強い。コミュニケーション能力が高い。島の外に出る経済力がある。」

「芸能は、黒島の方が活発。」

「与那国の子供は、沖縄本島に行くようになっている。自分の頃は、半々だった。郷友会の人数も那覇が多い。芸能については向こうだけでやっている。」

「与那国出身者も、呼ばれたら帰りたい。気持ちは今も、帰りたい。」

「黒島では、郷友会にも公民館にも師匠がおり、互いに教え合っている。役割分担が決まっている。郷友会でしか、継承していない踊りがある。黒島では、一人、二人でできる踊りのみ。郷友会は4人以上で出演できる。」

「郷友会では、教えられる人が師匠。黒島も入りやすい。踊れるのは、30~40代まで。」

「黒島ではだいたい各家庭に一本三線があり、遊びながら自然に弾いている。」

「与那国では、行事料理の形が決まっている。黒島は、あるものを使う。十五夜では、島の物を半々。ないときは、最中などのお菓子もある。」

—田里:与那国では、「用意できなければやらない方がいい」となってしまう。派手になった。与那国では行事、法事が派手。奥さんの負担。労力が違う。お金もかかる。

■ 20 : 00

たまなはそろばん塾内(大川)にて、在石垣黒島郷友会の練習を動画撮影。この日が結願祭前の最後の練習だという。同時に、在黒島郷友会東筋支会会長で地謡の高那真清氏、郷友会会員比屋定氏、郷友会員木所氏(医者、黒島と与那国島で数年間の勤務経験有り)に黒島郷友会における人材育成の状況についてインタビューを実施。

〈在石垣黒島郷友会の踊り手の女性(30代)〉

「八重山高校出身。中学生までは踊るのは好きではなかったが、高校に入る頃から踊りが好きだと意識するようになった。郷土芸能部のある八重山高校を選んだ。」

「研究所には通っている。習うのは八重山古典がほとんど。琉球舞踊は少しだけやる。先生は石垣島の人。ここにいる郷友会の指導者たちも、ほとんどが研究所の師匠だ。」

—小池:婦人会と郷友会、どちらが活動活発?

「どっちも同じくらい活発。ただ、島は人が少なく、島の女性は外に出て行ってしまいうのに、内地の人が嫁になったりしている。ほとんど内地の人ではないか。島にいと出演しなくてはいけない。だから、郷友会の方がうまいと思う。」

〈高那真清(黒島郷友会東筋支会会長地謡師匠)〉

—小池:もっと緊張しているかと思ったが。

「後継者育成のため、参加者を増やす努力をしている。参加しやすくしている。」

■ 10月15日 8:00

比江地御嶽にて、東筋集落結願祭の祈願を視察。同時に、東筋支会長又吉氏、副会長比屋定氏、祝賀会司会の比屋定修氏に挨拶し、修氏より、祈願の意味と奉納芸能の演目について聞き取りを実施。

■ 10:00

芸能館にてリハーサル見学。石垣黒島郷友会員で与那国出身の大底京子（旧姓：入福浜）氏が出演するということで、ごあいさつした。

■ 10:30

比屋定恵（元高校教諭）「子どもの学芸会の演目に、棒術を入れている。おのずと役者が育つように、演目を入れている。失われそうな芸能を学校の授業に取り入れるのは一つの手段だ。子供たちが島を出て行っても、演目を覚えた子供は戻ってくることもある。いざというときに、戻って来られるように。」

■ 15:30

奉納芸能終了。高那真清氏に、再び供物、及び最後に歌った神歌についての解説を受けた。「最後に歌ったのは、島をたたえる歌。昔はほか（の祭事）でも歌っていたが、今では年に1回結願でしか歌わない。そのため、継承が心配されている。今日歌ったのは、元地謡の人。彼しか覚えていない。これからの課題である。」（結願祭立てぶどうん。歌詞を写真撮影）

(5) 竹富島（練習）



米澤恒司（唄三線）

今回、種子取祭の練習を一日目の夜に「インノタ（西集落）」「ナージ（仲筋集落）」、二日目の夜に「アイノタ（東集落）」で見学することができました。

「インノタ」で印象に残ったのは、子供たちが真剣に練習に取り組んでいる風景でした。自分の踊り以外の時も、別の踊りを必死に覚えようとしている子供もいたり、まだ踊りができない子供たちも練習場に学校の宿題を持ち込み、とりあえずその場に参加していました。踊りを指導する上勢頭同子さんは、子供のときにいかに「すり込み」するかが大切だと言っていました。将来的に島を離れることがあっても、また種子取祭のときに帰ってきて参加したいと思うようにすること、それは種子取祭本番のときに、舞台がよく見える最前列に児童席を設けていたことにも表れていたと思われました。

「ナージ」では地謡の方が三線を弾きにきていました。その中学生の息子さんが笛を吹きに来ており、本番はどうかのかなと言っていました。種子取祭当日も立派に笛を吹く姿が見られました。また別の中学生にも太鼓を叩かせ、練習させていました。若い地謡も育っているように感じられました。また踊りの師匠はとても優しく、丁寧に指導しており、踊りの先輩に当たる人も後輩に適切に助言をしていました。とても和やかな練習風景のように感じられました。

二日目に行った「アイノタ」でも和やかに練習が行われていました。その日は地謡の方も踊りを合わせに来ていました。練習後に懇親会を開いてくださり、色々話を聞くことが出来ました。竹富島も内地出身のお嫁さんが多く練習に来ており、半分くらいの方がそうでした。今年の8月くらいに踊る演目と人を決めていたらしく、早くから準備をしているようでした。また難易度の高い踊りをする場合は、その中に一人だけ初めて踊る人を混ぜ、全体的にレベルを上げていくとのことでした。種子取祭本番当日に踊る人は、御嶽で「しばり」という行為を行い、本番が終わるとそれを「ほどく」ということをし、それで終わることが出来るという、興味深い話を聞くこともできました。

「アイノタ」での練習後、お世話になっていた大山榮一さんのご自宅に寄ることになり、榮一さんとお話する機会がありました。「種子取祭を何故受け継いでいくのか？そこには根本となる精神がないとダメであり、竹富島には「うつぐみ」（一致協力の心）がある。芸能という一部分だけを取り出して頑張ろうとしても、そこが抜けていると意味がないという、概ねそのようなことを力説してくれました。

また別の人から聞いた考えなのですが、御嶽などに祈りを捧げる祭事、神事と芸能や踊りというのは本来一緒の同じものであり、祭事、神事が廃れていくと、芸能や踊りも同じく廃れていくものだそうです。踊りや芸能は、普段自分たちが考えている以上に、色々な意味で深いものなのかもしれません。

今回の練習見学の祭、ずっとビデオカメラを回していましたが、自分たちの行為が一方的だったような気がしましたので、竹富の人にも与那国の練習風景を見学してもらい、お互いに色々感じ取ってもらえるようにできたら良いと感じました。また与那国のことが色々再認識でき、本当に良い機会が持てたと思います。ありがとうございました。



2. 芸能交換会・シンポジウム

「民俗芸能の未来のために、今できること ～継承者育成の実践と精神～」開催

(1) シンポジウム

前章で紹介した各調査員の報告をもとに、平成30年1月26日（金）芸能交換会、及びシンポジウム「民俗芸能の未来のために、今できること」を企画、実施した。

開催日：平成30年1月26日

会場：竹富町竹富島まちなみ館

<次第>

19：00 第一部：シンポジウム 司会：田里 鳴子

開会挨拶：宮良 純一郎（与那国民俗芸能伝承保存会相談役）

19：03 竹富公民館長挨拶 上勢頭 篤

19：06 来賓挨拶：仲田 美加子（公財）沖縄県文化振興会理事長

19：09 事業趣旨説明：田里 鳴子

19：12 調査報告 報告者：田里 鳴子、（アシスタント：小池）

・鳩間島

・白保（石垣）

・波照間島

・黒島

・竹富島

19：19 討論：（テーマ）「継承の実践：子供と祭事のかかわり」

討論司会：小池 康仁

パネリスト：亀井 保信（琉座間民俗芸能保存会顧問）

花城 正美（小浜民俗芸能保存会）

宮良 純一郎（与那国民俗芸能伝承保存会 相談役）

古見 代志人（祖納公民館館長）

山下 義雄（干立公民館館長）

三木 剛志（公財）日本離島センター広報・調査課長）

小岩 秀太郎（公社）全日本郷土芸能協会事務局次長）

20：20 第二部：芸能交換会

司会（演目紹介）：与那覇ひとみ（与那国） 内盛 朝佳（竹富公民館）

(1) 道唄（与那国）

(2) むりか星（竹富公民館 西支会）

(3) ちでいん口説（与那国）

(4) 安里屋（竹富公民館 東支会）

(5) 揚作田節（竹富公民館 仲筋支会）

(6) 与那国の猫小（与那国）

20：55 閉会挨拶：花城 正美

<シンポジウム概要>

ここでは①において、各調査員の調査報告で上がった事例をもとに、パネルディスカッションテーマ「子供と祭事のかかわり」設定理由について解説する。続いて、②において、実際のパネリストたちのコメントを掲載する。

①パネルディスカッションテーマ設定

前章での報告をふまえ、各地で調査員が目にした事例を抽出すると、下表1のようになった。

表1. 与那国の調査員が目にした事例

- ・鳩間島 …………… 特定の師匠がおらず、演目の経験者が後輩に教えている。
祝宴の出席者全員が歌う歌がある。
- ・白保（石垣）…………… 白保学講座（地域の歴史や文化を学び、後輩に伝えていく）がある。
- ・波照間島 …………… 特定の師匠がおらず、演目の経験者が後輩に教えている。
- ・黒島 …………… 郷友会にも公民館にも師匠がおり、互いに教え合っている。
郷友会と島の演目の役割分担がある。供物については、
あるものを使う傾向がある。
- ・竹富島 …………… 敬老会のおつまみをお菓子にするなど、
役員の負担を減らす工夫がある。
種子取祭に子供の頃から親しめるよう、会場に児童席を設けている。
難易度の高い踊りに新しい人を入れるときは、経験者の中に一人だけ混ぜる。

また、どの地域にも共通して言えることとして「和やかに練習している」、「全員のモチベーションが高い。そもそも祭事行事に対する意識が高い」といった点があげられる。また表1の事例の継承への効果を推測すると、主に表2のような効果が得られると仮定した。

表2. 継承への効果

- 教えられる人が教える。ゆるやか。→師匠の負担が少ない。精神的に、演者が参加し易い。
- みんなで歌う歌がある。→演者個人の過重な負担がかかりにくい。
- 少ない役員の負担を軽減する仕組みがある。→役員確保がしやすくなり、運営効率が上がる。

表2の効果や、共通項である「和やか」な雰囲気や、「意識の高さ」の背景には、一体何があるのでしょうか？このヒントとして、種子取祭の米澤報告が端的に表しているが、たとえば島のために一致協力しようとする「うつぐみの精神」などがそれにあたるだろう。与那国では「ゆい」という言葉に置き換えられるだろうが、これらは行事を行う際の、ある種の郷土愛、あるいは誇りを表す言葉として参加者を動機づけていると考えられる。では、この誇りや郷土愛の背景には何があるのかと考えれば、本調査で各調査員が共通して指摘しているのは、これらの行事が神行事であり、そこで行われる芸能はあくまでも供物として神にささげる、奉納芸能である、という理解である。つまり、この神行事を

自らの誇りとする動機づけによって祭事を運営し、そこで奉納芸能をささげることができる人材として、次世代の芸能の担い手を育成していると考えられる。

これが意識の高さをはじめとする、様々な効果の背景にあるとすれば、このような動機付けはどのようにして育てられるのだろうか？このヒントも、上記の米澤報告にあるように、子供の頃からの「すり込み」、すなわち幼い頃から祭事とその意味に慣れ親しませ、経験を積ませ、それが次世代の島人の誇りとなるように導いていくという方法であった。

翻って、本報告書では詳細は省くが、25年前から続く学校教育（郷土学習）をはじめとして、与那国の芸能に関する子供への教育は技術教育としてはかなりレベルが高いと考えられるが、継承者の減少に照らして考えれば、この精神的な部分、つまり祭事への動機付けを可能にする経験の積み重ね方に、まだ改善の余地が残されているのではないかと考えられる。もとより、米澤報告にある「すり込み」のほかにも、地域によって様々な経験のさせ方があるのではないだろうか。

そこで、今回は次世代の人材育成において、まずは芸能に入っていき動機付けをどのように工夫していくべきか？という視点から、ディスカッションテーマ「子供と祭事のかかわり」を設定することとなった。また同様に、本シンポジウムの副題を「継承者育成の実践と精神」としたのも、継承に向けた具体的な実践を工夫すると同時に、祭事において芸能を奉納するという、その精神性も重視すべきだろうという意味から、設定した。

討論テーマ「継承の実践：子供と祭事のかかわり」

【質問概要】

与那国では、中学生から学校教育において、郷土芸能を学びます。その取り組みは始まって以来、既に25年に及び、多くの生徒が与那国の民俗芸能を身に付けて卒業し、島を旅立っていきました。しかし、島内の祭事において芸能を担う立方や地謡は、現在まで減り続けています。

そこで、こうした子供たちが卒業後も祭事のために島に戻って来られるように、各島の皆さんはどのような工夫（継承の実践）をされているのか、参考のためご紹介頂けないでしょうか？たとえば竹富島では、種子取祭に子供の席を設けて参加させるなど、祭りと積極的な関わりを持たせながら「うつぐみの心」を育てていると伺いました。

ここでは特に、中学生までの間における祭事との関わりに焦点を当て、皆さんが地域の中でどのように子供を祭事、もしくは祭事の芸能に、またどのような目的で、どのように参加させているのかご紹介頂き、さらに今後の課題があるとすればどのようなことか、お教え頂ければと思います。

②パネリストコメント紹介

それでは次に、実際のパネルディスカッションにおけるパネリストのコメントについて紹介したい。

■ 宮良 純一郎

私は島を離れて54年になる。しかし、幼少期の頃の島での記憶は、今でも脳裏から離れない。そして、父が戦地から帰ったのち、与那国の民俗芸能を復興しようと取り組んできたのを見てきたこと

から、今日お話をさせて頂くことになった。

今日は後継者育成という問題に関して、与那国の民俗芸能の特徴を2点ほどお話ししたい。一つは、公民館の「座」制度によって継承、発展してきたということだ。「座」には、棒座、踊座、狂言座、組座などがある。いつごろから始まったのかは定かではないが、恐らく明治頃から入ってきたのではないかと思う。その「座」制度が隆盛を極めていく中で、「おらが村の芸能はこんなに素晴らしいんだ」といって、「スブグトゥ（勝負事）」という言葉で表されるように、各集落が競い合い、高め合うことになった。それが民衆のエネルギーを生んできたのではないかと思う。

2点目は、与那国民俗芸能伝承保存会の存在である。名前はいろいろと変わってきたが、戦後の復興期、1954年に組織が立ち上がり、戦後ずっと守ってきた。いわば、戦後復興のルネッサンス的な空気を引き継いできたのだと思う。1970年には、会員の力によって与那国島の民謡工四ができた。これは、非常に画期的な、文化的にも価値の高い文化遺産だと思う。継承という視点でとらえれば、この公民館活動の「座」制度と、伝承保存会は、縦の流れになぞらえることができると思う。そこが機能活性化することによって、横の広がりができると思う。学校でいえば郷土学習であり、民間で言えば研究所、あるいは郷友会の関わりだとか、今日のような各島のネットワークだとか。先達が残してきた文化的遺産をどう守っていくかという視点に立てば、そこにヒントがあるのではないかと思う。

■ 亀井 保信

長年芸能を教えてこられた大先輩方がたくさんおられるが、自分は今、子供の三線教室などをやっていることから、今回竹富公民館長より依頼を受け、ここでお話することになった。

我々は、なぜ芸能を守るのか？それが根本的な問題。なぜ芸能を保存継承して、大切にしていこうとするのか。僕は、芸能にはすごく力があると思っている。沖縄戦が終わり、収容所に入れられた中でも、芸能をすることによって心を癒され、復興の原動力となったという、有名な話がある。芸能には、皆の心をつににする、そういう力があると思う。我々が守っている芸能の背景には、神様がいます。祭祀行事の中で、芸能は神様への奉納芸能として演じられてきた。だから種子取祭でも、「これは単なる見世物じゃないぞ。神様に対する奉納だから、そういうつもりで演じなさい」というように、若者たちには教え、先輩たちからも「クムチだよ」「立派な供物をささげよ」と教えられる。芸能を「守っていこう」と、「楽をしてはいけない」と思う背景には、「とても大事なものだ」という動機がある。例えば、竹富島から種子取祭がなくなったどうなるか？あるいは、小浜島から豊年祭や、結願祭がなくなったら、どうなるか？西表島祖納、干立から節祭がなくなったら、どうなるだろう？非常に殺伐とした、つまらない、ぬくもりのない社会になるだろうと、想像している。芸能を見ることによって、みんなの心をつににする、そういう力が芸能にはあると思っている。

今、与那国島の例で、どうすれば後継者を育成していけるか、芸能を継承していけるかということが、大きなテーマとなっているが、芸能を保存継承していくためには、まず子供の時から芸能に触れさせるということが、すごく大事なことだ。竹富島は、それが割とうまくいっているのではないかと思う。一例として、我々が住む石垣の保存会で郷土芸能の練習をするとき、父親は、そこに子供を連れてくる。すると、子供たちは親たちの練習を見て、「曾我兄弟」など、セリフを完璧に覚えてしまう。これは非常にいいことだと思う。そういう意味で、芸能に小さいころから触れさせるということは、とても大事だ。次に、指導者がいること、保存会という、保存継承のためのきちんとした、組織があるということ。そしてその組織を運営していくための、財政的な支援があるということ。そして、地域の芸能に誇りをもつためには、他の地域との芸能の交流がとても大事だと思う。交流することによって、「おらが村の芸能はこんなに素晴らしいんだ」ということがわかる。それから最後に、芸能の継承のため

には、その地域に人がいなくてははいけない。そのためには地域の産業や経済の話になっていくが、それはまた別の問題になるので、私からのコメントはここまでにしたい。

■ 花城 正美

私は、四つの面からお話したいと思う。私たち小浜は、公民館組織に公民館長、今日大久公民館長がいらしているけれども。副館長に北集落、南集落の部落会長、「ユームス」という。その下に「タブサ」などがあるが、今日のテーマである祭祀行事の継承について言えば、中主という役割がある。彼らが実戦部隊となって頑張っているわけで、北集落、南集落に若干名いる。彼らは55歳になると卒業するが、中堅では彼らが一緒に頑張っている。中主の中でも、踊りをどうするかということになると、女性のミンドウ中主という。また男性の狂言や棒、小道具づくりなどで、頑張っている。

私も三年間、久部良中学校でお世話になる中で、与那国の芸能にどっぷりとお世話になった。与那国も課題がある中で、小浜も、決して万歳というわけではない。後継者、子供たちをどのように育てていくかについては大きな課題だと思う。そうした中で、子供たちの踊りについては、お盆の時にソーラブンドゥルというのがある。子供たちは幼児から小学生までニムチャーの中で、三日三晩踊る。中学生になると、兄さんたちに憧れて、笛を連れて吹く。成人するとニムチャーニズとなって、太鼓やら鉦鼓やら三線やら、そしてニムチャーをしながら、ということ、子供たちの関わりがある。あと一つ、結願祭においては、庭の奉納芸能では、獅子、棒、太鼓、中学生男子、高校生男子が、勇ましい恰好で頑張る。女子については、舞台の奉納芸能の中で、数々の踊りがある。島の子どもたちを中心にとということになるが、学校の授業の一環として参加している。郷友会からの参加も、盛んに呼び掛けている。郷友会の参加に関しては、竹富島のようなきちんとしたやり方がなされているということではないのが、小浜のこれからの取り組みなのかな、と思う。

さて、私たちの地域家庭で、これからどのようにしていくかということになると、私も、教員生活の中で、小浜で勤務したときに子供たちが三線を始めた。私も、最初は三線の後継者を、ということで始めたのだが、学校教育の中なので、今の継承の問題など含めて、別問題ではないけれども、私が実践の中で強く感じたこと、一つ目は「子供の感動を呼び起こし、生きる原風景を作る」。このことは、芸能を通じて自分の根っこに気付く、生まれ島の素晴らしさに気付く、島を愛する子供を作りたい、と。二つ目に「直接参加して、他の人のまねをしながら、体験知を習得する」。これは身をもって体験する中で、考えて行動し、理解する、感動と喜びを味わってほしいと。三つ目は「演者となって、自分の内に、身体的表現力を身に着ける」。これは、型にはまった動きの中でも、その人らしい個性が発揮できればなあ、と。四つ目に「民俗芸能との出会いから、地域に生きる力を培う」これはとても大事かと思う。「地域の社会性」「共に生きる」「地域をより良くしていこう」という、こういうことを学ばせたいという思いで。これは学校だけではなくて、地域も一緒に、共通理解でできればなあ、と。これを今も大事にしているところだ。小浜の場合は、やはり地域からの励ましの声、キョングンヤーのじいちゃんたちの激励の言葉、これが子供たちにとって大きな力になっているかと思う。「地域とのふれあい」「生活のふれあい」「老人とのふれあい」。こういったことをたくさん学ばせてもらっている。

その中で、特に小浜で感じることは「褒めてるなあ」と。子供たちをうんと褒めている。この「褒める」「認める」ということが、やはり自己肯定感であるし、また子供たちがやる気を増していくかな、と思うところだ。その中で、「課題と展望」と書いたが、大人に関しては、竹富も然りかと思うが、外からのお嫁さん、外から生活のためにいらっしゃる方々がいる。こういう人たちを行事に、祭祀に、できる範囲内で抱き込むことが出来ないか？ということが共通の課題だと思われる。それと子どもたち。このような、魅力的な文化を子供たちに紹介していくのが大人の責任だと思うが、スマホなどのように、

現代社会のバーチャル化が進んでいく中で、果たして子どもたちが民俗芸能の魅力をどのように受け止めているかな？ということがある。だからこそ、島の子どもたちに島の芸能、文化をしっかりと伝えていくことが私の大きな課題、展望だと思う。



■ 古見 代志人

祖納では、公民館長が民俗芸能保存会長をやれ、といわれている。祖納は字西表の中心なので、西表民俗芸能保存会となっている。祖納は西部地区では一番古い部落だと言われている。稲作を中心とした文化が発達してきた。こちらで、この資料の中に、どういう行事があるか、どういうふうを受け継いでいくか、ということが書かれている。こういう行事の中で、子供たちが民俗芸能に触れ合う機会はたくさんある。

国の重要無形民俗文化財指定を受けている、節祭、「シチ」というが、シチを中心に、子供たちがいかにしてやっていくか、ということをお話したい。シチは、西表では「氏組のお正月」といわれており、「動ける者は、一役はやれ」というぐらい厳しい行事である。「身内が死んでも、これが済んでから葬儀を出せ」といわれるぐらいだ。僕らが、55年前だと、人が多くてシチに参加したくても参加できない、ということだったけれども、今、地域が150名足らずと。そして、小学生から中学生まで含めて、10名と。いう形で、彼らも皆、主役である。二十日間の練習の中で、子供たちは一日も欠かさない。学校に行きたくなくても、これだけはやる、ということでやっている。「自分たちは、あてにされているんだ」という形の中で、子供たちが動いている。だから小学校の高学年になると、祖納の舞踊の一つであるマルマボンサンは、全部踊れるし、これはもう、神行事だけではなくて、一般行事、仏行事の中にも、子供たちが積極的に参加するものだと思っている。子供たちがシチに関わる中で、中学生にもなると、指導者である。青年以下は、二役も、四役もやらなくてはいけないので、つきっきりで指導することはできないので、棒踊りなどは、中学生が小学生を教える、という形の中で、三日間の行事をする。

これが最後に終わってブガリノーシとあるが、この道中みんな一緒に席をつくり、酒は出さないが、一人前の人間として料理も出し、やっている。この子供たちが、15歳になると島を離れる。何年か後に島に帰っ

てきたときに、「自分たちが指導者だ」という形の中で捉えていけるものなんだ、と私は信じている。

■ 山下 義雄

時代と共に変化していく価値観、価値観を見つめながら、子供たちの夢や、将来の目標として、伝統文化を受け継いでいくことをより、現実的に考えさせていくことが、大切ではないかと思っている。初めに、価値観の変化ということについては、今感じていることは、現代の子どもたちは生まれながら、テレビや、スマートフォン、またパソコンなどで、インターネットやSNSなど、いろんなサービスを利用して、また衛星放送や動画サイトなどでも、多種多様なチャンネルを視聴することができる。そういう日常がある。離島という、これまでのゆるやかな時間の流れの中から、もう瞬時に、全世界規模で、この情報交換や、視聴などができ、変化のスピードが速い暮らしの中で育っている、ということだと思う。そして今後は、外国からの観光客も増加することが予想されており、様々な国や地域の、人やモノ、情報が、いろんな島々にも流通して、そして日々新たな世界が生まれていく。そのような中で、多情、多感な、年頃の子どもたちにとっては、将来の夢や、憧れを抱く事柄というのは、やはり地域の外にある世界に、向かっているように感じる。また最近では、子育てをする親世代の多くが、観光に関連する、職業従事者になっていて、農業や漁業といった、第一次産業の後継者不足、ということが、本来、民俗芸能に込められた、厳しい自然に対する願いや、感謝、あるいは、共に働く、共同で生産する姿勢など、自然や人々を思う気持ちを、幼少期から感じさせる機会を、減らしてしまっているのではないだろうか。

そういったことから、伝統行事のみならず、地域や学校などで、様々な体験学習を実施して、その中で自分自身の経験から、生産する楽しさ、苦勞、収穫の嬉しさ、喜びなどを味わわせていくことが大切だと思っている。参考例として、現在、西表小中学校では稲作体験学習、これは昭和55年からやっている。それと海の体験学習、これが昭和57年から。そして紙すき体験学習、これは昭和54年度から。三大体験学習として実施、継続されている。稲作体験では、できるだけ機械や農薬に頼らず、生産する苦勞や難しさを経験させる中で、実際に、アヨーとかジラバなど、節目ごとの古謡、これを指導してくださる先輩方と歌いながら、方言や言葉の意味を覚えさせて、先人たちの功績、あるいはその思いを感じさせている。海の体験学習では、1年ごとに刺し網で魚を採る漁業体験、それから帆かけサバニの操船体験、そしてシュノーケリングとダイビング体験を実施しながら、自然の美しさや、恵みを頂くことを経験させ、自然とのつながりを認識させることで、現在の環境への配慮を学ばせている。そしてまた、紙すき体験では王朝時代からの歴史文化、この紙すきの文化を学び、そして小中それぞれの卒業生が中心となって、原料の採取から、紙を自分自身の手ですき揚げて、本当に千年もの間保存されるという、アオガンピの和紙の、卒業証書製作を行っている。このような体験学習をさせることも、これから島を離れる子供たちが、自分の夢や将来を考えるときに、伝統行事や民俗芸能を継承していくことが「本当にこの島々に、長く暮らしてきた人々にとって、楽しく、充実した人付き合い、本当に幸せな生活に、つながっているんだ」という、そういう価値を、見出させていくことにつながると思う。

そして、現在この貴重な民俗芸能を伝承されている方々が、地域住民や出身者、これから島を訪れる観光客にとっても、素晴らしい文化に触れるための大切な人材であるということをさらに称えて、島の子どもたちが憧れるように、存在価値を高めていくことが大切だと思っている。島にいる間は民俗芸能に触れる機会が多いと思うが、進学そして就職と、島を離れた時、その価値観がこれまでのように「当たり前」という考え方から、「生きがい」や「誇り」、自分自身のルーツとして、かけがえの

ない宝物になることを願っている。

■ 三木 剛志



昭和28年から作っている、「しま」という広報誌がある。この編集担当をしている。島を色々歩いている中で、今日は、内地離島の例を紹介してみたいと思う。文化も含めた地域振興の具体例ということで考えると、大分県の姫島という島がある。瀬戸内海の島だが、ここに新暦の盆行事が伝わっている。大きさは、竹富島よりも一回り大きいぐらいの島で、人口2,000人いる。一島で一村、姫島村。漁業の島である。

ここが、島外からのお嫁さんを除くと、よそ者はほとんどいないといってもいい島。人の輪と地域のきずなをことのほか大切にする気風がある。例えば成人式には、ここでは晴着を一切着ないという不文律がある。住民間で差をつけない、そういう文化の島。役場職員の給与を全体的に大きく引き下げ、その分たくさんの人を雇用する仕組みがあり、村民の13人に一人が役場職員という、そういう村である。

ここに、国選択無形民俗文化財の盆踊りが鎌倉時代から伝わっている。新暦の8月15日の前後三日間行われている。一つの口説きに合わせて50種類以上の踊りが演じられるという、非常にユニークな盆踊りである。伝統踊りと創作踊りがあり、伝統踊りの方で、子供に関するものは「キツネ踊り」が有名。ある地区の男子小学生だけだが、顔を白く塗り、紅で髭を描いて、キツネのしぐさをまねて踊る踊り。本番の十日前から地区の大人の師匠が指導して練習するのだが、伝統の継承を強く意識させて、とりわけ腰使いと足運びの型をしっかりと教える。ときには「木刀をもってシバくこともある」という話を聞いた。それぐらいの厳しい指導で伝えてきており、子供たちの間にも競争心があるものだから、しっかりついてきていたということだ。約50種類の踊りがあるから、幼稚園から小学生、中学生、高校生、青年、壮年層まで、必ずどこかの組に組み込まれて踊るという島である。

こうした芸能の継承要因は三つあるように思う。一つ目は、学校教育。小中学生が100人いる島だが、小学生は地域で指導する。中学生は学校の「ふるさと教室」という時間を使って、地域の人が、

口説きや太鼓、踊りなどを指導している。二つ目が外部評価。島内7地区あるが、その全てを回って踊り、最後に中央広場で観光客の前で必ず踊ることで、緊張感もあって、連帯感も鍛えられる、そういう効果がある。3点目が、世代を横断する地域力。この島には、子供から老人会まで、各組織とサークル、年間行事もたくさんあるので、子供の頃から自然に社会参加する環境が形成されてきている。もちろんその背景には、しっかりした産業基盤、たとえばクルマエビ養殖で年間6億円の水揚げを上げている。そういった基盤がしっかりと存在していることもあるだろう。

課題も3点ある。一つは少子化。最近では子供たちも仕方がなく参加しているという傾向になってきている。二つ目は、偏った着目。観光客も島の方も、キツネ踊りにばかり注目する傾向が高まってきており、他の踊りを見ないまま帰ってしまう人もいようだ。そういう「見世物化」が少し進んできているのではないかと。3点目が、リーダーシップをどうやって継承していくか、という問題。昨年、61年ぶりの村長選があった。それまで連続8期、無投票で当選されてきていた。もしこの強力なリーダーシップが無くなってしまうと、文化や芸能を継承してきている村民の結束がどうなるのか、今大きく心配されている状況だ。

■ 小岩 秀太郎

私は東京に住んでいるが、元々は岩手県の生まれ。今大雪で、30センチ、50センチ積もっているけれども。ずっとそこで、18まで育ってきた。それから東京の方に出て行かなきゃいけない。「行かなきゃいけない」というよりも、「田舎に住んでたくないから東京に早く出たい」と思って。ずっと小さい頃から、私、芸能をやっている。鹿踊り(ししおどり)という、鹿の芸能を、ずっとやっている。だけれども「その芸能は好き」、けれど「地元は好きじゃない」。「何でか?」という、仕事はないし、皆、おじいさんもお父さんたちも、1回外に出て、「いやあ、全然、東京に出てみたけれども、(言葉が)なまってやると、東京の人たちにも馬鹿にされるし。だけど、田舎に帰っても仕事はないし。じゃあ、どうすればいいんだよ?」っていうような形で、嫌な話ばかり聞かされてきた。それで結局、今日、竹富に来て、あるいは沖縄に来て、この芸能の事情をやっぱり皆さんのことを見てみると、芸能の話をするときに、これだけの人が集まって、お話を聞いてくれるっていうことがまずない。じゃあ郷土芸能であったり、民俗芸能あるいは伝統芸能という名前が、もうすでに「古臭いもの」、あるいはやってる人たちも「どうせ、年寄りばかりでしょ」みたいな、イメージっていうのが日本全体的に。私、全国の郷土芸能にたずさわる協会にいますので、聞いていると大体そう。そうなるに住んでいる人たちが、嫌なところに住んでいるんだと思ってしまうがちなところがあるのと、郷土芸能は「古いものだ」って思っているものが合致して「この町には住みたくない」ということになる。だから今日、ここまでのお話を聞いていると「この地域に住んでいたい」あるいは、「お父さんたち、お兄さんたち、お姉さんたちが、格好いい姿を見せる芸能をやっている人たちが非常に多いな」っていうふうには、やはり感じる。その『「格好いい」『憧れる』』というものを、どこで教えるの?』と聞いたら、それはやっぱり、学校であったり、小さい頃から、そういうものに触られる環境というものを、「作っていた方がいいよね」って、皆思う。

だけれども、今度は宗教問題に入っていく。今日、向こう(西塘御嶽)に頭を下げて。私も一番最初に行った。昔から「神社に向かったり、お寺に向かったり、ケツ向けたり、その前で、屁こいたりすんなよ」って言われて、怖がらされて生きてきたからそういう風になるわけだが。そこをすっ飛ばして、そういう世界も教えないでやってきたっていうところが大きくて。やっぱりここちょっと教えつつ、それを、でも学校で宗教問題とか教えられないっていう話、「バカなことがあるか!」って思うのだが、そこはどうしても関わってくる。じゃあ、そこはどういう風にするかと思ったら、郷土芸能は、宗教的な部分、信仰的な

部分もそうだが、皆さんが、皆で育てていく場所。「先生も、親も、地域も全員で育てていく場所なんだよ。」しかもそれが表現力につながったり、さきほど花城さんも仰っていたが、そこで、どんどん自分たちの表現、あるいはこの地域の『売り』を皆で教えていく。「次の世代に伝えていったり、外国人に教えていったりするような、資源作りの場にもなっているんだよ」という見せ方をしていけば、もっと芸能は楽しめると思うし、地域のことをもっと誇りにもてると思う。

そういった部分を「気づいてみましょうね」と、最近、私は言うようになった。そして、「郷土芸能をやってて良かったな」、郷土芸能をやっていることによって、私、東京にいてもこうしてなまってる話したり、あえて芸能をどんどん見せていくという格好を、見せたりする。なんでそういう風になってきたかっていうと、岩手の生まれで東日本大震災があったからっていうのはすごく大きい。皆さん、田舎の人や地方の人たちは、震災があったことによって、「芸能って、何だったんだっけかな？」っていうことをもう一度考えるようになってきた人たちが非常に多くなった。何故かという、亡くなった人が非常に多かったから。それまでも芸能って、八重山の皆さんもそうかもしれないが、見世物だけではなくて、ずうっと、お葬式のときに、私も鹿の格好をして、拜む。それをずっとやってきていた。でも「それは行事の一環でやったものだったな」ぐらいの感じだったのが、だんだんそれが本当に、その格好をしてみることによって、「何で獣の格好なのに、人を拜むのか？」で、その、格好を変えてみることによって、改めて感情を、心の内に入れて、そこで「本当に泣ける」とか。本当に先祖の事を考えられる、というような状況になっていくということを、改めて皆感じたようだ。そこで癒してあったり、あるいは「生活、地域を復興させていこう」という思いに、皆力を結集させて、一丸となると。なりやすい芸能の力というのは「本当にあるんだな」というものを感じて。岩手県は民俗芸能の宝庫っていわれて、千以上芸能を持っているのだけれど、そういったところを見れば、その千以上の芸能団体が、皆さん思い直して、で東北の人たちももっともっと、芸能がたくさんあることも思い直して「考えてみましょうね」というところから、だんだんと郷土芸能が見つめ直されているというような状況になった。

だから沖縄の、あるいは竹富、八重山の皆さんが、ずっとやってきたことは間違っていなかった。で、「若い人たちがこんなにいる世界があるんだ、公民館長がこんなに若い人がいるんだ」という地域に生まれている。「地域のことが言えるということは、非常に素晴らしい地域だな」という風に感じている。

(2) 小括



「子供と祭事のかかわり」というテーマの中で、各パネリストからそれぞれの地域における子供の祭事への関わらせ方、あるいはご本人の指導の経験について語って頂いた。お話自体は、それぞれ多様な経験に基づいているため、一見多岐にわたるように見えるかもしれないが、多くの共通項があることに気づく。

まず、大きな背景としていえることは、かつての農業や漁業といった、自然を相手にする生活スタイルから、島の生活も都市型の生活スタイルへと変化してきており、それが祭事の継承にも影を落としてきている。その影響として島の人口減や少子化、進学とともに島を離れざるを得ない、地域の伝統や言葉への親しみが薄れる、といった問題があり、そうした生活スタイルの変化の中にあって、どのようにして芸能や祭事の継承を行っていくかということが、全パネリストに共通の問題意識であると思われた。

その視点から整理すると、与那国の宮良氏からは、現在継承が危ぶまれているけれども、公民館に加え与那国民俗芸能伝承保存会を中心とした継承の在り方が戦後の復興期のルネサンス的な雰囲気の中で、まさに地域復興の一環として行われてきたことをお話頂いた。氏のお話から、この戦後続いてきた与那国の継承方法が、現在の変化の中で岐路に立たされている、と理解して良いのではないだろうか。続く竹富島の亀井氏は、宮良氏と同様に、戦後の復興期を例に挙げ、まず芸能には、地域の人々を結束させる力があると力説し、そのうえで保存会での具体的な取り組みの紹介を行って頂いた。小浜島の花城氏はこれに対して、これからの課題のなかで、外からの移住者や、お嫁さん、そしてインターネットやスマートフォンが普及した現代社会に生きる子供たちに、どうしたら祭事や民俗芸能の魅力を感じてもらえるかという、現在進行形の変化にどう対応するか、ということをお話されていた。この変化の問題に、祖納公民館長の古見氏と、干立公民館長の山下氏は、それぞれ地域での取り組みをお話頂いたが、古見氏が節祭を中心とする祭事での子供への経験のさせ方をお話されたのに対し、山下氏は祭事や民俗芸能を理解するための基礎的な経験として、自然や地域の伝統文化に触れる学校と地域の取り組みについてお話頂いた。日本離島センターの三木氏もまた、姫島の事例の中で、芸能に対して人口減少と、見世物化が進み、芸能の本来の意味が薄れていくのではないかと、という危惧を提示している。全日本郷土芸能協会の小岩氏が話す岩手での経験も、他のパネリストと同様の変化の中で、「宗教問題」として

ないがしろにされがちな精神文化について、民俗芸能は地域や学校、家庭の大人たちが皆で地域の良さを教え、伝えていく場であるとして、精神文化を見直すための視点の転換を提起していた。そしてその転換のきっかけとなったのが東日本大震災の経験であり、そこで芸能が、地域復興の原動力になったことを強調している。この震災の経験は、宮良氏と亀井氏が強調したように、芸能の力が復興の原動力になったという、戦後の経験とも重なってくる。また小岩氏の指摘する「地域の良さを伝える場」としての民俗芸能は、より具体的に言えば、花城氏が自らの実践に基づいてお話された「生きる原風景を作る」「体験知を習得する」「身体的表現力を身に着ける」「地域に生きる力を培う」という四つの課題に重なるのではないだろうか。

恐らく、戦後復興の原動力としての芸能の力というのは、与那国と八重山で共通する経験だったのではないだろうか。そして現在は、少なくとも与那国においては生活スタイルの変化のために、もう一度これまでの継承の在り方を見直す必要に迫られているのかもしれない。そのように継承の在り方を見直す中で、さらに具体的に、例えば竹富島や小浜島、西表島祖納、姫島のように幼年から中学、あるいは高校まで、年齢に応じた役割、また小浜のように「よく褒めている」、あるいは祖納のように「あてにされている」というような、子供たちにやりがいを引き出すような参加のさせ方、指導方法など、各事例を参照していくことは有益ではないだろうか。加えて山下氏のお話された体験学習についても、同様の取り組みは与那国にも学校の郷土学習という機会があるので、これとの比較などを通じて参照していくことも重要かと思われる。

さらにこの変化への対応としては、花城氏の子供たちへどう伝えるかという課題に対し、山下氏は逆に、民俗芸能の伝承者である先輩たちの価値をいかに高めていくかという問題提起をしている。これも、全国では民俗芸能が「古臭いもの」として価値が低められがちになっていたという小岩氏の指摘を先取りする課題提起、とも考えられる。このような価値感の転換は抽象的で難しいかもしれないが、そこにこそ小岩氏が紹介した東北での震災の経験など、他地域の経験を知る交流の機会が有効かもしれない。

民俗芸能を継承していくには、特に宮良氏や亀井氏が提起したように、継承のための組織をいかに充実させるか、ということも大きな課題であろう。仮に、民俗芸能を小岩氏や花城氏が指摘したように「地域の良さを伝える場」としてとらえた場合、少なくとも、地域の中で公民館や家庭、学校など、複数の主体が連携、協力しながら継承活動を行っていく必要があると思われる。そこでの連携や協力の仕方も、地域ごとに独自の工夫があるであろうし、そうした組織運営に関する情報交換もまた、組織機能の強化に迫られる与那国としては、取り組むべき課題ではないかと考えられる。

4. 展望

まず今年度の事業の反省点として、八重山各地への出張調査に際し、特に舞踊の若手がなかなか日程の都合がつかず、参加が難しかったことがあげられる。彼女たちの年代を考えれば、家庭や子供、そして地域行事などで週末はかなり忙しく、加えて出張調査も土日に重なることが多かったため、やむをえないことではあったが、今後の調査スケジュールの立て方はもちろん、そのような状況に置かれている彼女たちの環境についても考えていく必要がある。

次に、シンポジウム・芸能交換会の反省点としては、運営上の問題として、シンポジウムと芸能の交換会を1回のイベントの中に収めようとしたものの、これまでの経験から、観覧者のことを考え、目標としては2時間以内に収めることを目標とした。その結果、パネリストの討論や調査報告に十分な時間がさけなかったという反省点がある。また、今回のシンポジウム・芸能交換会開催にあたり、与那国の芸能の担い手や役場にも協力を頼んだものの、当フォーラム職員がインフルエンザを発症して動けなくなる事態も発生してしまい、どうしても少ない人数で運営に当たらざるを得なかった。このイベントの規模と当フォーラムの組織体制が見合っているか再検討し、組織の機能強化とともに、シンポジウム・芸能交換会の運営、またその在り方も再検討する必要があるだろう。

さて、今回のシンポジウム・芸能交換会への参加者の評価については、その立場によっていくつか評価が分かれている所があるので、まずはそれを紹介したい。

まず、今回与那国から参加した舞踊と地謡の若手からは、総じて参加してとても良かったという、好評が得られた。その理由としては、踊りを竹富島の人たちから「『与那国すばらしかった』と褒められた」、自分たちで化粧や着付けまでやっていることを、竹富島の同世代の踊り手たちから「『すごいね』と褒められた」など、普段自分たちが「当たり前」と思っているところが評価されたという経験があった。また逆に、竹富島の練習風景を見て、とても雰囲気や和やかだったことや、前日の古謡の勉強会を見学して、若者から島の先輩たちに至るまで、芸能に対する関心がとても高いことが分かったことなど、見習うべき点もそれぞれが見出していたようであった。また今後についても「次は後輩を連れていきたい」、あるいは「師匠も調査に赴き、他の島を見てみてはどうか？」など、今回の経験を与那国の人たちに広げていくための提案もあった。そして運営については、踊り手はシンポジウムの最中、楽屋で待機せざるを得なかったのも、「自分たちもシンポジウムや竹富島の踊りを生で見たかった」という指摘があった。これについては、残念ながら指摘されるまで気づくことが出来なかったことであり、交流を行う上で大きな問題だと考えられるので、是非改善していきたい。

会場の参加者からは「芸能の交流をすることでお互いの違いや共通性に気づき、かえって自分たちの芸能の意義や素晴らしさに気づくのかなら、こうした交流は是非続けていくべきだ」といった意見が相次ぎ、また「次回は与那国に竹富島の芸能を持っていきたい」という期待の声が上がった。

DiDi 与那国交流館で同時中継を観覧した参加者からは、高評価と疑問の声があった。高評価としてはパネリストの発言を聞いて、「竹富町には良い人材がいる」といった意見のほか、疑問としては「もっと練習させてから行かせるべきではなかったのか」「若者たちだけで勝手なこと（交流会）をしたのではないか？」といった企画趣旨に関する情報不足が原因と思われる声を頂いた。これらの疑問については企画主催者として説明が不足していたことを反省し、今回出演してもらった若手が決して不利にならないよう注意していく必要がある。

加えて、今年度のアプローチの方法としては、主に若手世代を中心に協力してもらっていたが、(もちろん今回もご協力頂いていたが) 今後、本事業を進めるにあたって師匠や与那国民俗芸能伝承保存会、

各公民館、学校、行政などどのような形で協力関係を築いていくか、今回の疑問の声はそのことを見直す契機にもなったといえる。今後は指導者層を含め、与那国の関係者たちとどのような関係を築いていくか、再検討していきたい。それはパネルディスカッションでも指摘されたように、地域の中で関係主体が協力し合って継承していくという民俗芸能の継承の在り方を考えるうえでも、重要なポイントになるだろう。

IV. 平成 30 年度事業報告

平成 29 年度事業では、竹富公民館にて、芸能継承に関する有識者のシンポジウムと、竹富公民館と与那国の芸能の実演を交えた芸能交換会を 2 時間のタイムスケジュールで実施したために、芸能の実演者同士の十分な交流・意見交換の時間が持てなかった。今年度事業ではその反省に立ち、有識者シンポジウムと芸能交換会を二つに分け、前者を 8 月 6 日(祖納豊年祭翌日)に、後者を 2 月 2 日に設定した。

まず、シンポジウムについては 1. 舞踊・地謡座談会「民俗芸能の未来のために、今できること」議事録として報告する。さらに、今年度の舞踊・地謡座談会に招聘できなかった平成 29 年度事業でのシンポジウムパネリスト、(公社)全日本郷土芸能協会の小岩秀太郎氏については、別に講演会を開催し、2. 小岩秀太郎「いまこそ、民俗芸能—東日本大震災からの気づきと、新たな取り組み」講演録として報告する。芸能交換会については、3. 第 2 回民俗芸能交換会「民俗芸能の未来のために、今できること」報告として報告する。

1. 舞踊・地謡座談会

「民俗芸能の未来のために、今できること」議事録

日時：平成 30 年 8 月 6 日 14:00～16:00

開場：DiDi 与那国交流館

(1) 議案

はじめに

与那国では、各自治公民館が国指定重要無形文化財「与那国島の祭事の芸能」の管理団体(=保存会)となっています。しかし、自治公民館ごとに差はあるものの、現在、舞踊・地謡について継承者不足が懸念されています。特に、指導者層が 70～60 代中心であるのに対して、現役の出演者世代は 40 代～30 代が中心となっています。つまり、この間にあたる、50～60 代が著しく減少しており、継承において世代の空白が発生していることが、大きな懸念材料となっていると考えられます。

加えて、どの自治公民館でも、組踊や狂言など、長い間演じられていない芸能も増えており、これらの演目については継承そのものが危ぶまれています。

本座談会では、こうした継承者の育成という問題について、最終的には、演じられなくなってしまった芸能(舞踊、狂言、組踊など)を復活させることを目標として、どのような取り組みを行っていけばよいのか、ご見解を賜りたく、以下の 2 点を中心に意見交換をさせて頂ければと考えております。

議題 1. 祭事における公民館と保存会や研究所との役割分担、協力について

与那国の祭事行事は自治公民館が主催しているため、祭りの舞踊では各自治公民館に属する踊座が出演や継承の担い手となっています。しかし、祭事以外の町内行事、特に町役場が主催する国際カジキ釣り大会やマラソン大会などのイベントにおいては、元々祭りに披露される舞踊であっても、与那国民俗芸能伝承保存会が出演の担い手となるケースが多くみられ、その場合は保存会の師匠によって出演者への指導が行われます。加えて、中学校の郷土学習では、舞踊は与那国民俗芸能伝承保存会の師

匠が指導し、地謡は研究所の師匠が指導しています。このように、与那国では祭事を支える舞踊と地謡の継承の機会として、①自治公民館主催の祭事、②町役場などが主催するイベントの舞台、③小中学校の授業という三つの機会がありますが、それぞれ独立した、異なる組織が継承者の指導にあっていると考えられます。

本事業では、今後、①の自治公民館主催祭事における舞踊や地謡の継承者をどのように増やしていくかという点が大きな課題となっていますが、そのためには②や③で継承者の指導にあっている保存会や研究所と、自治公民館の座が、祭事における継承者の育成についてどのような役割分担、協力を行っていくかが、大変重要ではないかと考えております。つきましては、このような人材育成について、それぞれのご経験やご見解をご教示頂ければと思います。

議題2. 祭事における、学校と公民館との協力関係について

与那国において、上記の②で指導を受けた中学校の児童、生徒は高校進学のために島を出ることになるため、多くの児童、生徒はせっかく指導を受けても、学校における発表会以外では、地域の人に対して公に披露する機会が少ないのが現状かと思われまます。こうした子供たちについては、例えば、集落の祭事に出演する機会などが増えることによって、与那国を出る前に、祭事の芸能に対してより深い親しみを覚えることになるのではないかと考えられます。

この点について、パネリストの皆様が集落では子供を祭事芸能に参加させているケースが多いと拝察しておりますが、①どのような経緯でそれが可能となったのか、②それらの取り組みの中で、祭事や、祭事芸能に親しむという意味で、子供たちにどのような変化が現れたのか、③また、これまでの取り組みの成果や課題などについて、参考のためにご教示頂ければと考えております。与那国側ご出席者の皆様におかれましては、パネリストの皆様のご見解を受けて、与那国における子供の祭事芸能への参加の状況、並びに、幼少期からの人材育成の課題などについて、ご教示頂ければと考えております。

議題3. その他

その他、本事業において、継承者の育成や、演じられなくなった芸能の復活について、議論すべき課題がございましたら、忌憚のないご教示を賜りたいと思います。

(2) 議事録紹介

<出席者(敬称略)>

(与那国町)

真謝喜八郎(西自治公民館館長) 柿本太蔵(久部良自治公民館館長) 玉城好子(与那国民俗芸能伝承保存会) 崎原弘子(西踊座) 請花ヒロ子(太鼓師匠) 譜久嶺マリ(嶋仲踊座) 譜久嶺マリナ(嶋仲踊座) 砂川オトミ(八重山古典音楽安室流協和会師範) 玉城孝(八重山古典音楽安室流協和会師範) 田島笑智子(嶋仲踊座) 新里恵美子(嶋仲踊座師匠) 米浜玉江(嶋仲古謡伝承者) 田原伊明(元与那国中学校校長) 米澤恒司(与那国民俗芸能伝承保存会) 金井瑠都(西棒座) 青野雅人(比川三線の座師匠) 崎原孫吉(与那国民俗芸能伝承保存会会長) 田頭政英(与那国民俗芸能伝承保存会副会長) 与那覇令子(西踊座師匠) (19名)

(竹富町)

石垣金星(祖納公民館顧問)、花城正美(小浜公民館館長)、亀井保信(玻座間民俗芸能保存会顧問)、飯田晋平(干立民俗芸能保存会会長、干立公民館副館長)(4名)

(座長)

波照間永吉 (県立芸術大学名誉教授、与那国島歴史文化交流資料館運営協議会会長) (計24名)

< 議事録 (敬称略) >



——波照間永吉

昨日の、ウガンフトゥティの朝から晩までの行事を終えられて、お疲れのところもおありかと思うんですけども、あれだけ素晴らしい芸能を演じられ、私も感銘深く拝見したんですけども。ちょうど昨日の今日ですので、現在の与那国の民俗芸能が抱える問題点、そして、どうすればこのような問題点が、克服できるかということを考えるには、今日はいいい時間じゃないのかなと、思っております。私、このDiDi与那国交流館の運営協議会の会長もしております、この施設にこれだけたくさんの方が入っているのを見るのは、今日が初めてでございます (笑)。協議会の会長としましても、とても嬉しく思っております。まさにこのDiDi与那国交流館は、歴史文化の交流のための施設でございます。現在抱える問題、そして未来に、どのように与那国の歴史文化を伝えていくか、そのことを考える、本当にいい機会が今日なんだと、思っております。

もう予定時間より30分ほど経過しているところですけども、大体4時半頃まで、与那国の民俗芸能の未来のために、そして今、我々ができることはどんなことなんだろうかということを考える、そのような時間にしたいと思えます。4時半からは、ちょっと、皆さんまた、第2ラウンドということで、オードブルでもつまみながら、さらにくだけて意見交換をして頂ければというふうに思っております。

とても重たい気持ちで、非常に緊張して、この場に臨んでいらっしゃるかもしれませんが、そんなに緊張もなさらないで、日頃、皆さん指導をされたり、あるいは舞台に立ったり、あるいはお弟子さん方を舞台に立たせるという、現場、現場で、感じておられることとお話頂いて、それぞれ、お一人お一人が抱えている問題をお互いに吐露し合って、問題を共有する。そして、同じ八重山地域、国の重要無形民俗文化財に指定されております、竹富の種子取祭、そして西表祖納、干立の節祭の芸能。そして、小浜島の種子取祭、盆、そして結願祭の芸能が、やはり国の指定を受けております。与那国島の場合は、祭事の芸能と、「祭事」という言葉がついておりますので、この「祭事」ということの意味も考えながら、こちらで準備してございます議題、1番目が「祭事における公民館と、保存会や、研究所との、役割分担、協力について」。それから、議題の2番目が「祭事における、学校と、公民館

との、協力関係について」という、二つながら、大きな問題だと思いますけれども、後輩たちをどのようにして育てていくかということ、一緒に考えてみたいと思います。

与那国の問題についてはそれぞれお話頂きたいと思っておりますが、ゲストとしてお出で頂いております、竹富町側の方々の、それぞれが抱えている問題点、そして、それをどのように克服しようとしているか、それを簡単に、3分ないし、5分。5分は越えないように、それぞれの地域の現状と、その現状を克服する手立てについて、ご紹介頂ければと思います。それでは、どういたしましょうか？花城正美さんの方、私から向かって左手の方から、順々に、いきたいと思います。



——花城正美

昨日は本当に、ありがとうございました。私も十何年前に、豊年祭でたっぷり見せて頂きながら、昨日も見せて頂き、今日はこのように、座長から紹介がありましたように、たくさんの方々ということもありますけれど、保存会会長さん、お師匠さん方々、そうそうたる面々の中で、与那国の祭事の芸能と、一緒に意見交換ができるということ、大変うれしく思っております。ありがとうございます。

やはり限られた時間ですから、(持参した写真を提示しながら)これは、小浜の結願祭です。小浜は、今ありましたように、お盆と、結願祭と、種子取の三つをセットにしながら、国指定を受けているところですけど、今日はこの祭事、結願祭の、このようなものです。豊年祭はアカマタがでできますから、アカマタは小浜の者がしゃべると、もう首が飛んでいきますから、小浜の豊年祭は伏せておきたいと思えます。このようにミルクが、そして福祿寿と、北、南に、神様がいらっしゃいます。つまり、そこで今、私が紹介したように、幼少の頃から(ミルク、福祿寿の)袖をつかみながら歩くというのを誇りにしてありまして、これが青年になりますと、太鼓を打つ、棒を打つと、庭でやります。そして、このような狂言がでできます。狂言が、一番狂言、二番狂言、三番狂言というのがあります。そして踊りについては、これは「かせかけ」です。これは「ブービキ」です。あとはまた「布晒し」があります。一連の、織をしていく工程の中の、ゆったりとした踊りがあります。これを女性の古典踊りとしながら、誇りにしているところです。そして、喜びを、このような中で、マミドーマもして、クイチャーをしたりしております。今、ここにあるものは、周りを取り巻くものは、やはり神前への奉納ですので、厳粛な中にもこのような奉納をしながら、神様に捧げるという場を、大事にしているところです。

(舞台の)周りを見ますと、ご存知のように、手織りの着物をお召しになって、そしてクバを持つ。この下に座っている物は筵。これも小浜ならではの筵です。私も今回、一枚挑戦してみました。こう

いう中で、手持ちの酒、肴を持ち寄って、日が一、朝から四時ごろまで過ごしなが、演じているところ。この喜びの顔。このときには本当に、おいしいお酒を飲んでいるな、という感じがするかと思います。おばさん方はこの辺に、洋服で参加する方もおられますが、小浜は着物の島ですから、私は個人的に着物を勧めています。それで去年から、ある程度、着物をお召しになるようになりました。小浜は着物一色になるように、勧めているところです。

小浜の場合には、棒家とか、狂言家とか、舞踊家とか、それぞれの座があります。1週間前から練習が始まります。民家の、ある家をお借りして、そこでゆったりとして、そこかしこでやりますから、1週間の、24時間はもう、貸切りということになります。そこでやはり、お互い同士のコミュニケーションができるということと、絆を深める良い機会だな、ということを感じております。私も、三線を持った27歳のときから、ずっと、このような場におりまして、舞踊家に行って三線をやるわけですけど、舞踊家の指導者は60歳になるともう、ご定年になると。それまで50代の方たちが指導しながら、20代、30代を徹底して、仕込んでいくという仕組みになっております。三線の場合も、男性が、部落から委嘱を受けた、免許状は無いんですけども、男3名の者が前面において、そして見習いが3名いて、大体6名ぐらいで成り立っております。北、南、それぞれ別々です。

あと、詳しいことは色々ありますけれど、昨日、鑑賞しまして、私の感じたところを少しばかり話しますと、やはり、子どもたちが出ている中で非常にぼんぼん、財産をあんなに持っていらっしゃる、と思うほどに(笑)、花金がでておりました。あれは、お金で励ますというのが、決して悪いということではなくて、とてもいい雰囲気だったと思っております。これをしながら、小さいうちから子供たちを励ますということは、与那国ではとってもいいなあという、感じがしました。それと、衣装ですね、これを今日もちよっと聞きました。本物の衣装をこのようにお召しになって演じているなというところは、さすが与那国織を、また大事にいらっしゃるなという感じがして、これは見習いたいな、というところです。小浜はもちろん、衣装の島ですけど、ときどきはまた、まがい物がでてきたりするところもあります。

それと、地謡についてです。これは、私も長年地謡をしてきたという中ですけど、やはり、小浜と比べてというか、一人一人の技量ということは、その辺を私は問うことはありませんけど、しっかり固めて、そして次につないでいくということなど、オトミさんなんかもこのように、長年ご苦労さんですけど。養成しながら、各村々で固めていったらまた、尚いいかな、という思いがしました。これはまた保存会の活かし方等々ということなども関わりがあるかと思います。棒座にはまた、圧倒されました。与那国、男子となったらもう棒をやれば、それで男の誉れだといわんばかりの、棒にこの、エネルギーにやっているということがすごいなと思いました。その分、三線に目を向けるというのが、薄いのかな？という勝手な思いもしたところです。それとあと一つ、これは私が言うのは大変失礼かと思いますが、八重山の御嶽をずっと眺めてみますと、やはり、拝殿があって、イビがあって、そしてこんもりとした森が、八重山の御嶽にはあるかと思いますが、十山の場合は、かつてはそうであったということを聞いております。このイビと拝殿との間も広っぱになっているものですから、私、小浜の人間として後ろの方のイビには非常に、神に対しては、という思いがするところで、この、島々の思いというのは皆さんみんな違うかと思いますが、そこに私、勝手に思うのは、後ろの方に木がこんもり繁っていると、もっとイビの方がまた、奥ゆかしく厳肅に感じるかな、という思いをしたところです。ですからやはり、ウガンフトゥティですから、やはりそこに対する厳肅な敬いという気持ちはそういう中から、また雰囲気の中から出てくるんじゃないかな、という思いがしました。

いずれにしても、小浜の課題として、共通する面を三つばかり入れて閉めたいと思います。まず、ここでも組踊というのがかつてあったけど、これが演じられないと。いわば復活です。これについて

小浜の場合でも、いろいろと演目があるわけですけど、昔は、4時、5時、6時まで、日が暮れるまでやったというところがありますけど、今現在となりますと、なかなかそれだけの長時間ということには耐えられません。それで、切られた演目を、トゥドゥミ、三日目にまた、別の場に移してやる場合がありますけど、そこでやったり、やらなかったりということになります。こういうことなどやらないと、もう途絶えていくな、と心配しているところですよ。二つ目には、島外からの皆さんがお嫁さんになったり、それからまた、島に食い込んで一生懸命やっている男性たちもいらっしゃいます。そういう方たちを、一緒に巻き込んで、中に入れ込んで、島の皆さんと、こういうことが一緒にできればな、ということも感じる場所です。これは公民館としての、関わりにもなるかと思います。

それと、あと1点、やはり、学校との関わりということになります。私もずっと、子供たちに三線、笛をやってきたところですけど、学校の子どもたちに、何故この郷土芸能をするかということは、また、前の竹富（平成29年度の芸能交換会）でもちょっと話したんですけど、大きな狙いがあるかと思えます。その1点はやはり、地域の伝統芸能を受け継ぐという、使命のようなものもありますけど、これだけは学校に期待されているわけではありませんので、これもしながら、という期待をするわけです。けれど、今朝、崎原さんとちょっとユンタクした中で、一生懸命やってきたけど、出て行ったらもう帰ってこない。やはり、それはそれで、こういう子供たちを作りながら、島に帰ってくるための、受け皿となる、要するに働き口などということも大きな課題かなという、これは小浜でも、そういうことがいえると思います。限られた時間で早口になりましたけど、あとはまた、お互いの意見交換の中で、小浜の事例を紹介させて頂きたいと思います。ありがとうございます。

——波照間永吉

それではお隣の、石垣金星さんお願いします。



——石垣金星

みなさん、こんにちは。西表の祖納から来ました、石垣金星と申します。大急ぎで説明しますが、昨日から与那国の芸を見て、皆パワーあふれて、まあこれは、将来は明るいなあと。私の島に比べたら、非常に羨ましいぐらいの、そういう感じだったんですが、もう、悩みは、同じような悩みがどこでもあるものだなと思いますが、私の祖納では、どういう取り組みをしているかということを紹介したいと思います。まず、与那国と違って竹富町は、七つの島々からあって、で、今、国指定をされ

ている保存会が、竹富、小浜、西表、とありますが、民俗芸能保存会は七つの島々で九つの団体があります。その中で、三つの団体が国の文化財指定をされていると。で、祖納は、西表民俗芸能保存会といいます。どうして西表かというと、祖納＝西表なんです。もともと琉球王国時代から、祖納に西表村を置いたというところから、祖納の場合には西表という名前になる。西表小学校、西表島郵便局、西表と付く名前は全部祖納にあります。そういうことで、西表民俗芸能保存会。これは、主に節祭行事を保存継承するための組織としてできました。実際には、公民館がやっていますので、公民館長が民俗芸能保存会会長も兼ねる。ということで、公民館長が変わるたびに、保存会長も変わる。ということになるわけですが、現実には、公民館がこの節祭行事を実際にやる。

ということで、ウガンとは別に、この保存継承は公民館が直接やっています。で、今年は己亥、年に2、3回しかない己亥が節祭の吉日、今年は11月3日で節祭行事になって、で、翌日の庚子はユークイ、新年という形で大きな行事は4日にやります。5日はトゥドゥミ行事と言って、部落の清め、井戸さらいなどがあります。三日間にわたる行事ですが、その十日前に、公民館が役職、節祭行事、三線から旗頭持ちから船頭から、いろんな役職があります。その案を作って、公民館総会を開いて、総会で役職を決めます。で、決めたら、決まった時には一切断つてはいけません。というふうに、ずっと慣例になっておりまして、その日からトゥリチキといって、稽古が始まります。約十日間の稽古が始まります。長い歴史の中では節祭行事の最中に、部落民の中で不幸があったこともあります。そのときにはどうするかというと、葬式を後回しにする。亡くなった人を家で寝かせておいて、行事を終えてから葬式をする。ということで、これはカミサマをお迎えする大事な行事だということで、いかなることがあっても決して、中止しないと。それぐらい、大事なことです。そういうことで、今でも続くと。で、このときに、普段土日当たるということは滅多にないんですね。今年はたまたま土日に当たるんですが、その代わりに、学校の子どもにはどうするかというと、学校も総合学習の一環として、前もって校長に相談し、その日は子供たち、学校の教員、校長以下、全部行事に参加します。学校の先生たちも、棒芸、槍、狂言もするし、舟にも乗せます。島から出た高校生にも、学校の校長に要請文を出します。そうすると八重山の高校も、積極的に、子供たちを地域の行事に、出席扱いで参加させてくれる。そういうことになっていますので、子供たちも別に遠慮なく行事に参加してくれる。参加できる人は、保育所から。特に子供が参加できるのは、棒芸ですね、男の子だけは。棒芸には保育所の、元気のあつた子が参加する。棒を持って。それで、だんだん大きくなって、その子たちが今まさしく、青年になって、この行事を支えているということですね。昨日の、与那国の太鼓を見ていたらもう既に小学生の後継者が生まれていて、ああ、すごいなと思いながら見ていました。やはりそういうふうにして、こういう伝統が受け継がれていくものだな、と思っていますが、そういう形で、何があってもやると。

ちょっとここで、大正の話ですが、実は節祭行事は 部落が大喧嘩して、中止になったことがある、大正時代に。大正の12、3年ごろ。ところが、中止になった時に、どうしたかということ、部落の中で色んな不幸ばかりが続いたと。さあこれは大変だ、神行事を潰したからそうなるに違いない、という雰囲気があって、それで昭和の13年ごろにもう一度復活しよう、ということになって、また復活して、現代になっている。それからいかなることがあっても、この行事は、台風が来ようが、不幸があろうが、必ずやるということで、今でも本当に、大事にしている。ということですので、これからも、まあ心配なく、わずか150名足らず、与那国に比べたら、150名足らずの公民館の人数でこれだけの行事をやって本当に大変なことですが、それでも動ける人みんな動くといい形でやっております。

で、それ以外の唄三線。唄三線の継承をどうするかというと、西表民謡保存会というのがもう、60年前に生まれた。私が今、三代目の西表民謡保存会の会長を務めておりますが、西表の伝統の、

唄三線の民謡、それと古謡、たくさんあります。その行事、行事ごとに歌う歌を、行事の前に、若者たちみんなを集めて、稽古する。で、民謡保存会の役員には、各御嶽の若者を全部入れております。どうしてかという、行事は、公民館に関係なく、各御嶽がやるんですね。各御嶽の若い人たちを保存会の役員に入れて、行事に歌う歌などを皆で稽古する。ということ、私が元気な間に、これみんな若い人たちに渡さないといけないということで、毎年ずっとやっておりますけれども。そういう形ですね。まあこれも、ただ心配なのは、三線を弾く人が少ない。正直なところですね、若い者の参加が少ない。「お前も三線弾け」と言って、散々挑発しているんですが、数が少ないというのも悩みの一つですけれども。そういう形で、今、まあなんとか、少ない人数でも、継承できるかな、と思っています。以上、簡単に、報告します。

——波照間永吉

では続いて、亀井保信さん、お願いします。



——亀井保信

はい。それでは、竹富島の種子取祭のことについて、ちょっと話してみたいと思います。今年は10月25、26の二日間、奉納芸能が行われます。庭の芸能と、舞台の芸能合わせて、二日間で70の演目を神に奉納します。それで、8月、そう、もう既に夏休み。夏休みに入ると同時に、中学生、高校生の舞台上で踊る子供たちは、夏休み期間中から、もう踊りの練習が始まります。それで、狂言とか、その他の島の言葉でやる例狂言って言いますがけれども、組踊とかですね、そういうものは1か月前からですね。私は玻座間民俗芸能保存会という、芸能保存会にいます。竹富島は仲筋民俗芸能保存会と玻座間民俗芸能保存会に分かれておりまして、初日は玻座間が担当します。で、二日目は仲筋が担当します。それを合わせて、さっき言った、70の演目を神様に奉納するという形をとっております。竹富島も一時期、あれは昭和40年代、竹富町の人口がすごい過疎の嵐に遭ってですね、5年間で5,000名ぐらいですかね？人口が流出したことがあるんです。すごい過疎の大嵐。もう復帰前ですね。それで、これは竹富島だけじゃなく、他の島々でも、祭祀行事の芸能を維持することが非常に困難になった時期がありました。それで、種子取祭を挙げるために、石垣在住の郷友会の皆さんに働きかけて、じゃあ石垣の方で、「これこれの芸能については、やってくれないか」ということで。玻座間民俗芸能保存会には、いわゆる石垣の会員と、竹富の会員というのがある。そこで、石垣も巻き込んでですね、それで作って。石垣の方は、「これこれの演目を練習してきて、種子取祭の舞台上でやっ

てください」と。竹富は「これこれを担当してください」というふうに、振り分けをしてやってきております。これは、今も続いております。

ただ、石垣に長く住んでいると、島言葉がどんどんなまっていくんですね。これを石垣の会員に教えて、種子取祭の舞台に上げると「お前はどこの言葉をしゃべっているんだ」というくらい、やっぱりね、言葉が崩れていくんです。竹富にいる会員も、もう本土の方とかも会員になって、一生懸命頑張ってくれてはいるんですけど、やっぱり言葉っていうのは、どんどん崩れていく宿命があるというか、どんどん崩れていって。それでも、竹富の方はまだ島にいるので、まだ年寄りから純粹の竹富の言葉を聞けるので、石垣の会員よりは、竹富島にいる若い会員の方が、むしろ本土の出身者であっても、島の言葉は上手だと。昨日の（与那国祖納豊年祭の）司会者は、すごかったですね。本土の方があれだけ、与那国の言葉をしゃべるっていうのはびっくりしましたけれども。まあ、そういうこともあって、島の言葉でしゃべる狂言については、できるだけ竹富島でするようにしようと、今考えているところです。

それとですね、与那国の場合はどのように対応されているのか、実態はちょっとわかりませんが、ちょっとお聞きしましたら、昨日の舞台に立たれた方の8割以上は島在住の方だということをお聞きして、ああ、これは非常に心強いなあ、と思いました。それと子供たち。棒もそうですが、子供たちを積極的に豊年祭の舞台に出して、デビューをさせている。これも、子供たちの今後にとって、非常に意識づけが強い、かなりインパクトのある意識づけになるのではないかと思います。これは、竹富島でも同じようにやっております。小さい頃から舞台に上げる、と。以前は、人口の多い時期はですね、大人の方が舞台も全部やっていたけど、人口が減ってきて、中学生にもさせようと、いうようになってきてですね。さらに、小学生までそれは降りてきて、西の集落のある踊りを、小学生だけに師匠が教えて、やった年がありました。これがね、大好評を博していたんですよ。もう、拍手喝采。「胡蝶の舞」という踊りでしたけど。これを小学生が見事にこなしてですね、これだけ教えればできるんだということを、その子どもたちが証明して。以後、一部に、なんで子供をこんな舞台に上げるか、という仲筋の方からクレームも付いたりしましたけど、立派に踊ってくれたので。そうか、子供でもこんなに教えればできるんだということを、子供たちが証明してくれたし、子供たちにとっては、これは大きな自信になったと思いますね。そういうことで、子供たちに教え込んでですね、（舞台に）上げてみるのも一つの方法じゃないかというふうに、思います。

それから、芸能保存会、後継者育成、こういう言い方は、ちょっとどうかと思いますが、どんなに頑張っても結局は、地元人がいないとできないんですよ。だから、これはある意味、行政のですね、定住対策っていいですか、人口を増やしていくための、さっき花城先生からもありましたように、就労の場を確保して、与那国島に多くの方が定住していけるような環境を作っていくのもまた、行政の大事な仕事かと思いますが、そういうことも併せて、行政も一緒になって取り組んでいくことが、また大事じゃないか、ということを感じております。これは近いうち、竹富町もそういう問題に直面してきます。直面していると思います。まあ、同じように、考えて行くべき問題だと思います。あとはまた、意見交換の中で、お話ししたいと思います。ありがとうございました。

——波照間永吉

次、干立の飯田さん、よろしくお願いします。



——飯田晋平

はい。干立民俗芸能保存会会長をやらせてもらっています、副館長でもありますので、飯田晋平とい
います。よろしくお願ひします。干立ではですね、民俗芸能保存会会長を副館長が行うということになっ
ていまして、私は特別、地謡に詳しいわけでもなく、踊りに詳しいわけでもなく、その、伝統文化に
詳しいわけでもなかったんですが、まあ、巡りめぐってですね、今年は、「お前がやれ」ということで、
先輩たちの方から言われまして、役を引き受けたところでございます。ですので、与那国の豊年祭を
見させて頂いて、特に意見をするような立場でもないし、本当に感動しかなかったの、僕はもう干
立公民館の現状だけ、皆さんにお知らせしたいと思ひます。

干立はですね、与那国もそうだというふうにはありましたが、行事になりますと、もう30代、
40代しかほとんど活動していない状況でありまして、50代、60代の先輩方が、もう本当に手薄で、
その上の先輩方ですね、もう70以上、80の方々から指導してもらおうのですが、もう指導するにも
限界があるので、「お前たちで考えてやれ」と言われるぐらいの今、現状でございます。で、郷友会の方々
にも、協力依頼をして、実際に、石垣の方から、また那覇の方から、郷友会の方々協力しに来て頂
いているんですが、もうその先輩方も「お前らせっかく頑張っているんだから、もう俺たちはいいから、
お前らがやれ」と、まあちょっと遠慮ぎみなところもあるんですが、「いいよ、頑張れ」と、「応援し
てあげるから」というような形で、言っでは頂けるんですが、まあこちらとしては、さみしいかぎり、
是非、一緒にやろうと。自分たちだけでやっても、まあ、いまいち盛り上がりかけると、やっぱり、
島で育った先輩たちと一緒にやりたいよ、という話はよく、お酒を飲みながらさせてもらうんですけど、
まあ、その辺がですね、非常に、一歩進んでは、一歩後退という。「じゃあ、今年はやるか」っていう、
こうね、気分が乗った時に一緒にやってくれたりもするんですが、「まあ今年はちょっともう、仕事が
忙しかったから、もうお前らだけでやれよ」と、いう形であつたりですね、そういうのを繰り返しながら、
今はもう10年ぐらいですね、自分が関わっている中では、知っている現状でございます。

で、その先輩たちと話をすると、自分たちはやっぱりこの島が好きだと。行事は好きだと。で、参
加はしたいし、島も離れたくはなかったけれども、まあ、離れるしかなかったと。やっぱりその時代が、
そういう、島を出てやっていけなくちゃいけないという、時代だったんだと。「お前たちは、好きでこ
の島に来たんだから、この島の事を、頑張ってくれ」という話をしてもらって、自分たちも力の限り
頑張っではいるんですが、やっぱりそこはですね、この先どうなるんだろうと思うと、自分たちの子
どもの世代が、行事をどうやって継承していくのか？というところまでまだいってなくて、「とにか

く自分たちで、今、これを絶やさないようにしとかなくちゃいけない」と言いながら、若い人間でやっているのが現状です。今、干立公民館、館長もですね、もう40代で、自分も40代なんですけど、役員はほとんど30代から40代っていう現状でありまして。先輩も、なんて言いましょう？逃げていけるわけではないんですが、もうその若い力でやっていかないと、「もう、自分たちも、先が見えているんだから、困ったときは助けてやるから、どんどんやっていけ」という話で、やらせては頂いております。今、石垣金星さんがいらっしゃいますが、祖納はですね、本当、隣で、僕らから見れば、ちょっとうらやましい。まだまだちょっと先輩がご健在で、活躍されているっていう形がありますので。「ああ、いいなあ」と、言いながら見ております。祖納で人口150人くらいですかね？皆さん。干立はまあ、85名ぐらいしかいませんので、でも、この節祭という行事を行うときは、やっていることはほぼ一緒であろうと。隣部落ですが、日にちが一緒ですので、僕らも1回も見たことがないです。たぶん、金星さんは干立にいらっしゃったこともあるので、干立の行事も、祖納の行事も、両方わかっている、もう数少ない先輩なんですけど。そういう中で、人数が少ない中でこれを続けていくのに、まあ、非常に苦労はしています。

ただ、ここからはですね、祖納でもそうですが、自分たちの子どもですね、小学校、もちろん中学校、保育所と、子供はどうしても30人くらいは、干立祖納合わせていまして。本当に、行事を見ている限り、子供たちは何も言わなくても後ろで真似をして、活動しています。昨日の（与那国祖納豊年祭の）棒座の真似をね、真似じゃないですね、あれは完全に、一緒に叩いていましたが。そういった形で、狂言も、棒も、いつの間にか覚えていて。大体、行事が終わった1週間、2週間は、休憩になると、皆で狂言を仕合っていると。もう本当に、大人よりも、空で暗唱しいて、全てきれいにできる形になっているよ、というのを先生方から聞くと、自分たちが頑張っていれば、子供たちはその姿を見て、成長していくんだな、というのは実感しています。与那国の豊年祭を昨日、見させてもらう中では、そんなに心配するほどの、なんていうんでしょう？継承に対してですね、心配するような感じは受けなかったんですね。もう、自分のところの方が、より危機感をもったぐらいで、うらやましいなど、思わせてもらいました。ということで、干立は、あくまで祖納と同じ形になっていますので、今、金星さんがお話されましたので、節祭はそういった形で、行っています。若い人間も、まあ少ない中でも、頑張っていますので、また与那国の状況も聞きながら、共に、一緒に頑張っていければな、と思いますので、よろしくお願ひします。

——波照間永吉

竹富町の方々から、それぞれの地域、国の重要無形民俗文化財に指定されている祭事の芸能が現在、どうなっているかというご報告を、ごくごく簡単にさせていただきました。先ほどの飯田さんのお話で、80名で国の重要文化財を動かしているという。それに比べると、人口1,500名の与那国は、はるかにうらやましい、ということがあったかと思ひます。ただしかし、たとえば与那国の祭事の芸能が指定されたのは、ほぼ36、7年前じゃないかと思ひます。宮良保全さんであるとか、富里康子さんであるとか、そういった方々が活躍をして、そしてその方々が受け継いできた歴史的な芸能をちゃんと記録に留め、そして国の指定を受けるといふ、そのような時代からすると、現状はどうかというのが、そもそもみなさんの一つの心配の種だと思ひますね。

それで、これも今日、お聞きしたんですけども、昨日の芸能の出演者の8割以上が、与那国の在住者であるという、そのこと。これなどは、例えば、竹富島の種子取祭の芸能と比較しても、かなり地元の出演者は多いとみなさやいけないと思ひます。ただ、その一方で、地謡の層が非常に薄くなっている。昨日の、この資料を見ながらですね、例えば、東自治公民館では、地謡の笛がないとか、

そういった現状もあるわけですね。まあ、棒座は非常に活発で、勢いがあるけれども、それに比べると、地謡の方は、本当に現状、大丈夫なのかなあ？どうなのかなあ？ということが危惧される。私も実は、この豊年祭の舞台、今から12年ほど前だったと思うんですが、拝見しているんですけども、あのときにはまだ大人の人たちが、舞台に立っていることが多かったように思います。ですから舞台に立つ踊りの方々も、そういう意味では、小学生、中学生を出さなければ、舞台の人数が確保できないということが、実は起こっているのではなかろうかと、ちょっと思いながら舞台を見ていたんですね。そういう意味で、小浜の方は比較的安定しているように見えますけれども、小浜もどちらかというと、郷友会の出演者がいらっやいますよね。そのような意味で、いずれの地域も抱えている一つの共通点は、いわゆる芸能を、実際、日頃、それぞれの土地の芸能を習得し、そして研鑽し、次の時代に伝える、そのような人たちが、どんどんどんどん、少なくなってきているという点においては、全て、竹富町も、与那国町も、問題として共有しているのではないかと感じて、伺っておりました。

さてそれでは、具体的に、昨日あれだけの舞台を務められた、それぞれの公民館、そして、久部良、比川の事例も含めて、皆さんが抱えている問題、「ここが不安なんだ」「ここをどのようにして、克服すればいいか」ということなどについて、これどうでしょう？全員の方から意見を頂いた方がよろしいですか？時間的に、厳しいでしょうかね？

——玉城孝

全員は難しい。私が代表してお話します。

——波照間永吉

全員はちょっと、厳しいと思いますのでね。代表という形でいきましょうか。



——玉城孝

はい。これはもう、全員一人一人からね、その意見を仰ぐということは大変時間がかかりますので、私の方からちょっと、申し上げたいと思います。今、一番課題になっているのは、とにかく与那国町は、竹富町からお話がありましたけども、確かに人口的にも大変恵まれております。今現在のこの、祖納の

集落だけで1,000名あまりの人口がいます。そして、比川、久部良で全体を合わせると、大体、1,700名ぐらいの人口があります。昔はですね、今、公民館と謳われているんですけど、アングマイ(東)、イリマイ(西)、ンマナガ(嶋仲)、そしてヒガワ(比川)、クブラ(久部良)と、こういう呼び方がありました。その中で、各公民館の中で、もうほとんど、座があります。いわば踊り、地謡、そして棒、そういう座がほとんどおかれている。それが、この地謡の方が、ほとんど途切れていっているわけです。私が常にこの、お互い三線をやっている皆さんに、各公民館で、これもう地謡を、そのまま養成して戻すように、公民館長と相談して、これをやってくださいと。そして、わからないのがあれば、やっぱり指導者がいるから、また聞きに来るよにと。棒とか踊り、そういうのは別としてですね、やっぱり、三線の場合は時間がかかるんです。そこに数年の時間がないと、本当の、座っての地謡ができない。そういうことは皆さんもよくご存知かと思うんです。そういうことになっています。与那国の一番の課題は、各公民館、座、この、いわば地謡の座、三線の座がないということですね。昨日の豊年祭の地謡を見ると、ほとんど同じ方が点々、こういうふうにして、三線をやっているんです。だからそういうことじゃなくて、本当は決まった座で、これをやってもらいたいというのが、本当に、我々の、三線やっている人の願いでなんです。

祭事は、もちろん公民館の仕事です。行事は、もちろんこれ、行政なんです。だけど与那国の祭事といえば、マチリ、豊年祭、もうこれが一番大きいんですよ。このマチリごとになると、またその辺から、これはもう公民館の仕事ですから、与那国独特の、やっぱり25日間四つ足を食べちゃいけないよ、というような昔からの言い伝えがありますから、これを守りつつ、この祭事ごとをやっていきます。そして町行事は、我々でも、じゃあ、お願いされたから、三線やりましょうか、ということになりますけど。やっぱり公民館祭事になると、これは各公民館に座がいるから、各公民館にやらせなさいと。常に私はそう言っているんですけど。それが残念ながら、いないんですよ。だから、できる人でやらなきゃいかん。だから今、一番の課題はこれなんです。確かに、竹富町、小浜、そういうところからすると、まあ恵まれているところは、あります。ありますけど、これが課題なんです。

そして、この公民館と謳われているのが、与那国町では、昭和40年頃から公民館と謳われているんです。今、これが自治公民館と謳われています。これ、平成9年に作られたんです。そして祖公連、与公連、で、これをどういうふうにしたかと言いますと、竹公連、竹富町ですね。そして石公連、石垣。そして沖公連、沖縄本島。そこで与公連という、与那国がなかったんです。で、これは作り上げなきゃいけないということで、平成9年に、こういうふうにして作り上げて、皆と一緒に、この仲間になったわけなんです。だからこの呼び方が今、ずっと続いている。昔はですね、豊年祭をやるのも、ほとんど、祖納は祖納部落だけでやっていたんです。今は与公連というのがありますから、比川も久部良もみんなこういうふうにして、やっぱり祖納の豊年祭に参加するようになっているということですね。だから、一番の課題は、もう、踊り、棒、うんぬんもよりも地謡。今、与那国で一番の課題とされているのが地謡なんです。指導者も70、60と、こういうふうになって、やっぱり、中堅の皆さんがですね、それなりにまあ、色々頑張っていけばできることではあるんですけど、どうしても、ある程度まで若いのに教えると、そのまま島から出ていく例が多いですから、もうほとんど帰ってくる者は、いないような状況ですから。どうしても、年齢層が高い方で、地謡をやらなくてはいけないという、そういう状況になっているんです。与那国町ですね。はい、以上でございます。

——波照間永吉

地謡の養成の方が急務である、そのような意見だったと思います。さて、確かに我々が、昨日舞台を拝見していても、やはり地謡の層の薄さが気にかかる、というところだったと思います。要は、地謡

の方に進んでいく、志を持った若い世代が、いるか？いないか？いないとすれば、どのようにして、育てていくべきか？このあたり、与那国の方でも、竹富町の方でも、何かいい考え、あるいは、この問題は「こう克服した」、あるいは「このように克服している」という報告、提案ができる方、いらっしゃいますか？



——真謝喜八郎

西公民館の真謝ですが、今日はどうもありがとうございます。私もですね、この公民館行事に関しては全然関心がなかったんです。実はですね、急に、昨年の7月頃ですかね、豊年祭前に、どうしても成り手がいないんで、ということで、「もう70も過ぎましたし・・・」ということで、お断りしたんですが、孫と、息子と、女房に、どうした方がいいかと聞いたところですね、嫁はだめだと。で、孫と息子が、やったほうがいいということでね、引き受けて、今現在こう、一年ちょっと経っているわけですが、この行事に関係して、与那国に生まれ育った人間としてね、すごく恥ずかしく思いました。行事が、たくさんあるんですね。そういったことの流れ、それをおかげで勉強することが出来ました。今朝もそうですが、先生がお見えになって、なんて言ったらいいんですか？掲げてある、扁額についてお聞きしている中で、古いものが屋根裏にあるんだと。それを初めて出してもらって、その意味も分かりましたし。じゃあこれは、昔からの引き継いでいるものはこう、ちゃんとしなきゃいけないと思っている段階です。

それから、この席にですね、行政の教育関係の方が出席していないのは、すごく残念だと思います。それはどうしてかと言いますと、今まで与那国町には、郷土芸能というのがございまして、私の娘も、昨日、一昨日、そのためにわざわざ来て、昨日踊りを1点、披露したんですが、そこにいらっしゃる先生方、踊りの師匠、三味線の師匠もたくさんいらっしゃいますが、これは学校の教育に郷土芸能というのを入れていましてね、民具、それから舞踊、それから三味線と、いろいろやっていたんです。ところがその中で、そこにいらっしゃる米浜玉江さんが、女のお子さんが四名いたんですね。それで、うちの娘も一緒に、登野城舞踊道場から先生を呼んで、1週間に2回だったかな？それで子供たちに舞踊を教えていたんです。そういったことが蓄積されて、呼んでもすぐぱっとできるんじゃないかと、思うんですね。そういうことで、教育関係者の方にも、行政の方から、後継者育成のために、民具でもそうですが、芸能を伝えていくためには、参加が必要じゃないかと思っています。

それからもう1点、西公民館というのは、たくさんの会員がいて、一番大きな公民館ですけど、館長の成り手がいないんです。それが一番の悩みですね。皆さんのところではもう、金星さんのところは、決めたら次はやらなきゃいけないというお話がありましたけれども。それが一番の悩みです。僕の次の成り手の方が、病でたまたま入院してまして、次はどうするかっていうことで、後継者選びが大変です。そういったことが、悩みですね。あと、子供たち。譜久嶺マリナさんが小学校の頃からオトミさんのところでずっと三味線の練習をして、最高賞を取ったりですね、そういった子たちがたくさんいるんですよ。だから、教育の中にそれを強く組み込んで、もう1回、郷土芸能をどうやって伝承した方がいいか、育てた方がいいかというのも、こういった機会に、教育関係の方たち、行政の方たちもお招きして、ディスカッションをした方がいいと、僕は思います。以上です。

——波照間永吉

はい。ありがとうございました。それでは、亀井さんの方にマイクを回して頂けますか。

——亀井保信

地謡の養成、育成が非常に課題だというお話でしたけれども。これは、ハードルが結構高いかもしれませんが、祖納、比川、久部良の三味線弾きがいます。歌い手がいます。それをプールにして、その皆さんが、全ての公民館の地謡を担当すると。一緒になってですね。こういう方法とはれないものなんでしょうか？いるわけですよね？三味線弾いて歌が歌える方は。

——玉城孝

今現在が、その状況なんです。今、仰っているように。

——亀井保信

現在、そうやっているんですか？

——玉城孝

今現在はね。もう、やっている人がやるでしょうね。

——亀井保信

いるんだったら、その歌い手、三線弾きの力を結集してですね、それで、祭りを乗り越えると。

——砂川オトミ

呼び掛けても、集まらないんですよ。遊び三味線は、皆弾けますよ、若いのは。でも、こういったのは全然、興味がないのかわからないけど、そういうのはないですね。

——亀井保信

結構、難しいわけですね。

——砂川オトミ

だから私は今、中学一年生の池田マリンさんを、私はもう70余ってるし、80近いから、私がどこ

でどうなるかわからないから、「あなたは私が、ちょっと見込んでいるから、私が教えるから、一緒に弾くか?」と聞いたら、「やります」って言うから、親御さんにも話して、大げさに言うと私の後を継いでもらいたいから、この子に私のわかる範囲は教えて、あちこちに連れて行くけれども、「いいですか?」と聞いたら、親御さんも「お願いします」って言ってきて。昨日(の与那国祖納豊年祭)も、中学生で三味線をやらせて。あの子をあちこちに連れて行って。教えたらすごく熱心で、すぐ覚えるんですよ。だから今、もう、すごくうれしいです。本当に、歌ったことのない与那国の歌も、みんな歌いますよ。工工四は見て歌いますけど、歌はみんな覚えていて。それで私はもう、絶対この子には、後を継がせたい。私は安室流協和会の教室もやっているんですけど、あの子はもう、石垣でも、優秀賞、独唱に、小学校六年生で。学校卒業して受かったんですけどね。そういうふうには、いい子を見つけたら、すぐ教えて。

——玉城孝

どうしても、中学生まででしょう。与那国では。

——亀井保信

そういう関係者が、一堂にまず会して、今後、与那国の祭りの地謡を、我々だけで、みんな乗り切れるようにやろうという、やっぱり集まる必要が…

——砂川オトミ

いない。

——亀井保信

いない!

——真謝喜八郎

いやいや、呼び掛けるんですよ。

——花城正美

関連して、小浜の場合は、1週間前になりますと、それぞれがお借りした家で、床の間にお供えをして、それからスタートということになるんですけど、地謡の皆さんというのは、やはり、それぞれみんな、(曲を)こなしているわけじゃないんですよ。それで、先輩方の、地謡をあがった皆さんのを頼ってと、CDに録音しておいたものを、自分の関心と合わせながら、仕事をしながら、耳にはさみながら、ずっと聞いてきて、それを1週間前から合わせましょうという状態が、小浜なんですよ。あまり音響機器に頼るといっては、よろしくないかと思うんですけど。

今、私が聞きたいことは2点あります。今のことも含めて、先ほども聞いたんですけど。何か、棒座をやらないと、与那国では男といえないのかな?と思うほどに、非常に熱気を感じたんですね。昨日。何故このあたりをね、三味線に引っ張ろうと、無理だという言葉もありますけど。このあたりの働きかけについて、昨日、感じたんですよ。もう1点、保存会の方で、宮良保全さんたちが与那国の民謡集をテープにして、セットにして出しましたよね?あれ、実は私、全部CDにして持っているんですけど、やはり面白いですよね。楽しいですね。時代と共に、少しばかり歌い方が変わっていくのはしょうがないかと思えます。かつて先人たちが、立派に、このように残してこられたものをお聞きしながら、

勉強会しながら、ということなどは、できないものなのかな？と考えて、今、そういうことも含めてお聞きしています。

——玉城孝

これは本当に残念なんです。

——真謝喜八郎

あの、各公民館、司によっても、供物の並べ方とか、写真を撮っているんですが、これじゃダメだ、あれじゃダメだって大変なんですよ。供物が多いからでしょうかね？並べ方がダメだとかですね。昨日の金星さんも、ご覧になったと思うんですけど。その司によっても、変わるところがありますし。ただ、公民館長になっているんなことがよくわかりました。それで子供たちはよくデビューしますからね。いろんな場面で出してもらえますから、度胸がつくと思うんですよ。そうやって子供たちに度胸をつけるということも、後継者育成の、伝統芸能を育てるっていう意味でも、必要じゃないでしょうかね。だから、館長の成り手がいない、西（集落）の方は。供物の並べ方にも、色々ある。そういうことです。

——玉城孝

三線の座がない。

——波照間永吉

はい。地謡の養成についての話ですが、遊び三線をする人はたくさんいると。しかし、この祭事の芸能の地謡を務めるかという、その人たちは、その場に出てこない。そのあたりが、一つ、問題の突破口である可能性があります。まるっきり、触れないわけじゃない。もう、ちゃんと歌も歌える。三線も弾きこなせる、にもかかわらず、この祭事、非常に大切な芸能、与那国の芸能の現場には、出てきたがらない。問題点はそこじゃないでしょうかね。

——花城正美

避けるというよりは、棒に対する魅力というものが、男性にとってはあまりにも大きいのではないかな？

——真謝喜八郎

全然違いますよ。一人棒なんかは、誰でもできないですよ、させないですよ。自分の孫を出そうと思っても、出せないですよ。

——花城正美

決して私は、ダメだと言っているのではないんです。すごい魅力を感じていらっしゃるんだろうなと、思います。

——真謝喜八郎

はい。みんな出したいですよ。孫を持っている方は。

——波照間永吉

今、問題についてですね、どうすれば、この地謡の方に、引っ張り込めるかという、そこが問題なんですよ。どのようにすれば、誘導できるか。私など、昨日のものも、そして、与那国の祭事そのものも、たくさん見せてもらっております。それで、与那国の芸能というものは、まさに、与那国にしかないものがたくさんあるわけです。もちろん、組踊も。こちらの米浜玉江さん、鳴子さんたちも組踊を演じた。その組踊が今はもう、ほとんど消えかかっているわけですよ。とてももったいないわけです。そういうことを考えると、この大切な、価値のある与那国の芸能が、今、そういう意味では危機に瀕している、という気持ちにならなくてはいけないと思います。と同時に、価値があるんだよ、と。とても価値のある仕事を、地謡をする、目立たないけれども、とっても大切なことをする皆さんが育たないと、組踊もできないよ、あの先輩たちがやった組踊すらも無くしていいのか、どうなのか。という、この仕事に携わることの価値の、あるいは意義の説明ですよ。だからそれを、お師匠の先生方が、いくら口酸っぱく言ったって、なかなか「はい。そうですか」とはならないと思います。

そういう意味では、この地域の人たち、学校も含めて、与那国の芸能が持っている価値を、子供たちにしっかり教えていく。八重山の石垣の芸能だけが素晴らしいんじゃない。首里の芸能だけが素晴らしいんじゃない。与那国に、このように何百年伝わって、そして与那国の、私たちの祖先が作り上げた芸能は、意味があるんだと。与那国にとって意味があるんだということを、やっぱり教えていかなければ、遊ぶのは楽しいからやるけれども、この修行の必要な、玉城さんが仰られた、5年も10年もかけなければ一人前の地謡は勤まらんという、そういった難しい仕事に、ついてこないと思います。そういう意味で、やはりこの地域の子どもたちに、この芸能の持っている、与那国の歴史や文化が持っている価値をしっかりと教えていく。そういう意味ではまさに、教育の力も必要だと、私は思うんですよ。

——砂川オトミ

郷土学習でもですね、人数が少ないから。今、与那国中学校の郷土学習を教えていますけど。中学一年生が二人。三年生が一人。二年生が一人。女二人、男二人なんですが、この子供たちに教えるのが大変。それに先生方も入ってもらって、たまに一緒にやるって言うんですけど。この子供たちが三年生になって卒業するまでに、また、入れ代わるんですね、毎年。学校からも、(子供たちが)割り当てられたりして。だから、今度代わった生徒に、別のものを教えることが出来ないんです。前のものができないのに、また別のものってなると……。だから、そういうのもちょっと苦勞です。本当に。

——波照間永吉

学校で、田原伊明さん。中学校の校長先生などもしていらっやって、恐らく、与那国の郷土芸能クラブ等々の活動にも携わられたと思います。ご経験と、そして今の問題について、田原さんがどう考えていらっしゃるか、ご意見を聞かせて頂けませんか？



——田原伊明

こんにちは。まずですね、ずっと聞いていて、疑問に思うことがあるんです。まず一つは、民俗芸能が、指定されましたよね、指定されて、たぶんもう、30年を越しているんですよ。で、その間、伝承保存会ですから、踊りもそう、三味線もそうだと思うんですよ。歌もそうですからね。できているはずなんですけど、その後継者が育っていない。まず、これが大きな問題だと思うんですよ。で、公民館行事とか、それはずっと昔からやっていることであって。それとは関係なしに、保存された団体としての、30年以上経っているこの歴史の中で、この後継者が育っていないというのは、非常に疑問に思います。で、その学校で、郷土学習が始まったのが平成なんですよ。平成6年ぐらいから始まったんですよ。与那国中学校から、まずスタートしたんですけれども。その中から育った子供たちというのは、非常に貢献していると思うんですよ。与那国の芸能を伝承していくうえでは、これは非常に成功した例だと思うんですけれども。それを抜きにして、地域として、与那国島全体としての伝承に関して、皆さんどうだったかな？というのが、非常に疑問に思います。それが、豊年祭もずっと見てきていますけど、今、三線の担い手がないという話が出ましたけれども、何回かは、各公民館で違う弾き手がいたんですよ。実際、60代の先輩方ですけれども。できる方いるんですよ。その、豊年祭の十山神社でも弾いて、地謡を務めた方がいらっしゃるんですけど、何故その方々が続かないかと。話を聞くと、喧嘩をしたとか、そういうことが結構あるんですよ。だから、やりたくないのではなくて、やりたんだけど、なんていうか、うまくやりきれない。コミュニケーションがとれないとか。そういうのがあって、ゴタゴタしていて、続いていないというのが、あるんじゃないかと思うんですよ。人材はたくさんいるんですけれども、うまくこれが活用されていないんじゃないかと思います。だから、これは踊りもそうです。三線もそうです。棒もそうですけれども。その他にも、狂言も一時期やっていたので、これも非常に貢献していると思います。

もう一つ、大きな、気になる点がですね、各公民館でシティブディといって、丸二日ぐらいかけて、各公民館の発表がありましたよね。全て公民館の持っている演目を出して、これが10年ごとに発表されていたんですよ。町制何十周年というときにやっていたんですよ。昨年途切れたんですよ。平成19年に発表して、去年がそうだったんですけど、それが消えました。そのときに、普段だったら、ひと月ぐらい前から、まあ、その前からだと思うんですけど、練習どうするかとか、色々出ると思うんですけど、全くそれがなかったんです。行政の方に聞いても、知らない。そういうことはわか

らない。「じゃあ、どうするの？」って言ったら、「いや、それもわからない」。だから、非常に関心が薄い。この行政に勤めている皆さんはですね。そういうことについて、非常に関心が低いな、という印象を受けた。公民館関係者に聞いても、あまり、わからなかったんです。ただ、年配の方は心配しているんです。これはもう、今途切れたら次、いつやるかわからんから、もう忘れられてしまう。だから、たとえば20年ぐらい前に、狂言に出たとか、組踊に出た人たちは、「そういえば、あのときやったね」というのは、かろうじて、今60代ぐらいですかね？覚えていると思うんですけども。それより若い人たちというのは、子供役で出た人たちがもう、40代を越えていますかね。そこまで来ているんですよ。だからこれ、今途切れたら、去年無くなりましたので、これがもし無かったら、もう完全に忘れ去られていくと思うんですよ。この、公民館自体の行事というのも。だからこういうのも、たとえば行政主導で、いついつ発表するからお願いしますって、もっていかないといけないんじゃないかと、思いましたね。10年ごとに行われていたものが、途切れたというのは、非常に心配しているところです。

それですね、ここに、郷土学習で育った後輩がいるんですよ。今、久部良中学校で教鞭をとっているんですけども。彼女がどういう思いで受けて、今現在、これからどうしていきたいかということ、是非、聞いてみたいと思うんですよ。



——譜久嶺マリナ

こんにちは。思いもよらぬ振りに、驚きを隠せないでいますが(笑)、小学校の頃から、オトミ先生の教室に通わせて頂いて。中学校に入り、郷土芸能の授業を受けて、舞踊を希望したんですが、人数の関係で三線の方に移ってしまったんですけど。三線コースで習っているものも教室で習っているもので、歌えるものは、もうあまり習っても意味がないかなあと、あまり嬉しくはありませんでした。それでお願いをして、舞踊の方に転換させて頂いて、そこで踊りと出会って、今も続けてさせて頂いています。

郷土芸能の時間はとても、今も教員として携わっているんですが、生徒もとても楽しく、一番、輝ける時間だと思っていますので、どうか存続はさせたいと思いますが。ちょっと、目的と、その結果が伴っていないというのが、久部良中学校の方ではありまして。なんで、この授業があるのか？この授業をして、どうなってほしいのか？ということ、もっと生徒と先生にも、理解してもらう必要があるのかな？というのが、今のところです。ありがとうございます。

——真謝喜八郎

先生、そこにね、比川で地謡をやっている方がいらっしゃるんですよ。聞いてみてください。彼は島外の方です。

——波照間永吉

はい。青野さんでしたね。本土から、与那国に入られて、地謡を今、やっていたらっしゃる。



——青野雅人

比川自治公民館の三線の座の師匠をさせて頂いております、青野といいます。先輩がたくさんいらっしゃって緊張しているんですけど、自分なりに、まだ比川の豊年祭は、今回竹富からいらしゃった皆さまには見て頂いていないので、少しだけ、今年やった比川の豊年祭の説明をさせていただきます。朝、拜所で祈願をしたあとには、三ピンを歌いました。それで拜所でものは終わりになるんですが、その後の祝賀会では、道唄を踊りと三線でやり、かぎやで風、鷺ぬ鳥節、豊年口説、比川美童という演目を、踊座に踊って頂きました。間には、もちろんご挨拶や、棒座の演目もそれぞれ5点ほどやっていたと思います。今回は地謡の話になりますので、私が地謡としてメンバーを選んだ中に、三線が私を含めて2名、太鼓1名と、笛1名という体制でやりました。歌と三線を担当した者、私と、あと太鼓と笛は、比川のメンバーで選んでいます。太鼓は沖縄本島からいらした学校の先生が元々ドラマーの方で、少し琉球太鼓の手ほどきを受けたあと、去年から太鼓を叩いて頂きました。それと、今年から初めて笛を入れたんですが、これは私の長男が、小学校五年生か六年生のときに、あちらにいらっしゃる田原さんが笛を作る授業というのを、比川小学校で講師を務め、授業をして頂き、その際に作って頂いた笛を、毎日のように吹くものですので、ちょっと、今年からやらないか、という話をしたところ、本人もやる気になったので、今回から吹かせました。それと、三線のもう1名なんですが、これは他の部落の公民館の方をお願いしまして、歌を歌って頂きました。

比川の豊年祭に関して、地謡の報告としては以上なんですけど。私が思うに、先ほども、行政がもっとああしたほうがいいんじゃないか、保存会ももっとああした方がいいんじゃないかとかっていうお話、皆さん、先輩方がされていたものを聞いたうえで、例えば学校教育に求められるものは、やはり限られている部分があると思うし、例えば、譜久嶺マリナさんが子供たちに、オトミ先生のご指導のもと、指導されている中では、限られた演目しかできないという部分があるので、たくさんのものは

伝えられないと思いますけれども。例えば、今、与那国に三線の座が無いと玉城先生が仰っていましたけれど、実際、本当に、比川に三線の座があるだけなので、その「座」というものがあるんだよってということも含めて、郷土学習の中で子供たちに教えるとか、郷土学習の時間といって「はい、じゃあ棒の授業ね」じゃなくて、「はい、じゃあ棒の座、稽古しなさい」とか、そういう指導の仕方をするとか。最高学年の、一番できる子に座の師匠を「じゃあ、今年あんたやれよ」っていうふうに声をかけるとか、いろんなやり方で、学校、公民館、行政も含めて、もっとお互いのやり方について、こうした方がいいんじゃないかとか、そういうコミュニケーションを増やしながらか、今後、与那国の芸能、及び、その地謡に関するものを、繋いでいったらいいんじゃないかと思います。

——波照間永吉

はい。ありがとうございました。

——崎原孫吉

いいですか？

——波照間永吉

はい、どうぞ。



——崎原孫吉

はい。保存会の会長をしている、崎原です。私は、三味線を習ったのは、富里（康子）さん、宮良保全さんが健在なときでしたけれども、あのときに私も与那国の民謡を習いたいと思って、あれから始めたんですよ。実を言うと、私はどちらかというと、民謡じゃなくてジャズの方が好きで、本当はやる気が無かったんですけど、「与那国の歌を習わないか？」ということで、じゃあ、与那国の歌だったら習いたいな、ということで入りました。あのときは、本当に20名ぐらいいましたよ。たくさん。それでずっと、富里さん、古見武三さんを先頭に、私は古見武三さんから主に習って、やってきました。

それで、保存会で唄三線のコンクール、それから舞踊のコンクールを14回ずっと続けて、14回は毎年やってきたんですけども。私が会長になって15回目から、5年ぐらい、コンクールをできなかった時代がございまして、去年、15回目を初めてやりました。つまり、何故途切れたのかというと、三

味線を習いに来る人がいないんですよ。あの頃から、週に3回、三味線教室をやろうとしたら、本当に、3名、4名しか集まらない、一人、二人しか集まらない時もたくさんございました。この会をやって、毎年会費をもらってはいるんですけど、会費をどういうふうにして会員の皆さんに返そうか、本当に、返すものがない。だったらもう辞めた方がいいかな？なんていうことも考えましたけれども。本当に、地域はたくさんの方がいて、頑張ったんですけども、どんどん減っていった。それは、どんどん三味線を弾く、地謡をする人の、魅力がなくなったからじゃないのかな？と、私は思います。つまり、やっても「どうせ、しょうがないさ」。ではなく「いや、あの人は西公民館、東公民館の三味線の師匠をして、やっているよ」って。何かね、名誉みたいなものが・・・ちょっと、言っては悪い話ですが、何か本当に魅力、(例えば)金銭的な魅力があっても良いのではないかな？と、思ったりするときもありました。本当に魅力が無いから、地謡をする人が少なくなったんじゃないかな、と思います。まだ、保存会も下の若い者は元気を出して、また一生懸命頑張ろうっていうことで、今、頑張っているところですけども。

それでもまだ、三味線をしたっていう人がいない・・・って言いながら、何か知らないけれども、与那国の工工四の本が良く売れるんですよ。「あれ、何だろう？」って。これ三味線を弾く人が多くなってきているのかな？って。最近、与那国の工工四の本が10冊以上ぐらい、サササッと売れて「あれ？」っと思っているところがあります。私のところで売っているんですけども。そういうことがありまして。地謡をしても魅力がないから、やったってしょうがないっていうような、感じがあるんじゃないかな。本当に何か、ここで盛り上げることがあったら、本当はいいことなんですけど。そういう感じがします。それから、言っただけかと思うんですけど、昨日の豊年祭の苦言を一言だけ言わせてください。最後に、「どうんた」がありました。どうんたの音をね、テープレコーダーでやっていました。何故？これも、与那国の芸能を育てていかなくてはいけないのに、何故、人が歌わないで、テープレコーダーが歌っているのか？本当に、さびしく思って、私は踊りの座に入らないで、そのまま家に帰りました。本当に、私はそれだけに残念なこと。本当は言いたくなかったんですけど。以上です。

——真謝喜八郎

すいませんでした。来年は改善するようにします。



——柿本太蔵

あの、久部良公民館から、よろしいですか？すいません、柿本です。私の方はもう、全く今、この場

にいるのもちょっと恥ずかしいぐらい、三味線もできないし、民謡もできないということでもありますけど、ちょっと去年ですね、町制70周年ということで、役場の方で、会議室で、各館から2点ずつ（演目を）出してくれという話があってですね。さて、どうしたものか？ということで。まず、今仰るように、比川、祖納三館ですね、皆さまの昨日の豊年祭で、やっぱり伝統芸能があるんですよ。で、久部良の方は、もう全く無いものですから、今から準備しても、お願いしてもってという話もあってですね、ちょっと役員の方で話し合っ。1点は学校の生徒さん。もう1点は個人的にやったんですけど。どうしても、久部良の方も伝統芸能がないということで、これはもうやっぱり、久部良は昔から無いんだよ、と。久部良はハーリーしかないんだよっていうぐらい、ハーリーはもう、とにかく盛んなんですよ。で、やっぱり、元をただして話を聞けば、比川が親部落ですね、比川からこう、昔は棒座もあったんだよと、比川からの流れで、ですね。伝統が途切れてしまっているという点では、現在も、ちょっと残念です。

ただ、久部良の豊年祭があったときにですね、豊年祭行事、旗頭を起すときには、棒座が久部良に無いもんですから、毎年、西の棒座をお願いしてですね、棒座の座長に「よろしく願います。こういう事情で」っていうことで。上げるときも、倒すときもお願いして。それも、豊年祭に合わせて、平日だろうが、用事だろうが、潮に合わせてやるもんですから、かなりの負担があると思うんです。それで今年は、青年会、公民館で引き継ごうという形で、単独で旗頭ぐらいは、地元でやろうということで、一応、今年から、取り組みはしました。上げるときには、祖納の西棒座をお願いして、豊年祭が終わる時は、地元でやりました。そのときは、私、比川の豊年祭、祝賀会に参加していたんですけど、「館長、無事に収めたよ」という報告を受けて、一安心はしています。そういうところ、伝統芸能を地元から、何かやろうということで、青年会も動いてですね、こういう芽生えはあります。

ただ、どういうふうにするのか？こういうふうにするのか？ということが、僕らも現時点で、方向性がわからないんです。今言う、地謡に関して、久部良の場合は本当に、玉城先輩には申し訳ないんですけど、途切れたような感じですね。豊年祭にしても、ハーリーの祝賀会にしても、地謡をお願いして。もう、そういう状況なので。本当に、部落が地謡を作ってやるというのは、僕も賛成です。いい方法で伝統芸能を育てて頂ければと思いますので、まあ一つ、私の個人的な意見ですけども。そういうこともありました、という報告ながら。よろしく願います。

——波照間永吉

はい。議題の2番がですね、学校と、公民館との協力関係ということなんですが、さきほど、田原さんからもお話がございました。オトミさんからも、学校の郷土学習における指導の立場から、非常に、これが難しい状況にあるという発言がございました。で、ちょっと後ろの方にいらっしゃるお母さんたちからですね、具体的に、子供さん、あるいはお孫さん方が、学校の郷土芸能クラブ、あるいは郷土学習の時間に、与那国の芸能を学ぶことによってどのような変化、あるいは、子供たちが郷土芸能を学ぶことに喜びを感じているかどうか、そのあたりのことをちょっと、現状を聞かせてもらえませんか？



——新里恵美子

こんにちは。嶋仲公民館の、踊りの師匠。名前だけなんですけれど、新里といいます。私たちの嶋仲は、東、西に比べると、人口がすごく少ないんです。毎年、豊年祭の祭りのときは、以前は、要するに嶋仲出身の方を東とか西から呼んでもらって、踊りの人数に組み入れていましたけれども、郷土学習が始まって頂いたおかげで、子供たちが全部踊れるんです。で、(豊年祭が)夏休みに行われるものですから、嶋仲部落の方は「ながく節」というのがトレードマークなんですけれども、全員が、その踊りができるっていう自負をもっております。誰かが何かで、できなくなったっていうときは、代わりの子供とかね、大人でも、ほとんどできるようになったということは、非常に嬉しく思っております。マリナさんも今年から加わって頂いて、部落の祭りの踊りとしては非常に活発になっているんじゃないかと、私は思っております。

ちょっと意見を一つ言わせて頂くと、伝統芸能の活発化をもう少しできれば、もっといい方向にいけるんじゃないかと、思っております。伝統芸能の何十周年っていったって、発表会が、以前はありましたよね?その発表会を持つことによって、もっと活発にできるかと思っております。郷土学習を発足して頂いた先生方に、感謝しております。ありがとうございます。



——崎原弘子

私は、西公民館の崎原です。館長さん、どうして館長さんが生まれにくいのか、ご存知ですか?館がないからです。私たち踊りも、前年度までは、お店の倉庫とか、民家とか、祖納港の休憩所で練習していたんですけど、今年はDiDiの好意で、ここで練習することができて、とてもよかったです。あり

がございました。館があれば、月に何回でも集まって、踊りの練習とか、そういうことができるんですけど、それが無いので、そういうことができなくて、とても残念に思っています。主人も1回、館長をしたんですけど、館がないので、みんな家でやったんですよ。踊りの練習も、もちろん。行事ごとにバリヌシ（慰労会）も家でやるし。マチリも。それから、布団も運んだし、道具とかみんな運んで。それでも、家族がとても重荷になるんですね。だから、館を早く作ってください。

中学校でも、私たちは、平成6年から、現在まで講師をしています。与那覇さんと二人で。だからもう、私たちが歳なので、後継者を作りたいんですけど、なかなか作れなくて、困っています。

——波照間永吉

はい。じゃあ、瑠都さん、お願いします。



——金井瑠都

すいません、ちょっとだけ。さっきマリナさんから、郷土芸能で学んだという話があったんですけども、私がちょうど中学校二年生の時に、郷土芸能の学習っていうのが始まって。私が一期生なんですよね。そのとき、2年間舞踊コースを選んで、(与那覇) 令子先生と、(崎原) 弘子先生に教えてもらったんですけど。あのときは人数も多くて、豊年祭で中学生が踊るとか、そういう機会がなくて、決まった人たちだけが踊っていたので、郷土芸能に触れる機会があることがものすごく嬉しかったんです。もともと舞踊をやっている環境にいなかったの。なかなか手取り足取り教えてもらえるっていうのがなくて。練習をして、マラソン大会とか、行事の時に「中学生として出てみたらどう？」って言われて、教えてもらって。踊る楽しさとか、舞台上に立つ時の緊張感とか、そういうのを教えてもらって。高校に行ったあとに、またこう、「夏休みに帰って来るんだったら踊ってみたい？」とか、帰って来るたびに声をかけてもらって、それで自分の中でどこか、嬉しい気持ちがありました。帰ると、またどこかでこういう機会があるかな？チャンスがあるかな？っていうふうにして、どこかで眠っていた感じはあるんですよ。

私、戻ってきて12年目になって、棒座の方で笛をすることが多いんですけど、それをやりながら、舞踊とはまたちょっと違うんですけど、子供の時に、いかに憧れをもつというか、郷土芸能とか、踊っている人とか、踊り方とか、何でもいいんですけど、この芸能にすごく、いい印象をもって。例えば家庭の中でも、踊りの、何かしらこういう話をしたりとか、その環境を作れば、島の外に出たときでも、何かこう、心の中に残るものがあるって、豊年祭の時期だから帰りたい、何かをしたい、っていうのが生まれるんじゃないかなというのを、経験してきて思うんですよ。

うち息子が今、5歳なんですけど、母親が棒の笛を吹くのを「僕もやりたい、だから練習に連れて行って。一緒に見せて。なんなら、舞台の側で、一緒に立たせて。音は出さないから」というふうに、ちょっとずつこう、自分の立ち位置を確保しようとして、頑張ってくるんです。そういう姿勢を見ると教えたくなるし。そういうのを伸ばしたいと思うので。大変だとは思いますが。なかなか育っていかないとか、いろいろ苦労はあるんですけど、どの分野においても興味を示せるように、地域の人で、子供たちに憧れが持てるような、声掛けをすることも大事なんじゃないかなと、実感しています。ちょっとそれだけ伝えたくて。

——波照間永吉

はい。ありがとうございました。学校における郷土芸能の教育というのが、非常にいい影響、いい循環を生み出したというお話でした。先程の新里恵美子さんよると、郷土学習でやって、そこで学んだ子供たちのおかげで、自分たちの公民館の舞踊は心配がないという。これも、非常にいい郷土芸能の効果が出ているというお話だったと思います。ここで、久部良中学校の校長をしていらっしゃる花城さんにお伺いしたいんですけども、いわゆるこれが、現在どうなっているのかわかりませんが、何時間ほど郷土学習の時間があって、郷土学習のうちの何時間を、郷土芸能に振り向けることが可能になっているのか。このあたり、田原さんも含めて、今後、町の方にもっと郷土学習をする時間を増やしてくださいとお願いするのか、いやもう現状でいいのですと、いうふうなことも含めてですね、お話しくさいますでしょうか。

——花城正美

今、金井さんがおっしゃった「憧れ」ということは、非常に大事なことかと思えます。実は今、学校でこれだけの時間をできるかということについては、学校の裁量で、総合的な学習という時間があって、その中で何時間やるかということ、学校の判断になりますよね。ですから、そこと合わせながら、支援していくということにおいては、役場ということもありますけど、教育委員会の、学校教育と社会教育という分野があるかと思うんですけど、社会教育の文化財担当の方のプッシュがまた、非常に必要かと思うんです。そのあたりは、誰が担当ということではないんですけど、そのあたりのことを大事にしていければという思いです。

ところで今の、憧れということがありましたけど、卵が先か、鶏が先かということになるかと思えますけど、崎原さんの中では、私も思うんですけど、地謡の魅力をどのようにもっていくかということ。それと名譽的もの、ということも仰いました。私ごとを重ねてお話ししますが、小浜島の舞踊曲工工四第一巻というのを、私、琉大のときに作りました。学生の頃にですね。というのは、先程からお話があるように、崩れていったりとか、また、研究所にどんどん一本化して平べったくなっていくという危機感があって、あの頃に作ったものです。そうしながら、地謡にハマりまして、今度は結願祭の歌詞集を作りました。それを少しまた整理して、このような、冊子のような物にして。今、これを基にしながら、地謡の皆さんはやっているところです。これはあくまでも歌詞ですから、曲がありませんから、曲はCDを含めながら、ということで。島の地謡の後輩の皆さんはこれを見ながら、聞きながら独習してきて、一週間前に合わせるという形態をとっています。

小浜の例をお話しますが、学校教育での、ということなんですけど、限られた時間で、郷土芸能を何故学校でやるかということについては、確かに私たちは非常に危機感をもっている。島の芸能の継承をどうするかということも、学校にお願いするけれど、本来、地域で私たちが真剣に考えなくてはいけない問題だと思えます。学校は、限られた時間の中で、こればかりっていうわけにはいきま

せん。学校の教育目標がある中で、「これこれを」というわけにはいかないと思います。私の場合は、昭和51年からずっと三線を学校でやってきた経験の中で、地域のを練習していくことは研究所等々でやることです。まずは主体となる子供に何を教えるかということ。人格形成とか、学習等という中で、私が常に大事にしていることは4点あります。まずは、子供にこういう経験を通して、感動を呼び覚まし、原風景を作ってやるということ。「原風景を作る」というのは、自分の生まれ育ったところの情景を、大人になっても大事にして生きるという子供を作ること。これは私の思いですよ。

二つ目に、地域の民俗芸能の催しに直接参加する中で、いろんなことを習得すると。大人から学ぶと。島々の倫理観もあります。道徳もあります。これを学ぶということ。三つ目には、演者となって、舞踊をしながら自分らしい表現をして、自分で自分の感性を高めていく、楽しくしていくこと。

一番大事なものは、民俗芸能との出会いを通して、地域に生きる力を身に着けるということ。「地域に生きる力をつける」というのは、学校でも言っていて、皆さんも耳が痛いかと思うんですけど、やはり生まれ育ったこの地域の社会性、共同性、あるいは地域愛、地域に誇りを持つということが一番若い人には大事なことだと思うんです。ですから学んだことを、芸能を継承してこれからの繋ぐということも大きなところですけど、いずれ羽ばたいていきます。「十五の春」で羽ばたいていきます。どこに行っても、地域を大事にするということであれば、戻ってきて祭りに出たいということも、またでてるかと、思っているんですよ。これは小浜の子どもたち、あるいは、回ってきた学校の中で、つくづく思ってきたところ。これは、久部良に行ったときは三線だけではなくて、笛を通せば、地域愛ができるなあ、ということで、外部講師として楽しんだこともあります。それをまた、田原さんが当時教頭でしたので、今、私以上に彼は笛作りが上手になっていますので、こうしながら繋いでいくのを、またお願いしたいと思うんです。

——波照間永吉
なるほど。

——田原伊明

学校での、こういう授業というのは、もう週2時間が限度ですね。それも年間通してできませんので、期間を限定してやっているところですよ。それ以上はもう、不可能です。そうしていると、他のものができなくなりますので。週2時間で、4月からやったら、10月ぐらいまでですかね。そのあと発表会で発表したら、あとは終わりということになります。

ですけど、さきほどからお話に出ているようにですね、この短い時間でも、習得した子供たちの努力というのはすごいですので、島から出ても、帰ってきたときに、すぐ応用できるという。やっぱり、中学校時代、小学校時代からも関連していると思うんですけども、非常にいいことではないかなと思います。最近はですね、幼稚園生から方言を取り入れて、学芸会で劇をさせたりしているんですけども。低学年にいけばいくほど、非常に上手なんですね。そして、習得が速い。さらに年齢を下げて行って、時間は多くなくてもいいですので、学校の中でこういう機会を作ってあげたら、非常に定着する各率が高くなんじゃないかな。興味も非常に持ちますので、いいんじゃないかと思います。学芸会を見たら、よくわかります。非常に微笑ましくてですね、上手ですね。幼稚園生は本当に上手。天才かなと思うぐらい。2、3日教えるだけですぐ覚えます。これ、(年齢が)どんどん上がって中学生に行けば行くほど、もう、難しいです、教えるのが。ですから、下に行けばいくほどいいので。そういう機会をたくさん、見せてあげたらいいかと思いますね。

自分の経験からしてもですね、私は一度も、こういうことに関われませんでした。ただ、外から見

ているだけでした。絶対、タッチさせなかったんですよ。もう決まっていた、出る子供は。何処の誰と決まっていたので、ずっと出番なしでした。やりたかったんですけど、一切もう、声がかかりませんでした。ですから、いつも羨ましいなあっていう、気持ちで見ていたんですね。でも、今の子どもたちは、逆に羨ましいですよ。いろんなことに関われますので。そういう機会を、増やしたいんですけども、学校現場では非常に難しいですので、少しでもそういう場があればいいかなと。そういう発表会も、地域でたくさん持てれば、そういうところにどんどん子供たちを連れて行って、見せたら、見るだけでもいいですので、機会を多く与えてあげたらいいかなと思いますね。練習の場とか、そういうところもですね。そのように思います。はい、以上です。

——波照間永吉

はい、どうもありがとうございました。今、田原さん、花城さん、学校長の経歴を持っていらっしゃる方々から、非常に貴重なお話、事実のお話があったと思います。郷土芸能の勉強は、総合学習の中で、学校の裁量、つまり、簡単に言うと校長先生の認識によってほぼ決まる、あるいは先生方の会議。一番上は、この地区の教育委員会、教育長の考え方というのが、相当働くと思われますね。

——花城正美

やる、やらないではなく、ウェイトのバランスをどうするかという議論ですね。

——波照間永吉

はい。まず、総合学習っていう大きな枠の中で、郷土の学習をする。私も、今、しまくとぅば普及センターのセンター長などしておりますから、沖縄県の中でも、このしまくとぅばをどのように学校で教えるかということが、大問題なんです。実はこれ、地域の市町村の教育長が、大体握っているんですね。ですから、いい事例ですので申し上げますが、宜野湾市の教育長が、非常に理解があつてですね、宜野湾市は去年度は2校だけだった。このしまくとぅばを、総合学習の中でやる学校が、今年は6校に増えました。ところが、0のところもあるんです、地域によっては。ですから、郷土の学習をするためには、教育長、行政が動かないとこれ、簡単には動かない、ということはもう分かっているんですが、郷土芸能についても同じだということ。そして、与那国の郷土芸能を学校教育の中で生かすという点についても、やはりこれは、教育長、教育委員会を動かす、ということになってくるわけですから、教育委員会を動かすのは、実は皆さんです。地域の住人が、教育委員会を本来、動かせるはずなんですよ。

そういう意味では、是非、郷土学習、非常に重要なんだと。郷土芸能の教育が非常に重要だということを、是非、行政に訴えかけていく仕事をしてほしい。そういうことになっていくと思います。と同時に、話しておられました、週2時間、これは限度なんです、と。そうしますと、結局は地域と学校とが協調して、車の両輪になってやっていかないと、子供たちの与那国芸能への取り組みは、順調にはいかない。十分にはなっていない。学校だけに任せるわけにはいきませんよね。やっぱり地域も、当然、地域の文化を伝える、芸能を伝えるという、取り組みをしていかなくてはいけない。ということが、おのずと明らかになっただろうと思います。そこで、本土から来て、オトミ先生から三線を習っていらっしゃる方からも、意見を聞かせてください。



——米澤恒司

私は北海道から来まして、北海道には、伝統芸能みたいなものは一切無いので、やっぱり、沖縄県、八重山、与那国町、こういう、昔からの伝統芸能があることを、すごく羨ましく思っています。

僕も、とても興味が湧きまして、三線教室に入りまして、今に至っているわけですが、三味線を今、オトミ先生の教室で習っていますが、思うのは、やっぱり継続の難しさみたいなのも感じていますね。何か目標があって、続けるっていうのは大切だなあと。教室に入って、ここにいる青野さんとか、マリナさんとか、同じ教室の方なんですけど、他にもたくさん、三味線仲間がいたんですけども、やっぱり、島を離れたときに、辞めてしまったりとか、また、内地に帰ってしまったりとか。そういう継続することの難しさみたいな、そういうのも、ちょっとは感じています。けどやっぱり、芸能を通して、皆で豊年祭とか、一体感っていうんですかね？地域の一体感は、本当に素晴らしいことだと思いますので。是非、いい方向で継続してくれることを望んでいます。

——波照間永吉

はい、ありがとうございました。ここで、保存会の副会長さんでいらっしゃいます、田頭政英さんから、与那国の芸能を取り巻く問題点なり、あるいは保存会の取り組み等々について、手短で結構ですので、ご意見お聞かせください。



——田頭政英

こんにちは。ずいぶん時間も、経過しております。芸能は、私の憧れだったんです。小学校四年から、

笛を吹いていました。いや、笛を吹かされてきました。母方の祖父が、吹けるからといって、連れまわして、10年ぐらいでしょうかね。ずっと吹いておりました。当時は、テンダバナが間近に見える、嶋仲に住んでおりました。夜になると、テンダバナを見ながら、ロマンチックな気分で吹いていたことを、よく覚えています。

さて、与那国の芸能、私、18歳で本土に行って、28歳で帰ってきた。この10年間、本土に住んでいたんですけども。本土での、芸能の盛んなこと。田舎に行けばいくほど、芸能が盛んでした。それを見て、与那国と比較してみたんですね。で、間もなく与那国に帰ってきて、三線を習おうとしたら、当時与那国の教育委員会におりました、波平さんが「三線を弾く人はたくさんいるので、あなた、笛をやってくれない？」と言われ、笛をやっていたら、地謡の笛、踊りの地謡の笛のつもりだったんですが、棒踊りに引っ張られまして、棒踊りの笛を長いことやって、そろそろもう距離を置こうとしていたら、3館に、棒踊りの笛が7年ほどいないということで、東も、西も、嶋仲も、いないときがありました。それで、一人で、3館を7年間ずっと吹いていたことがあるんですね。これはきついな、やっぱり、踊りの地謡に戻らんといかんなあと思って、また今日に至っているわけですね。

先程、うちの娘が、笛を吹く環境を作るといふこと、それから、憧れをもつということを書いていましたけれども。私は憧れていたから、娘も憧れていたのかな？娘の気持ちは全く分からないんですよ。ですから私は、娘に笛を吹きなさいと、教えたことは無いんです。自分が吹いていると、娘が笛をいじっていたので、この子は笛が好きなんだね、と思っただけであってね。幸いに、息子も笛は吹くんで。ただ、親として望みたいのは、今ここにきて、踊りの地謡の笛がないもんですから、踊りの地謡に転向してくれないか？そういう思いはあります。

で、一緒にさせてもらっているんですけど、砂川さんが、もう、娘に笛を誘ったらどうかと。それからもう一人、久部良にもいらっしゃるんですけども。私のところに1日で、笛を吹きたいって言うんで、習いに来たのが7人ほどでしたかね、おりました。でも、やはり魅力を感じないんですね。笛って、あの、単調なんです。吹いていると。今、久部良中学校で、笛を郷土学習で教えているんですけど。幸い、青野さんの息子さんが一緒にいるんですが、魅力があるのか？（魅力を）感じているのか？本当はやりたくないのか？よくわからないんですね。私としては。

もう、ここまで来るとね、私ももう70を過ぎているので、そろそろなんとか、後釜を作りたいなと思って、一生懸命あれこれ考えるんだけど、案がないんです。ここぞっていうときに、切り札がないんですね。ですから、私としては、「もう私で終わりかな？」と思っております。本当にもう、夢のない商売だなあと、思っています。ですから今後は、先ほどの魅力の話ですけどね、憧れを持つような笛の吹き方を、僕はしていかないといかんでしょう。「あのおじさんの笛は、なんともいえないから、教えてもらおうかな？笛を吹きたいな」そういう子供たちが出てくることを望んでいます。

——波照間永吉

はい、どうもありがとうございました。ほほ、時間、予定しているところでございますけれども、どうしても、この1点だけは、今日ここでお話ししたいというご希望がある方？じゃあ、石垣金星さん。

——石垣金星

西表の祖納の、石垣金星です。先程から、いかに子供たちに誇りを持たせるかと、非常に大事なことで、共通の課題ですが、私も祖納で、子供たちにこの伝統芸能をどう伝えているかということ具体的を紹介します。祖納には、学校は学校で、独自の取り組みがありますが、地域には、子ども会というのがあります。与那国にもあるかと思えます。祖納は祖納子ども会、隣は干立子ども会、地域独自の

子ども会の活動をしています。その中で、地域行事に子ども会が関わることが、3回あります。まずは豊年祭、このあいだ、8月の30、31日にありましたが、実は祖納、干立、御神輿があるんですね。与那国で見たら、子供が作っていたんですが、間近で見たら、同じような御神輿で、自分たちで手作りして毎年作っているのがあって、「同じものがあるな！」とびっくりしながら見たんですが、祖納のは70年になります。

もともと無かったものを、タマキシゲルという石垣出身の学校の先生が、大人たちは酒飲んで、三線弾いて、自分たちばかり楽しそうに遊んでいるのに、子ども会は何にもするのがないと。子供たちにもなんとか、豊年祭の喜びに参加させる場がないかということで、とっさに思いついて、大和式の御神輿を作って、参加させたのが70年続いて、立派な伝統になっているんですね。それで自分たちで初めから、1か月前から、もう、飾りつけから何から、全部手作りです。大人は誰も手伝いません。学校が休みだとね。それで、これまでは大和唄を2曲だけ歌って帰ってきたんですが、これじゃあまりにも愛想がないから、やはり島の、せっかくだから、踊りもさせようってことで、自分たちで三線を弾かせて、踊りもやれということで。西表を歌った西表口説、まるまぼんさん、できればあと3点、5点ぐらいやれと、前もって稽古させたら、去年から、御嶽で、神様の前で、子供たちが自分たちで三線弾いて、自分たちで踊り稽古して、踊りも披露すると。二日間、そういう機会を与えたら、子供たちは張り切って、喜んで一生懸命やっているんですね。

少なくとも西表で生まれたら、中学卒業したら、みんな高校から島、親元を離れます。で、ほとんど帰ってこない。どこも一緒ですね。で、私どもは、島から出る前に、島の誇りになるものを、最低、西表の口説や踊った踊り、必ず覚えてから島を出る、それを覚えれば、世界中どこに行っても西表の子として、たくましく生きることが出来る。そういう人間になれば、それが僕らの目標です。そうすれば、いずれ帰ってくる時期が、必ず来ると。非常に不思議なことに、私もそうですが、島を出た人が、帰ってきて島を守ることに頑張っている。島に何故帰って来たかという、なかなか説明できないような、そういう時期が必ず子供たちに来る。その来るべき時期が来た時には、恐らく島の神様が、あなたを呼ぶだろうと。そういう時期が来たら、帰ってこいと。ということで、今、子供たちをどんどん鍛えて送り出しています。

ですから地域として、島から子供たちが出たから寂しいと思うのではなくて、余所に出して子供たちを鍛え直す、余所に出て、余所でも失敗して、何もやることが無いからってということで、夢も希望もなくなって帰って来たのは役に立たない。というふうに思っていますので、そういう機会を作っています。その、帰ってきた人が青年になって入るのが西表青年会。祖納、干立の青年たちで作っている西表青年会というのがあって、大正12年にできて、95年。もう、延々とやっていますが、その青年たちがですね、私が帰ってきて、1972年、青年会が復活しました。それから5年経って、青年は島を引っ張っていく力にならんといかんから、やっぱり島の伝統文化を引き継ごうということで、唄三線、踊り、これを引き継ごうということで、青年芸能発表大会というのを毎年やっています。これまで、唄三線、踊りは祖納、干立の青年たちがきちっと引き継いで、毎年青年祭で、披露、発表している。ということがあるので、実際、心配していません。ですから、あまり心配するよりも、いかにして子供たちをたくましく育てるか。時期が来れば、子供たちは帰ってきますね。これは、何故帰ってくるか、私も自分で何故帰ってきたか、よく説明できないんですけど。恐らく、島の神様が「お前、帰れ」と。私の短い足を引っ張って、引き戻したんだらうと。そう思っていますけれども。そういう不思議なことがありますので。一応、紹介しておきます。

一波照間永吉

はい、どうもありがとうございます。

——亀井保信

ただいま金星さん、精神論の森巖の話をされましたけれども、私はちょっと現実的な話になるんですが、伸び盛り子どもたちに、我々大人が、何ができるかということ、私も竹富島におりまして、考えたときにですね、とにかく子供たちのために何でもいから、大人が種を蒔いてあげる。蒔いた種は、必ず芽が出るといわれています。蒔かなければ、芽は出ないんですよ。そう思ってますね、私ごとですが、3年間、笛の教室をボランティアでやりました。そしたら、一人は完全にもう、巣立ちました。種子取祭の笛が吹けるぐらいの中学三年生が誕生しました。「これはしめた！」と思いましたね。やっぱり蒔いた種は生えるんですよ。そう思って、今はね、三線教室をやっています。

私は、三味線は下手です、正直言って。でも、三味線をやった経験はあったので、なんとか20曲は教えられる自信があるので、今、毎週土曜日に三線教室を、子供育成会の事業を取り入れてやっています。これもさっき言った、種蒔きの一つだと思って。「まあ、蒔いた種は、いつか必ず生えてくれるだろう」と信じて、それも、楽しみながらやっているところです。

——波照間永吉

はい、どうもありがとうございました。2時10分から、この座談会スタートいたしまして、ほぼ2時間30分になろうとしているところです。今日は、いわゆる公民館における、祭事の芸能を担う人材を、どのように育てていくかという問題について、色々ご意見を出して頂きました。地謡、唄三線に進む人たちが非常に少ないという、3館の共通の悩みがあって、かつては唄三線をする人もたくさんいた、しかし何故か、魅力を感じる人が少なくなって、現状があるのではないのか？というご意見がございました。魅力が無いというのは、本来、最初から魅力が無いはずはないんですよね。魅力は、本来ある。しかし、それが感じられなくなっている。その、何故、魅力がないと感じられるようになっているかの、問題を解決していかななくてはいけないんじゃないかと思います。今日は、具体的にここが痛いから、ここをこう手術しましょうという、対処療法の話はほとんどできないままに、ここに至っています。ただしかし、とても大切なことですが、心の問題を主にお話することになったんじゃないでしょうか。結局、子供たちに面白さであるとか、郷土の芸能を学ぶ、文化を学ぶことがいかに大切であるのか。そしてそれは、これから生きていくうえで、人生を歩んでいく、その過程の中で、故郷を愛する心と、一体になっているんだ、石垣金星さんが話されたように、西表の芸能、西表の文化を、子ども会で学んだ子供は、いずれ、西表に帰ってくることもあるんだという、その話ですね。あるいは、亀井さんがよくまとめてくださったと思います。種を蒔く、種を蒔かなければ、生えないんだ、生やすためには、種を蒔くことからまず始めましょう、というお話。今日皆さんが、お互い話されたことのまとめの言葉だと思います。田頭さんが、子供たちが「あのおじさんが吹いている笛、私も同じように吹いてみたい」という、魅力を感じさせる演奏をしていかななくてはいけない、というお話をされました。このように、我々が、子供たち、後進に、どのような種を蒔いていけるか、そのことがとても大切ではなからうかと思いました。

そして、この会としてもですね、いくつか行政に提言をしなくてはならないことが、どうもありそうだとすることもわかってきました。その一つが、学校における、郷土学習、郷土芸能の、この現在の体制、より良く、もっともっと充実させるようにしてほしい。同時に、地域がまた、同じように、子ども会のお話がありましたように、子供の中における、与那国芸能への興味関心を引き起こしてやる、興味を持つように地域が取り組む、そのような仕事をしなきゃいけないということ。そしてもう一つは、田原さんが話されていましたが、10年に1回行われていたシティブディが、絶えている。これは、私も話をしましたが、シティブディの中でやられる、組踊などの復活に、大いに関わっています。何故、

本来やられるべきであったシティブディが、やられなかったのか？これは今、次の10年目に、近々ですよね？それでやられなければ、本当にもう、20年、2回、絶えて無くなってしまふ。そうすると、伝承の断絶が起こってきます。それが決して起こらないように、これは、このDiDiの交流会議から、是非、町の方に要請するというので、よろしいと思います。皆さん、ご異存ないと思います。このシティブディの行事を是非、10年1回の行事を今回は流さないように、是非、取り組んでほしいという要請を、なさってみてはいかがでしょう？そして、館が欲しいと、西公民館の館が欲しいという、これまた、切実な声がございました。いずれにせよ、地域の文化を守り、作っていく、これは、行政も一緒にやらなきゃできないことなんだということ、これはもう明らかなことだと思いますが、このこともまた改めて、ここで確認できたことではないだろうかと思ひます。

今日、こちらにお集まりの方々、皆さん本当に、等しく、与那国の歴史、文化、自分たちの祖先が作り上げた文化芸能に誇りを持ち、そして深く愛着していらっしゃる方々だと思います。この皆さんの情熱が、決してそのまま消え去ることがないように、与那国の子どもたち、青年たちに、是非、種を蒔いて、大きく育ててほしいと思ひます。

2. 小岩秀太郎講演録

平成30年12月18日 19:00～21:00 DiDi与那国交流館

小岩秀太郎「いまこそ、民俗芸能—東日本大震災からの気づきと、新たな取り組み」

——小池康仁

一般社団法人与那国フォーラムは、平成28年度より、沖縄県、(公財)沖縄県文化振興会の支援を受け、調査事業を行っています。単に与那国の中だけではなく、県内外にも共有できるテーマとなるように行っております。その中で、八重山で国指定を受けている祖納、干立、竹富島、小浜島を初めとして、八重山の他の島々とも意見交換の機会を作ることができるように、実施しているところです。その中で、昨年度、竹富公民館において芸能交換会を実施させて頂きました。このときは与那国から舞踊と地謡の若手を連れて行きましたが、どうしても人数が限られてしまうため、今年度は各集落の舞踊、地謡、狂言の皆さんと交流して頂くため、2月2日に、与那国中学校での芸能交換会を企画いたしました。それだけではなく、与那国の舞踊・地謡の師匠の皆さんと、八重山の芸能の指導者の皆さんとの座談会を実施しました。

今回は、昨年度実施した芸能交換会の際に登壇して頂いたパネリストの中から、東京の全日本郷土芸能協会の小岩秀太郎さんをお招きしました。小岩さんは、岩手のご出身で、鹿踊の伝承者でもあります。東北地方では、2011年3月11日の東日本大震災を境に、地域の芸能の在り方が変わったといわれています。それまでは、観光集客に力を入れていたところが、震災後には、集落復興の原動力となったといひます。地域にとって、芸能、祭事をする事とは何でしょうか？それを続けていくことにはどんな意義があるのでしょうか？これは与那国、八重山だけではなく、全国的にも、普遍性のあるテーマだと思います。そうしたことを考えるために、うってつけの方ではないかと思っております。今回与那国にお越し頂き、芸能もご覧頂いたうえで、全国の事例、あるいは、東北の事例についてお話し頂けないかということで、今年の夏から調整して頂きました。調査のため、マチリにお邪魔させて頂きました、西の公民館長、役員、嶋仲の公民館長、役員の皆様に、心より御礼申し上げます。



——小岩秀太郎

こんばんは。「おぼんでございます」と申しますけれども、小池さんも外の人ですけれども、全国の事例から、八重山の芸能をもう一度考え直してみたい、との思いが強くおありなので。地域の方と、将来どのようにしていくか、とお考えの方だと思うので、私で少しでも役に立つことがあればと思い、お引き受けしました。与那国の前に、竹富にも行きましたが、生まれも育ちも山なので、海の方にほとんど行ったことがありませんでした。ですから、皆さんが島でどのように生活し、島の生活から、マチリや芸能が生まれてきたのか、私たちの体験も交えながら、お話していきたいと思います。まだまだ若造ですが、芸能を色々見てきているということで、お話をお聞きください。

まず、何故「今こそ、民俗芸能」というタイトルを付けたのか。郷土芸能や民俗芸能、っていう言葉は、使いますか？郷土芸能という言葉は使いますか？だいたい、「芸能」とか、「祭り」とかっていう言い方ですかね？民俗芸能という言葉はそもそも外から学者がやってきて、「民俗」というのは皆さんの暮らしの事です、暮らしの中でやられている芸能を、「民俗芸能」と呼んでいます。私たちはふだん、「郷土芸能」、「踊りっ子」、「唄っ子」とか言っています。一般に、大学などで教える場合は、民俗芸能と呼ばれています。郷土芸能っていうと、「郷土」は「ふるさと」という意味なので、ふるさとに近い人たちが使います。実は、学校ではここ何十年「郷土芸能」ということばでは教えていません。偉いところからは、「郷土芸能という言葉はあまり使わないでくれ」と言われるような状況です。

・いつも私たちの「くらし」のそばにあった祭り・芸能

与那国や八重山の人は良くわかっていらっしゃると思いますが、結構忘れ去られています。祭りや芸能、祈願は、私たちの暮らしの側にあります。暮らしに繋がっています。そこについて、与那国や八重山の事情も含めて考えていきたいので、後ほど比較しながら、お話していきたいと思います。まず、生きるか死ぬか、っていうことを前提に、踊り、唄、舞をやっていたっていうことは、念頭に置いておきたいと思います。食venaきやいけない。寒い布を、草もなかなか取れないので、つぎはぎしながら、ぼろ布になりながらもあったかい格好をしよう、切り紙を神様に備えて、一年無事に過ごせるように、祈ったりとか。

・多様な祭りと芸能

(スライドの写真を見せながら) この中で、見たことがあるものはありますか？みなさん。獅子舞は見たことありますよね？これはわかりますか？宮古のパーントゥ。これが来訪神行事ということで、海の彼方から、山から、やってくる訪れ神ということで、ユネスコの無形文化遺産に登録されましたけれども。日本はやっぱり島国なので、見えない世界から神様がやってくる、仏様がやってくるという話は、どこにでもあります。北でも南でも、北のなまはげも、南のパーントゥも、ミルク神もそんなんですよ。海の向こうから、私たちの知らない世界から、お面を被って来る存在として、いたわけです。これも、顔をかくしてやる、盆踊りです。この辺は、盆踊りって、やります？太鼓叩いたりする。エイサーがそうか？エイサーと同じように、盆に踊るものですが、なるべく、顔を隠してする。(スライドを見せながら)この辺の剣舞とか。この辺は、念仏踊り、似たようなもの、ありますか？アングマー？そうそう。こういうふうに、顔を隠して出てくるんですけれども。何故かっていうと、マチリも終わったばかりですけれども、これは、亡くなった人のための供養踊りで、踊っているところに、亡くなった人も入ってきて、一緒に踊る、誰が生きている人で、誰が死んだ人かわからないように、覆面をして踊っているのが、盆踊りでは多いことなんですよ。覆面をすることによって、私たちが生きている人か死んでいる人か、わからないようにして踊りましょってというのが、念仏踊なんですよ。岩手県の鬼剣舞という、剣をもって、マスク、仮面をかぶって踊る舞があるんですが、これも念仏踊なんです。私がやっているのは、鹿踊というんですけれども、これも念仏踊の一種なんです。どういう踊りかという、すごい、足を踏む動作をやって踊る、踊りなんです。そうすると、地面の下にいる、悪さをするものを、踏みしめながら、この土壌をきれいにしますよ、という動作が多いんですね。で、これを、ケンバイを踏むという。前横後ろに足を踏む動作をヘンバイというんですが、これがなまってケンバイといわれるようになったといいます。で、これも全国にたくさんあるんです。

このように、全国に様々な踊りがあるんですが、これらの踊りは、全部、そこに住んでいる人たちが、先祖が、私たちのために、30年先か、300年先かわからないですけれども、遠い未来孫やひ孫たちが、この土地でなんとかうまく生きていってもらいたいよね、と思って生み出してきた技が、こうした芸能なんですよ。だから、「いやあ、派手な踊りしてるなあ」とか、「かっこいい派手な格好してるよな」とか見えますけど、それらは全部、私たちの祖先たちが、おいしい水を飲めますようにとか、おいしい肉が取れますようにとか、稲がうまく育ちますように、といった願いを、踊りや衣装やお面に、ちよつとずつヒントを入れて、変化してきたのが、今私たちがやっている芸能なんだ、って考えたいんです、本当はね。だから、皆さんがやっているものも、知っている人の親とか、おじさんとか、ずっと昔から、知っている顔がつながってやっているんだよっていうと、今日、司さんがいらっしゃっていますけれども、なかなか逃れられないものにも、なりうるんですよ。

私も、生まれた家が600年続いているって言われると、いつ岩手に帰ろうかな？その600年の重みってどうしようかな？って思う時もあるんですが。まあ、でもまだ帰れないって思うんですけれども。そういうふうに、みんな積み重ねて生きてきた、って思うんです。

・「祭り 郷土芸能」

「インスタ映え」って知らない人もいるかもしれませんが、携帯で写真を撮って、インスタに上げると、「いいね」って付いたりとか。今、お祭り芸能って、注目を集め始めていて。何でかって言うと、見たことのない世界で、伝統もいいし、格好いいし、太鼓を聞くとワクワクしたりってことで。ただ一方では、後継者が不足していたり、「やっぱり年寄がやるもんだよね」って言われたり、地域のお祭り、芸能だから、「行っていいのかなあ？」っていうのがあったり。あとは、ヤンキー。この辺、ヤン

キーはないですか？ヤンキーは、結構、お祭り芸能に関わっている人が多いので、荒くれ者がやっているイメージがあったり。あとは、結構舞台上でやるようになったり、結婚式に呼ばれて、3分だけちょっとやる見世物になったり、ちょっとだけやったりすると、面白かったんだけど、これどんな意味だったかな？っていうのが、わかりづらくなったり、あとは観光商品として使われたりとか。そういうことが多くなっています。

それで、何で、こんな伝統芸能って「格好いいな」と思われているながら、さっぱり人が増えないんだろう？って考えると、やっぱりここの土地に残って、「良いよ、良いよ」って言う人たちが減っているからだと思うんですね。私も、生まれ育って18年岩手にいましたけど。何故、岩手を出たかという、もちろん仕事が無いというのもあるし、家のしがらみが面倒だったり、外に出ると、英語がしゃべりたいとか、外国に行きたいとか、金稼ぎたいとか、田舎にすることがよくない、と思う時期があるわけですね。芸能っていうのも、土地に根付いているものなので、土地に根付いているものと、私が今から生きていく方法というのが、合わないってことがあって。それで、郷土芸能が格好悪いものだ、ダサいものだ、面白くないものだと思います、外に出ることが多くなっているんじゃないかと思う。

それから、学校で教える。この辺は、芸能とか、舞とか、踊りは学校で教えることはあるんですか？ある？それは、踊りとして教えるんですか？歴史教育？授業の中で？地域の人たちが、教えに来てくれる？…ですね。ここは豊年祭とかマチリがあるので、見る機会が多いと思うんですけど、私が小学校四年生の時に初めて、学校で教えられたんですよ、踊りというのを。全校生徒が、当時60人だったんですけど、そのうち、四、五、六年生が対象だったので、まあ、せいぜい30人くらい。全員教えられるんですね。教えられるのはいいんですけど、お祭りに出るわけじゃなくて、とにかく踊りを教えたいってことで、お年寄りが教えに来るんですけど、私たちの踊りって激しい踊りだったんで、お年寄りが教えると、さっぱり面白くなかった。お年寄りたちが踊る踊りを無理やり教えられるから、好きじゃないっていう人が増えてきたり。まず、最初に「俺たちがやっている獅子踊りっていうのはな」っていう歴史を、延々と教えられるわけですけど、四年生にその話はわからない。で、一番最初の入り口の時点で、つまらない話をしてしまいがち。おじいちゃんたちはきちんと歴史をわかってほしいっていう思いがあるから、その気持ちはわかるんですけど、ちゃんと入り口を作ってあげないと、皆、芸能とか地域とかに興味持たないで「いやあ、こんなんだったら外に出たほうがいいよね」っていう人が、多くなっているんじゃないかと思います。だからそういう意味で、後継者が減っていているのは、ある意味で、ありうることだと思っています。

草鞋って、使ってますか？ここは。小さい草鞋は作れる人いますか？草鞋というのが、今はない。稲を刈っても、機械で刈ってしまうので、稲が短い。縷うように、長い稲藁が採れなくなっているので、草鞋が作れなくなっています。作れる人いっぱいいるんですよ。いっぱいいるんですけど、結局草鞋が欲しいよって言った時に、買ったほうが早いんですね。買うとこれ結構するんですよ。3,000円ぐらいするんですね。だからやってる踊りをしてる人たちは、すぐに欲しいんですけど、だから、近くにいるおじいさんたちを無視して、京都に電話したり、インターネットで買ったりっていう人が増えている。結局作れる人がいっぱいいるにもかかわらず、誰もそこに「草鞋を作ってください」って言わないから、草鞋作る人も、全然声かからないなって言って終わっていくし。草鞋を履く人たちも近くに草鞋を作る人がいないって思い込んでしまうことが多くなっているようです。これが一般的な郷土芸能の、全国の事情はそういうことなんです。

・公益社団法人全日本郷土芸能協会

だからやっている人たちは、数えられるだけで約9,000の民俗芸能が日本にはある。国指定、県の指定、町村の指定を受けているものだけで9,100あるんですって。それ以外にも未指定って言って、家でやっている、例えば刀でやる踊りとか、薙刀でやる踊りっていうのも数えると10万以上ある。そういうのがまだまだあるんですけど、郷土芸能っていうのは全然知られていない状況にある。それをなんとか知ってもらわないといけないということで、私は今、全日本郷土芸能協会というところにいます。

それで今、3人でやっているんです、全国の組織なのに。全国の踊り芸能をやっている人たちをなんとかしなきゃいけないってことで。ここに入ってもらって、みんなで話し合う場を作っているって事なんです。全国のイベントなんかをやるのが多くて。地芝居を、これはキングイとかもそうなんですけど、プロじゃない人たちがやる村の歌舞伎など、みんなで話し合う場を作ったり、あと獅子舞の全国大会をやったり、子供がやる芸能の大会をやったりしていますけど。子供の大会は、今まで15回実施していますけど、大体、今まで110団体出ていますね。子供がやっている芸能団体って全国見るとまだまだたくさんあるので、そういう人たちを取り上げてあげたいですね。八重山の農林高校なんかも、今一生懸命やっていますよね。あと南風原高校なんかも全国大会に出ていい賞を取るようになっていきますけど。やはりそのように、小さい頃から取り組んでいるところはまだまだたくさんあるので、取り上げて行きたいなと思っています。

・地域を越えた交流とネットワークの活用「全国地芝居サミット」

地芝居のサミットっていうのは、全国の小屋の中で歌舞伎を、その土地の人たちが自分たちで隈取りをしたり、衣装を作ったりして、やるようなサミットをしています。このサミットをやって良いのは、その日の夜の交流会で必ずその土地の美味しいご飯と美味しいお酒が出るように市町村が考え出してお迎えするというのが流行っているんで、この大会は人気の大会というか、全国でもやられているものです。

・日本のまつり

ちょっと難しい話ですが、昔の大阪万博に行かれた方はいますか？1970年。行きましたか？お祭り広場は行かれましたか？この太陽の塔の下で、踊りを踊っていた。この時に私たちの郷土芸能協会ができたんです。それまで、ここもそうですが、郷土の芸能というのは外に出してはいけないものだった。やはり神様が近くにいないといけないとか、みんなで守ってるものを盗まれちゃいけないだとか。そういうこともあったので、あんまり外に出してはいけないという印象が強かったんですけど、日本が戦後経済が高まっていく中で、やはり外国の人たちに見せつけなきゃいけないということで、この万博とかオリンピックとかやったわけですから、その時に見せつける一つの方法として、郷土芸能があったんです。

日本というのは、こんなにいろんな種類の人たちが住んでいて、こんなに色々な種類の踊りがあって、日本から世界に見せつけてやろうという思いがあったので、6週間日本の祭りっていうのをこの太陽の下でやっていたんです。何百団体出たんですけど、呼ぶのに一番大変だったのが、神様の側の存在なので出たくないっていうのを、無理やり出すのが一番大変だった。で、それをやったのがうちの協会の先輩たちなんです。今考えたら、まだみんな神様のこととか考えている時代だったと思うので、よく出ようなど、思ったと思うんですけど。逆に、そうしないと伝統が繋がっていかないとって、選択した可能性もある。どっちがいいかはわかりません。でも出たことによって、「ウチはこんなに人が少ないと思っていたけど、他のところはこんなに頑張っていたんだね」、とか。「全然、北なのに、

私たちの、南の太鼓と同じようなものを使ってるんだね」、とか。ということで、いい交流になったんですって。

交流をしたことで、じゃあ、私たちがこれからやろうとしていることを、皆で話し合っただらいいんじゃないかっていうことで、この協会を作りましょうということになった。悪いこともたくさんあった。舞台に乗せるので、いつも40分でやっているものを、15分でやってくださいって言ったり、いつも神様の方を向いて、後ろを向いてやっているものを、お客さんの方を向いて行ってくださいって言ったり。あと、光に当てちゃいけないのに、照明を当てて、音響を使っていい音を出すっていう演出をしたりして。それが本当に良かったかどうかは分からない。分からないけど、それをしなければお客さんは満足しない、っていう世界も作ってしまったので、悩みどころです。私も今、すごい悩んでいますけど。皆さんも、そういう悩みが、今後出てくるかもしれませんけど。神様に向かってやるのが当然だ。しかし、見たいという人たち、聞きたいという人たちもいるから、どっち選ぼうか、というのは、ここに住んでいる人たちが、みんなで話し合って決めなきゃいけないと思うんですけど。どちらもあるんだよ、っていうことを考えておくことは、必要ではないかと思います。それを一番最初にやった団体は、うちの協会の、先輩たちだった。

そのとき、民俗芸能に関係している先生も入っていたんですけど、本田安次さんという人が入っていた。あと、三隅治雄さん。本田先生や三隅先生は与那国に来ていますか？本田先生は来ている？三隅先生は来っていますか？…来ていないか。本田安次さん。民俗芸能の研究者です。芸能史を、一番、ちゃんと作った人ですね。そういう先生も入りながら、映画監督も入ったり。あとは宝塚の演出家が芸能が好きだったので、この協会に入って、声をかけて歩いた。大きい舞台を作って演出するようになったハシリを、うちの協会がやったんです。何度も言いますが、良かったか、悪かったかは、あなたたち次第です、としか言えない。でも悩むところだと思います。しかし、そうやって舞台化していくと、これは郷土芸能だったんじゃないの？地域から離して、そういうふうに見せるっていうのはどういうことなんだ？って思う人も当然出てくる。私たちも仕事としてそのようにステージの上に連れてきて見せる、ということを東京で行ったり、海外で行ったりしているので、悩むことも多いんですよ。

・2011年3月11日

で、悩み悩んでいるときに、この3月11日の東日本大震災っていうのがあったんです。

この東日本大震災というのは、私が育った岩手県も中心となって、被害を被ったんですけど。私はその時、東京にいたんですが、友達の家が流されたりとか、知っている人が皆亡くなったりとか、すごい近くで分かっている状況だったんですけど。

・3221

そんな中で、この数字分かりますか？「3221」。これは東北6県の、数えられる郷土芸能の数、3,000件ぐらいあったんですね。その中で、被害を受けた芸能の数を調べたんです。私たちが、で、1,480ぐらいの団体を、2014年の時点で載せたんですけど。その中で、この6割ぐらいが、何かの被害を受けたと。被害というのは、まず、当然津波なので、持って行かれると。着ている衣装だったり、太鼓だったり、お面だったり。そういったものを持っていかれてしまった。あとは、津波が襲った時に火事が起きるんですね。プロパンが爆発するので。そのプロパンの火事によって、流されなかった高台の家も、もう燃えていく。あとすごかったのは、神社というのはだいたい高台にあるものなんです。でも倉庫というのはその下にあって、お祭り道具とか置いてあるものなので、神社は生き残るんですけど、お祭り道具は流されてしまうというのが、結構すごかったんですけど。だから、道具類は分散させて置いておくとい

うのが、これを通して気づいたことです。全部ひとまとめに置いておくと一気に無くなってしまうので。あとは、踊っている人たちや、伝えている人たちが流されてしまった、というのも多い。ただ、見聞きしていた人たちは、意外と覚えているものなんですよ。30年前に、「ああ、お母さんやってるの、お父さんやってるの、見たことあるなあ」とか。60年前、小さかったんだけど、見た記憶があるというので、それで、復活させようねっていうことで復活させたところも、かなり多かったですけど。だから皆さんの記憶というのは、曖昧かもしれませんが、意外と、やろうと思ったら、ちゃんとした踊りを復活させることができるっていうのも、この被災地の人たちを見ていて思ったことですね。

あと、一番大変なのは、原発の部分。福島のところですね。原発のところは大変で、私も何回も行ってますけれども、獅子舞の頭が、神社の中に置いてあったりする。公民館の中に置いてあったりすると、それを持って帰るってことが、出来なくはないんですが、持って帰ったら、除染しなきゃならないんですよ。それに時間がかかることもあったり、あとまだ、すごく放射能の濃度が高いので、それをかいくぐるにも、すごい時間がかかって。で、帰れませんからね、皆さん。それで、内陸の方に住んだり、東京に住んだり、そういう人たちが、「練習しようか」って言った時には、なかなか集まれなくて。「一人、二人やったってしょうがないよね」って言って、辞める人たちが結構多かったです。

ここ、浪江町にある鹿舞は、去年の3月に何年ぶりかに復活したんですけど、その時も、もう1日もいられない場所なんですね。だから半日だけ帰って、そのお祭りをするためだけにみんな帰って、踊って、ご飯食べてから、もう、仮の家に帰るってことになるんですが。これがあったので、逆に、7年離れていても、お祭りがあったりとか、獅子舞があったことで、みんなで集まれる場所には、なれた。良かったというのはあれですが、そういう繋がりや、郷土芸能にはあるな、というふうに思っています。

結局、震災があった時に、東北の芸能はすごく早く復活したんですけど。何でこんな、みんな大変な仮設に住んでいて、ご飯も食べられないのに、買い物するところもない、車もないのに、一番最初にみんなが言っていたのは、「とにかく太鼓が欲しい」とかね。「お面が作りたい」とか、「衣装を作りたい」って、すごい、言ってくるんですよ。何でそんなに言ってくるのかな？って、私は薄々気づいていたんですけど、普通の人は中々わからなかったのは、結局、それをやらないと、亡くなった人が寒いですよね。「亡くなった人を供養できないから」って言ったんですね。それは、お年寄りみんな知っていたんです。

(スライドを見せながら) 家に来るっていうことは、若い人たちは、こういうものが家に来たとしても、今引き籠もり多いですから。あと、お盆や正月になったら、車で出かけてしまうので、若者たちは出るかわからないから、そういった芸能を見る機会って、意外と、そういうのは知らなかったんですけど。もう、震災になったらそんなこと言っていられない。みんなで力を合わせなければいけない。そしたら、家にどんどん来るわけですよ、こういう踊りが。「じゃあ、そういうことだったんだな」。結局、小さい頃に、格好いいのか良くないのか、よくわからなかったけど、太鼓を習っていた人たちとか、結局は、「自分たちの近くで亡くなった人たちのために」とか、「もっと地域のためにやらなきゃいけないんだ」とか、もう1回、思い直すきっかけになったから、震災というのはすごい大きかったわけなんです、我々にとっては。与那国に、津波が起きろって話ではないですよ。でも、そういうことがあったことで、まだまだ思い出せる人がいる。だから、覚えていることはできるだけ、若い人たちに嫌だと思われても、言い続けることが大事なんじゃないかなって、思っています。

全国の芸能の話を少ししておきます。島の芸能だからとか、内地の芸能だからとかっていうふうに、違うんじゃないかと思うんですけど、意外と、同じような内容でやっている人たちっていうのが、まだまだあるんだなっていうことを知ってもらいたくて。比べてみたら、遠い世界でもこんな事やっているんだって、知ってもらいたくて。顔を隠して太鼓を叩いて踊ると、念仏踊りになるっていうような。

・なんとしてもやんねばなんね

「なんとしてもやんねばなんね」。もっと言うと、「なんじょしてもやんねばなんね」。どういう意味かというと、「何としてもやらなければならない」ということなんです。「なんじょしたってやんねばなんねんだから」って言いながら、家も何もないのに、自分たちで、どこかからお金を出して、助成金を取ったりしながら、こういう風に道具を揃えて行って、とにかく、2011年の3月にあったから、2011年の8月のお盆、うちの方は8月お盆ですから。8月のお盆には間に合わせるために、5ヶ月のうちに、皆さん何故か、お面を揃えてやる人たちが多かったんです。それはどういう風にやったのか。もちろん我々も手伝いましたよ。色んな所に「太鼓ないですか？」って、呼びかけたりとか。「誰か、木彫上手い人いませんか？お面作れる人いませんか？」「衣装余っているんだったらそれ出してください」。そして、「似たようなもの作れる、縫えるお母さんたちいませんか？」って。一生懸命声かけて、やったら意外とできたんですよ。だから、声かければやれる人はいるんだ、っていう話ですね。

で、とにかくやんなきゃなんない。そうしないと、亡くなった人たちは供養できないし。供養されない限りは、地面に、亡くなった人たちが留まってしまうので、それを早くに帰してあげて、もう1回ちゃんと、「異界と私たちがあとの生きていく世界を作ろうね」ってみんな言い始めるようになった。これは結構、精神的な世界というか、お化けの世界、神様の世界、見えない世界だから、ちょっと違って言うと、怪しいと言われるかもしれないですけど。でも、それでも何かしらを感じて、この震災が起こった人たちは、やっぱり思ったわけで。だから信じるかどうかはわかりませんが、そういうことも有り得るんだなあってことをよく感じるように、比較的、東日本の人たちはそういう風に思う人たちが多くなったなと感じます。

舞台をやっていたこととか、郷土から離して、良く見せようと思って、ステージでやることもあって。知ってもらうことも大事だと思いますけれども、(スライドを見せながら) こういう風に、舞台だけではなくて、外でやることとかね。豊年祭とかもそうですが、不特定多数の人たちが、誰でも見られる空間を作るといえるのもすごく大事なな、と思います。どうしても私たち、舞台を作る側としては、屋根が掛かっていて雨が降らなくて、風も入ってこない、いいところで、というのは当然あるんですけど。そういうところだけではなくて、こういう外で見ることによって、いろんなことを感じることもできるし、背景を「あ、これは木から生まれたものなんだな」とか、土の上でやることによって「土が一番合っている踊り方なんだな」っていうことを、より気づくことができるんだなと。舞台の板の間でやったりすることで、そういうところに繋がっているんだな、ということが分かったりします。

・保存か、活用か／継承か、創造か

継承していくこととか、保存していくということについて、今、保存だけではどうしてもやっていけないので、観光的に活用していきましょうとか、新しい何かを作っていきましょうとかっていう話は、すでに文化庁が言い始めているんですね。今まで、何百年何千年、守ってきたことは分かるんだけど、とにかく利用活用していかないと、これから外国人、オリンピックで来る人とか、旅行で来る人とかに、つまらない思いをさせてはいけないんじゃないかっていう勝手な意見で「利用活用した方がいいよ」って言う、偉い人たちがいるわけです。そのことも、「そういう風に利用活用する人たちがいるんだ」っていうことは皆さん念頭に入れておいて、それでも「うまく利用されないぞ」という思いも必要だな、と思っています。

旅行者が来て、今日のマチリとか、色々な所に来ることが多いと思うんですけど、そういうことに対して、一つはPRになると思うので、そういう側面は大事だと思うんですけど。そうじゃなくて、自分たちが守ってきたものをちゃんと伝えるためのことを、あえて新聞とかテレビに、自分たちから

突きつける、言ってあげるということも、大事じゃないかなと思うんですよね。向こうが流し続けるだけのことに加担し続けるというのは、あとが大変なことではないかと思しますので、せっかくステージに呼ばれたんだったら「私たちはこうしたいんです」って、言っちゃってもいいような時代になってきている。だからそこは少しずつ「自分たちはどういう歴史でやってきたんだろうか？」とか、「何のためにやっていたんだろうか？」っていうことを言えるような子供たちを作っていっていいなと、今、色々やっているといます。何でそう思ったかといえば、リオオリンピックの時に、この鬼剣舞を持って行ったんです、ブラジルに。なんでブラジルに連れて行ったかということ、この閉会式のちょっと前に、東北の郷土芸能というものを、結局、震災オリンピックでもありますから、ってことで、被災した人たちの復興を、なんとか世界に発信したい、という話があるオリンピックでした。東京オリンピックというのは、その元気な姿を見せるために、この人たちを連れて行って、リオデジャネイロで見せたわけなんですよ。

見せるのはいいですよ。見せるのはいいんですけど、私たちからすると、これは、一つは供養の踊りなんで。もう一つは福島の、じゃんがら念仏踊り、という踊りを連れて行ったんですが、それ供養の踊りなんです。だから見せるために持って行ったんだけど、「これは供養のための踊りなんだよ」っていうのを、どこまで言ったらいいのかな？って。言ったら言ったで、リオの人たち「ワー」って言うのに、ショボンとさせるのも可哀想だよ、と思うこともあるので。そういうことは、これからどんどん増えてくると思うんですけど、やっぱり悩みどころです。だけど彼らは、このリオのオリンピックのステージに出ることで、供養の踊りというのも分かってはいつ、格好いい姿を見せたいというのもあるって、二つの想いを持って行っているから、安心してステージに出せたんですよ。帰ってきて、供養の踊りをしていますから。だからあんまり、そこで流されることはしないというのは、良かったなって思います。

・「世界の芸能都市」岩手県北上市の取り組み例

せっかくなので、ちょっと学校などで参考に取上げてもらえそうな話をしますね。鬼剣舞というのはとっても有名で、北上市の人たちは、子供の頃からほとんどみんなやっています。七五三の時に写真館に行くと、みんな鬼剣舞の格好をして、写真を撮ってもらえるぐらい、鬼剣舞好きなんです。なので、あんまり後継者不足に、危惧はしていないんですけど、なんでこういう風になったかということ、夏のお祭りで観光の祭りをやっていて、120名ぐらいを、新幹線の北上駅の目の前の大きい通りで、120団体が1日中踊っているんですね。そういうのは60年ぐらいやっている。ここはもう「芸能の町なんです」っていうのを皆分かっているんで、だから剣舞やることも全然恥ずかしいことではない。路上で踊りをやることも、何の恥ずかしさもない。お祭りの時は学校も休みにして、お母さんたち仕事を休んで、ご飯を作りに来て。踊ったらその分、ご飯を食べさせてあげたり、中学生なんか、俺たちかっこいいことやっているんだと思ってる。年に何回かステージをやっていて、3,000円取っても1,200人のホールを満杯にするくらい、皆さん熱心ですから。おばあちゃんたちが、朝、2月のすごい寒い時期に、9時開演のホールなんですけど、7時ぐらいにもう行くんですよ。雪降がっているのにホールの外で待っているぐらい、好きな人種が住んでいる町なんです。それでずっと、「これはいいものなんだ」、「北上の町を代表するものなんだ」って言い続けてきたから、そういう風になっているわけなんです。漫画になったりするぐらい、人気ではあるんですけど。

それでも東北、田舎ですから、好きな人たちはいるんですけど、そこでずっと住み続けるかっていったらそうではない。それで子供たちはどんどん減るわけですから、それは日本全国どこでもそうですけど。「じゃあ、何やりましょうか？」って言ったときに、こういう十ヶ条みたいなものを、最近、北

上で作り始めました。(スライドを見せながら)「一番、発表会の機会を提供します」。まあ、「ホールを使用してくださいね」とか。あと「2番、子供の体験会を作ります。青年への働きかけです」とか、「情報発信をやります」、「記録保存をやります」とか。そういうことがあって、北上市としては、これからまだまだ人が減っていかないように、投げかけるような十ヶ条を作って、やろうとしています。

・東京鹿踊

それでもう一つ、私は東京にいるんですけど、田舎でやっている踊りを東京でやっていいです。ですから、こっちでいう郷友会の形ではないかもしれませんが、田舎になかなか帰れないんですね。お祭りの時は帰りますけど。そうじゃない時にも、練習しないと忘れますから、練習する機会を作ると。地元にいる人たちは当たり前のようにやっているの、外の人と言わなければ忘れる事って多いんです。例えば、草鞋を作ることであったり、(スライドを見せながら)これ、藁で作るヘルメットなんですけど、これを作れる人、もうほとんどいないんですよ。でも私たちが地元でいた時にやっていた踊りは、道具が当たり前にあったので、誰が作ったかも知らなかったですし、それは昔から、人から貰ってやっているんだな、と思っていたので、道具もちゃんと見たことがないんです。でも誰かが作っていた。それを外に出てから「ああ、そうだよな、今から東京でやろうとしていて、誰に聞けばいいんだろうか？」っていうところから「そうだ、あのおじいさんに聞かないとわからないよな」っていうことで。このバラの作り方とか、ヘルメットの作り方を教わりに行ったら、田舎の人たちは、当たり前だから「あ、そうか！あそこのおじいさんが作っていたのか！」って、初めて気付いて。「じゃあ一緒に習いに行きましょうか」って言って、習うようになったと。

だから道具を作る機会というのも、東京から見ようになつて、やっとならなうようになったので、やっぱり、ずっとここに住んでいると、わからないんですよ。忘れちゃう事ってあるんですよ。それをあえて外から、つついてあげるって事は、大事だなと思っています。

鹿子とは、皆さんが今日まで食べられなかったもの、四足動物のこです。皆さんの祈願と同じように、私たちの祖先は、動物に対する祈願をしていたんだらうな、と思います。そういうものを体にくっつけて。それで、肉食わせてもらったので、ありがとうございますということ、肉を捕ってしまったので、ごめんなさいということ。供養の思いというもの、二つくっつけたものを今でもやっている、ということですね。なので、鹿の踊りをやっていると、「シシ踊り」という。「シシ踊り」＝「肉踊り」だったんですね。恐らく縄文時代から肉を捕って食べていた人々と、旅から来た人々が、「いい太鼓を持っているね」、「いい衣装を持っているね」、などと言って、たぶん一緒に作ってきたものが伝統芸能なんじゃないかなと思いますね。

「私たちは300年やっています」って簡単に言うけれども、300年前にいきなりこういうものが、フツと生まれるということはないと思います。300年の間に、誰かと出会って、たまに来る人のいいところを真似して、創っていったのが踊りとか歌なんじゃないかな、と思っているので。誰かと出会ったことの象徴でもある、大事なものなんじゃないかなと思います。伝統的なものは確かに守らなきゃいけない。ちゃんと保存しないといけないんですけど、ただど一方では、誰かと新しい技術、例えばいい衣装、メリヤスとか、昔は麻じゃなきゃダメだったものも、もっと丈夫な素材が出てくれば、それを使ってしまうのも、全部がダメとは言えないですよ。長持ちするものを使うのは大事だけど、でも、かつて使っていたものもちゃんと頭に入れながら、どうやって使っていくか考えなきゃいけない。

私たちは手に手甲というものをつけますが、それは主におばあちゃんたちが作ります。おばあちゃんたちってお洒落なので、勝手にビーズとか入れるんです。私たちの知らないうちに。でもビーズが入っているのは当たり前だと思っていたから、着けていて。そうしたら他の団体さんから、「何でそんなビーズみたいなもの付けてるの？」って、言われることがあるんですよ。でもそれは、私たちがお願いし

ているお母さんたちの、美意識です。それは No とは言えないし、格好いいし。でも、ちゃんと色を、青とか赤とか黄色という、昔からの、色をちゃんと残して。お母さんたちが作ってくれるので、「それはそれでいいでしょう」と思いました。で、それを取って、「皆でおばあちゃんたちに習って作りましょう」ということを、私たち、企画してですね。誰がどういう風に乗っているのか、「一緒に行ってみましょう」ということを、教室でやったりとか。「衣装作りをやってみましょう」という会を、やったりとかしています。子供向けには、ゴヘイの意味を知りながら、作ってみるという会をやっています。

最後に一つだけ言いたいことは、さっき見てもらった鹿踊りは、私が小さい頃からやって、嫌いな人もいっぱいいたけれど、お年寄りに習って、「格好悪いな」と言う人もいたけれど、私は好きだった。ずっと好きで、踊り手になってから 30 年やってますけれども。好きだから、こうやって踊ったり、皆さんの前でお話する機会が作れるんですけども、そもそもこの鹿踊、みんなが格好いいって思ってくれるものでもあるんですが、震災のために気づいたこととしては、まず、こうやって供養するものだったことに、最近気づくようになってきて、「そこも大事にしないといけないですね」と思うようになりました。

この鹿踊りは、私たちの山奥に、伝わってくる 300 年 前までは、海の側にあった踊りだったんです。海の側にあった踊りだったんですが、300 年前に津波とかいっぱいあって、海のものは無くなってしまって、私たち山のところに、巻物が一部伝わっているんですけど、その巻物に、宮城県南三陸町という、津波の被害があったところから伝わりましたという巻物が、私たちの所にあったんですね。南三陸町の人たちが 30 年ぐらい前に、昔、300 年ぐらい前にそういう踊りがあったらしい、復活させたいと思った人たちがいたらしいんです。そうしたらうちの、一関の巻物に、南三陸町から伝わったと書いてあるものがあるっていうから、訪ねてきたことがあるんですよ。それで、「どうにかして教えてくれませんか？」っていうので、私たちが 300 年間伝えてきたものを、元々やっていた生徒さんたちにお返ししますよ、ということで、踊りを教え直したんですね。そして復活しました、30 年前に。で、道具も揃えて、全部やったんだけど、また 2011 年に全部流されたんですよ。流されたんですけど、生きていたし、道具は私たちから教え直したもので、こっちは教える人がいたし、そうやってもう一度作って、一緒に踊るように、今なっています。

それの面白いところが、石の供養碑という、石敢當のようなものが南三陸町に、300 年前に建てられたものがあったんですね。そこに何て書いてあったかという、(スライドを見せながら)「タテマツルイッサイ、ウイホウ」といいます。「オドリクヨウナリ」という石が、海端に立っていた。それがずっと土の中に眠っていたんですね。眠っていたのが見つかったから、復活したんですけど。この意味っていうのは、「奉ります」、「イッサイ」というのは、全部を。「ウイホウ」というのは、この世のもの全部を、踊りで供養をしますっていう意味の石なんです。だから、300 年前に踊りをやることで、人を供養したり、祈願したり、英語で言えばダンスですよ。ダンスを踊ることとか、歌を歌う、Sing することで、人を供養したり、祈願をするっていうことが、今、考えたら、バカみたいだねっていう人がいるかもしれないけど、300 年前の人たちはそういう風に思っていた。しかも、「この世のもの全部を、踊りで供養するぞ」と言った人がいるっていうことは、すごいことだねっていうことで、びっくりしました。こういうものが日本には、世界には、たくさんあったなっていうことを、私は鹿踊りを通して知ることができました。これは八重山とか、与那国のやっている、踊りとか芸能とか、祈願とか、マチリには、今もそういう要素が残っているので、できたら上手に、そこは残していったり、次の人たちに伝えていく気持ちを持っていってくれたら、私たちも嬉しいなと思います。今日は長い話になりましたが、そういうことをお伝えしたくて、お時間を頂きました。これで終わりにします。ありがとうございました。

3. 第2回芸能交換会

「民俗芸能の未来のために、今できること」報告

- (1) 日程：平成31年1月17日(木) 20:00～21:00(出演者会議)
1月18日(金) 19:00～21:00(スタッフ会議)
2月1日(金)(会場設営・リハーサル)
2日(土) 15:00～17:30(芸能交換会)
19:00～21:30(交流会)

- (2) 会場：与那国中学校体育館(芸能交換会)、D i D i 与那国交流館(楽屋)

- (3) 演目：<竹富公民館>

仲筋ぬ又ペーマ(仲筋支会)
竹富口説(西支会)
種子取節(東支会)
ンーブリキョンギン(芋掘狂言)(結願狂言部)
<与那国町自治公民館連絡協議会>
道唄(与那国町自治公民館連絡協議会)
旅果報節(西自治公民館)
ながく節(嶋仲自治公民館)
比川美童(比川自治公民館)
与那国ぬ猫小節(久部良自治公民館)
豊年歌劇(東自治公民館)
アサカッティ(東自治公民館狂言座)

- (4) 芸能交換会登壇者(演目出演者はVI.資料に記載)

司会：田原 伊明(与那国町社会教育委員)
開会挨拶：崎原 用能(一般社団法人与那国フォーラム理事)
与那国町自治公民館連絡協議会会長挨拶：嵩西 茂則(比川公民館館長)
与那国民俗芸能伝承保存会会長挨拶：崎原 孫吉
竹富公民館館長挨拶：上勢頭 篤
事業主旨説明：田里 鳴子(一般社団法人与那国フォーラム職員)
閉会挨拶：前本 隆一(竹富公民館顧問)
交流会開会挨拶：外間 守吉(与那国町長 一般社団法人与那国フォーラム代表理事)
交流会閉会挨拶：大山 榮一(竹富公民館顧問)
<演目紹介>
道唄：田原 伊明(司会)
仲筋ぬ又ペー：島仲 由美子(仲筋支会)
竹富口説：上勢頭 同子(西支会)

種子取節：新盛 桂子（東支会）
ンープリキョンギン：島仲 彌喜（結願狂言部）
アサカッティ：田原 伊明（司会）
旅果報節：崎原 弘子（西自治公民館）
ながく節：新里 恵美子（嶋仲自治公民館）
比川美童：嵩西 茂則（比川自治公民館館長）
猫小節：柿本 太蔵（久部良自治公民館）
豊年歌劇：前濱 郁子（東自治公民館）

(5) 参加人数：竹富公民館 42 名、与那国 5 公民館関係者 69 名、
スタッフ、関係者 22 名（与那国民俗芸能伝承保存会、司会、役場、観光協会、商工会、県文化振興会、
与那国フォーラム）
来客（芸能交換会のみ）約 150 名
合計：約 283 名

(6) 関係団体

支援団体：沖縄県、(公財) 沖縄県文化振興会
協力団体：竹富公民館、与那国町自治公民館連絡協議会、与那国民俗芸能伝承保存会、
与那国町商工会、与那国町観光協会
後援団体：与那国町、与那国町教育委員会、竹富町、竹富町教育委員会、石垣市、
石垣市教育委員会、八重山広域市町村圏事務組合、八重山毎日新聞、
八重山日報社、南山舎、日本トランスオーシャン航空（株）、
(株) 琉球エアークommューター

(7) 実施概要

本会は、平成 30 年度「与那国民俗芸能の継承に向けた調査、及び人材育成計画策定事業」（支援：
沖縄県、(公財) 沖縄県文化振興会「平成 30 年度沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業」）の一環
として、主に竹富公民館と、与那国の五公民館の舞踊関係者、狂言関係者による、実演を交えた、相
互の継承者育成に関する情報交換の機会を創出することを目的として実施した。特に、普段公に発言
する機会の多い有識者や師匠、館長などの代表者だけでなく、祭事の芸能に出演する若手世代の直接
交流による意見交換と相互の意識啓発の機会を作り、各集落の芸能の担い手に人材育成の必要性につ
いて普及啓発を図るとともに、参考事例（竹富公民館）を通じた創意工夫を促すことを目的とした。

実施にあたっては昨年度の実績をふまえ、竹富公民館、与那国の五公民館へ主催者・与那国フォー
ラムが業務委託をする形をとり、支援事業費から、竹富公民館へは出演報酬・旅費、与那国の五公民
館へは出演報酬をそれぞれ委託費として支払うこととした。

実施までの与那国フォーラム、竹富公民館、与那国の五公民館の舞踊・狂言関係者との話し合いの
中で、竹富公民館としては、祭事の芸能が狂言部（男性）と舞踊部（女性）によって構成されているた
め、舞踊だけの交流会だと片手落ちになってしまうという指摘があり、併せて、せっかくの機会なので、
与那国の狂言復活の契機となるよう、狂言の実演も盛り込んでどうか、という提案があった。そこで、
東狂言座の東大島侃氏、前黒島勇市氏と相談した結果、今回の東狂言座出演に至った。他に、打ち合
わせ段階（7月まで）での竹富側の大きな懸念として、種子取祭の芸能は、島外に出してはならない

という決まりがあることだった。今回の芸能交換会では、与那国フォーラムは奉納芸能の披露を希望し、判断は竹富側に委ねていたが、例外として与那国に種子取祭の芸能を持って行くか、別の芸能にするかは、公民館顧問の間でも意見が分かれているようであった。しかし、結局、狂言以外の演目は、全て種子取祭の奉納芸能が披露されることとなった。これは、竹富公民館が本会の趣旨に賛同したうえで、特例として演じたものと推定される。そのため、与那国、竹富、両島の芸能史の中でも、特筆に値する出来事であったのではないかと思われる（狂言については、結願祭の奉納芸能が披露された）。

久部良からの舞踊出演については、祖納と比川の舞踊師匠たちと相談する中で、当初は代表で道唄1名のみ、久部良から出演させるという提案があった。しかし、その後、久部良中学校で舞踊の指導にあたっている玉城好子氏、久部良公民館館長の柿本太蔵氏と相談したところ、せっかくの機会なので、久部良からも舞踊が出せるよう、出演者の募集をしてみる、との案が出た。特に館長としては、これまで豊年祭などの行事で行われていた祝賀会において島外の芸能人に出演をお願いする、また、旗頭の上げ下ろしにも他部落の棒座をお願いする、といった方法が、経済的にも人的にも公民館の負担となるので、公民館の中で活動費などを予算計上し、行事における舞踊の出演者を集落内から出せるよう、人材育成の機会を作りたいという希望があった。そのため、この機会に、舞踊の定期的な練習会を作るという目的で、久部良公民館による踊り手の募集が行われた。踊り手の中から、実質的に練習日程調整などの幹事役を、久部良の踊り手である前西原たかね氏が務めることになった。これは、師匠がいないために、幹事役を踊り手自らがやらなければならなかった、という事情によるものである。初めての経験のため、今回の練習、及び出演準備は久部良の踊り手にはかなりの負担になったと思われるが、それでも、平成30年度の、久部良のナーマ浜で開かれる八重山の海開きに出演を決めるなど、今回の芸能交換会を機会に、練習の継続に向けて前向きに動き始めたことは、本事業の波及効果として積極的に評価してよいと思われる。

地謡の人材育成という課題についても、嶋仲自治公民館では、少し明るい見通しが得られた。昨年度の芸能交換会に地謡として参加し、今年度事務局補助員を務めた慶田嵩正弘は、30代の頃には、既に棒座の師匠を経験し、過去に2回、嶋仲自治公民館の副館長も経験している。そのため、公民館や座の運営実態、後継者育成方法については、当フォーラムスタッフの中で最も組織を把握している人物として、芸能交換会の相談に乗って頂いていた。

また、そもそも、彼は青年会時代から三線を弾きこなしており、その実力は、師匠の砂川オトミ氏からも一目置かれ、かなり以前から、地謡の後継者の一人として練習に参加するよう、声をかけられていた。それでも、仕事の多忙さや、棒座の笛を担当している事情などから、舞踊の地謡は先延ばしにしていたところ、昨年度から当フォーラムの事業に参加し、竹富島の芸能を調査し、我々と議論をするうちに、自分もそろそろ継承者の責任を引き受けるべきだとして、今回の芸能交換会では、嶋仲の「ながく節」に地謡として参加したほか、来年度の豊年祭から、嶋仲の地謡に入ると公言し始めた。また、これとは別の動きとして、嶋仲踊座師匠の新里恵美子氏は、芸能交換会に関する当フォーラムとの打ち合わせの中で、将来は集落の中から地謡も出せるようにしていきたい、という考えを述べられていた。嶋仲集落も近い将来、集落の中から地謡を出せるようになるかもしれない。

交流会では、各公民館の舞踊、地謡のメンバーを中心に、様々な感想が聞かれた。彼らには、会場前方に設けられたステージ前に集落ごとに集合し、感想を述べて頂いた。概して、与那国側は、竹富の舞踊の技術力に驚き、また、中には、竹富の狂言を見て、父がかつて狂言の師匠であったという方から、与那国狂言の復活を強く訴える場面も見られた。竹富側は、与那国の踊りが持つ個性豊かさに感心し、また、種子取祭が御嶽の境内に作られた三方舞台から、御嶽のイビに向かって踊るのに対し、今回は体育館で一方舞台から、客席を向いて踊らなくてはならなかったため、普段とは環境が異なり、

「かなりの緊張を強いられた」との感想が散見された。与那国も豊年祭では、通常、御嶽の境内の三方舞台で踊るのが通例だが、そういう意味では、与那国の踊り手の方が、体育館という、いわゆる近代の劇場のような一方舞台での踊りや、舞台演出に慣れている、といえるかもしれない。というのも、与那国の演者の方からは、演出として、踊りが毎回終わるごとに緞帳を下ろした方が良いのではないか？という提案もなされていたからである。

また、竹富側の出演者からも、毎年、継承によって少しずつ舞踊の型や形が変わり、それによって、踊っていても昔と異なることを先輩たちに指摘されることもあるということや、集落の慕っていた先輩、お年寄りが大事にしていた芸能を、次の世代に引き継いでいくという気持ちが大切と思って、日々練習に励んでおられることなど、与那国と共通する課題に直面していることを吐露する発言も見られた。先輩たちから受け継いできたものを大切にしようとする気持ちが継承にとって大事だという語りは、これまでの事業で小岩秀太郎氏や、狩俣恵一氏の講演会でも繰り返し、指摘されてきたことでもある。

尚、竹富側の芸能を見ることができなかった、と与那国の踊り手から指摘を受けた、前回の芸能交換会での反省をふまえ、出演者が開会前に着付けをすませ、ステージ正面に設けられた専用席で鑑賞するという方法をとったことについては、竹富、与那国双方から評判が良かった。

今回の経費については、飲食費以外を主に県文化振興会の支援事業費(8割補助)、また、飲食費については、町のふるさと納税基金に対する補助金申請を行い、経費に充てることで、町の企画財政課長の承諾を得た。なぜふるさと納税基金かといえば、県文化振興会支援事業は来年度で終わるが、これまでの事業効果の観点から、他島との芸能交換会は支援事業終了後も定期的を実施することが、人材育成に効果的であるとの見通しを持っているためである。

そのため、支援事業終了後の芸能交換会の財源として、町のふるさと納税において、寄付金募集(ガバメント・クラウドファンディング)のメニューを提案することを目的として、今年度事業計画にクラウドファンディングに関する調査も盛り込んでいた。そのような経緯から、ふるさと納税基金利用の実績づくりと、町のふるさと納税PRに資するため、今回芸能交換会の経費の一部として申請することを考案した。尚、これについては、来年度事業において、さらなる財源確保の方法に関する調査・検討を重ねる予定である。

V. 平成31年度事業報告

平成30年度事業の結果、与那国では地謡や舞踊の師匠たちの間から、これまでの継承の在り方を見直し、他の集落や他島との情報交換の重要性を認識する声が多く聞かれるようになった。しかし、平成30年度の芸能交換会実施状況から、師匠と現役世代のコミュニケーションや問題意識の共有が、まだ必ずしも十分ではないのではないかと考えられた。その要因としては、主に継承組織における人手不足、特に準備や段取りなどを担うマネジメントに必要な人材の不足にあるのではないかと考えられた。そのため、今年度は集落の継承組織におけるマネジメント人材育成方法を検討するための調査も実施することとした。

さらに、昨年度の舞踊・地謡座談会の結果、現在行われていない狂言や組踊復活のために、シティブディを復活させる必要があることが明らかになったため、シティブディ復活に向けた準備も今年度作成する人材育成計画に盛り込み、それに向けた調査、及び協議も実施することとした。加えて、本事業目標の内、比較的遅れている郷友会とのネットワーク強化のため、郷友会と協力し、交流と教習を兼ねた企画として、与那国民俗芸能伝承保存会から在沖縄与那国郷友会の有志が舞踊の教習を受ける講習会、そして在沖縄与那国郷友会と、在石垣与那国郷友会に継承者育成状況についてのヒアリングを実施した。

以上の調査結果を受け、以下では(1)八重山調査報告、(2)シティブディ復活に向けた継承者育成に関するヒアリング報告、(3)郷友会へのヒアリング報告として、それぞれ報告する。

(1) 八重山調査報告

平成29年度に実施した八重山調査の追加調査として、波照間島のムシャーマ調査を実施した。今年度は特に、調査員である与那国の地謡の担い手が移住者であり、八重山古典の流派に所属していることから、八重山における流派を通じたつながりを活かし、波照間島でも移住者の視点や、島の地謡だけでなく、八重山古典の流派の継承など、多面的な聞き取りを行うことができた。

また昨年度の芸能交換会の成果をふまえ、引き続き、八重山の民俗芸能関係者のネットワーク化及びネットワーク強化をめざし、他島の祭事の芸能への調査として、昨年度の舞踊・地謡座談会に参加した小浜公民館の結願祭の舞踊練習、及び奉納芸能の本番に関する調査を実施した。今年度は特に、これまで調査や芸能交換会に参加していない高校生を調査員とし、八重山とのネットワーク化においても、今後、郷土学習をはじめとする学校と地域との連携を促すことを視野に入れた。

① 波照間島（ムシャーマ調査）



8月14日

- 7:20 安栄観光定期船にて、波照間島へ移動。
- 9:15 ムシャーマ行列開始。
- 10:14 ムシャーマ行列終了。引き続き、棒芸開始。
- 11:50 午前の芸能終了。
- 13:10 公民館にて、仲底克彦館長、地謡の本庄森氏、前石野明信氏とヒアリングについて打ち合せ。
- 13:30 舞台芸能開始。
- 15:55 舞台芸能終了。この時間をもって、安栄観光の港行きバスに搭乘。
- 16:10 安栄観光定期船にて、石垣へ移動。

<参加者>

小池 康仁（一般社団法人与那国フォーラム）

米澤 恒司（一般社団法人与那国フォーラム 事務局補助員）



8月30日（地謡ヒアリング）

- 15:00 安栄観光定期船にて、波照間島へ移動。
- 17:00 宿舎チェックイン。
- 17:30 地謡の本庄森氏と事前打ち合わせを実施。
- 19:00 本庄氏にヒアリング開始。
- 20:00 さらに5名の地謡関係者が合流。
- 22:00 終了。

<参加者>

佐事 清祥（地謡）

前石野 明信（地謡）

本庄 森（地謡）

小底 義雄（地謡）（副館長）

登野盛 龍（地謡）

桃盛 全助（太鼓）

小池 康仁（一般社団法人与那国フォーラム）

米澤 恒司（一般社団法人与那国フォーラム 事務局補助員）

本調査では、まず、8月14日に波照間島のムシャーマ祭祀の調査を実施し、途中で公民館長の仲底克彦氏と地謡の本庄森氏、前石野明信氏との打ち合せを行った。その際に本庄森氏にコーディネートをお願いし、8月30日に波照間島にて、島の地謡の皆さんに集まって頂き、島の芸能の継承状況について地謡の状況を中心にお話を伺った。本庄氏は関西から約20年前に波照間島へ移住し、現在、ムシャーマで地謡を務めておられる他、八重山古典音楽協会安室流保存会の支部長も務めておられた。今回の調査に与那国から同行した米澤恒司は、本庄氏と同一年で、偶然にも本庄氏と同じ年に与那国に移住しており、同じく八重山古典の研究所に所属しているため、石垣島で定期的に行われる八重山古典の発表会等で、本庄氏と面識があった。そのようなつながりから、今回の調査では本庄氏にコーディネートをお願いした。また、米澤氏自身も、これまでの自らの経験に照らし合わせ、本庄氏が何故波照間島で地謡を務めるようになったのか、そして、今の継承状況をどのように捉えているかについて、大きな関心を寄せていた。

8月30日夕方、島内で6名の地謡関係者の方が集まった。島内在住のムシャーマの地謡がほぼ全員集まったとのことである。また、ムシャーマ以外で地謡が顔をそろえることは、本庄氏によると、今回が、ほぼ初めてとのことであった。そのような事情があつてか、前半は与那国フォーラム側からの質問事項に基づく質疑応答であつたが、後半は、波照間島の地謡継承者育成のための、波照間の地謡の担い手同士の意見交換が主となった。

本庄氏が移住した約20年前は、島の地謡で指導される方が5名ほどおり、その下にお弟子さんなどがいて、地謡の担い手は多かったという。また、指導者たちは全員八重山古典の流派にも所属していた。しかし、指導者たちが既に亡くなってしまわれたため、今後の地謡の継承に不安を抱いている様子であった。ムシャーマのミルク行列については、地謡に郷友や旅行者なども参加できるため大人数となるが、午後に行われる舞台の奉納舞踊の地謡となると、今回集まった6名でほぼ全員のようであった。ある時期までは地謡の指導者がたくさんおられ、活気があつたにもかかわらず、世代交代を機に継承者が減り、今後の継承に不安を抱えてしまうという状況は、国の重要無形民俗文化財指定を受けた昭和60年頃にたくさんおられた師匠が高齢化し、あるいは亡くなられ、現在、地謡の担い手不足に陥っている与那国の状況と重なってみえた。

本庄氏自身は、1996年の8月に旅行で初めて波照間島を訪れた際、宿のおかみさんの勧めで、ムシャーマの地謡に参加させてもらったことが、波照間島に通うきっかけとなり、移住に至ったとのことである。そのように、旅人を受け入れる波照間の人々の懐の深さはもちろんだが、参加した人がその後何度も通い、移住を決意させるほどの魅力が、少なくともその当時のムシャーマにはあつたといえるのではないだろうか。本庄氏のご経験は、特に、地謡の魅力をいかに高めていくかという課題に直面している与那国においても、大変参考になるお話であると思われる。同行した米澤も、そのような経験に共感しているようであった。

当日に集まった波照間の地謡の担い手たちは、今回が実質的に初めての島の地謡同士の意見交換となったことから、亡くなられた地謡の先輩たちへの思いや、今後の保存会の在り方や、地謡の継承の在り方などについて活発な意見を交わしていた。そして、今回をきっかけとして、波照間の地謡だけでもう一度集まりを持つことが話し合われ、継承を考える良いきっかけとなつたと、むしろ波照間の

地謡から与那国フォーラム側へ感謝の言葉が述べられる場面もあった。特に八重山古典の流派に所属している米澤や本庄氏の場合、お互いに流派の中心である石垣島から離れた環境にあって、島の地謡の継承と並んで、どのように流派の曲も継承していくかという問題は、共有すべき大きな課題であるように思われた。次に、米澤恒司の報告を紹介する。

波照間島ムシャーマ・地謡の皆さんとの座談会

米澤 恒司

この度波照間島のムシャーマ調査、そして日を改めて波照間島で地謡を担う皆さんとの座談会を行いました。

他の離島の島行事の熱気はどのようなものだろうか。離島の地謡の人たちは普段、どのようにモチベーションを保っているのだろうか。内地出身の地謡の人は、どのような形で島行事にたずさわっているのだろうか。以上のようなことに特に興味を持っていました。

実際行って見まして、生の熱気を感じる事ができました。午前中のミチサネ（ミルク行列）、午後からの舞台で芸能も沢山の住民の方が出演されていて、たくさんの観客に見守られながら行われていました。地謡の方もムシャーマが、三線を弾くための一番のモチベーションになると言っていたように、やはり芸能というものは、大きな舞台があるということが、とても大切な事なんだと、改めて思いました。

波照間島の地謡の皆さんとの座談会では、僕と同じように、内地出身で八重山古典音楽を習われている本庄さんの協力で島のベテランから若手までの地謡の人に集ってもらい、とても良い雰囲気の中、座談会ができたと思います。今日、このような形で島の地謡が集まるのも初めてのよう話していました。やはり波照間島でも昔はたくさんの三線の弾き手がいたが、どんどん減少しているとのことでした。今も潜在的に三線を弾ける人は結構いるらしいので、一度、みんなで集まりを持ちたいという話も出ていました。

「三線を一応弾ける」のところから、もう一步踏み込んで勉強を続けていかないと、地謡をするには難しいと思います。いかにそういう決心をする人が出てくるかが大切な事だと思いました。

波照間のムシャーマ見学、そして波照間の地謡の人たちの熱い思いを感じる事が出来て、本当に良い刺激になりました。ありがとうございました。

②小浜島（結願祭調査）

10月26日（練習調査）

15：30 小浜公民館花城正美館長と打ち合せ

17：30 安栄観光定期船にて、小浜島へ移動。

19：00 公民館にて、ウヤンキ、役員に面会。事業主旨を説明。

ウヤンキに同行させて頂き、北集落狂言家、北集落舞踊家を調査。

終了後、南集落舞踊家に移動し、ミンドウナカス⁶で与那国出身の大石田鶴子氏の案内を受け、調査実施。

10月27日

8：00 花城正美公民館長と打ち合せ。

9：50 安栄観光定期船にて、石垣島へ移動。

11：30 空港にて、調査内容の振り返り。

⁶ 舞踊師匠をあがった、舞踊の役員。

<参加者>

田島 吟（県立南風原高等学校三年生）

前外間 清己（県立南風原高等学校二年生）

小池 康仁（一般社団法人与那国フォーラム）

宮城 朋世（一般社団法人与那国フォーラム 事務局補助員）



10月30日（祭事本番調査）

- 7:10 安栄観光定期船にて、小浜島へ移動。バスにて、公民館へ移動。
館長に挨拶。その後、館内事務所にて待機。
- 8:20 メーラク家（ミルクの面を保管している）に移動。メーラク行列（ザーマーリィ）の準備を調査。本来ならば嘉保根御嶽が会場となるが、昨夜からの雨天により、急遽会場を移したとのこと。香炉がナカスや司たちの手によって御嶽から公民館へ移された。
- 9:30 公民館へ移動。奉納芸能調査開始。北部落のメーラク行列、南部落のフクルクジュ行列のあとに、それぞれ棒と獅子舞が披露された。
- 11:00 会場設営。公民館役員やナカスによって、楽屋と舞台がつくられた。舞台はゴザ5枚ほどの広さであった。この間、祭事のウヤンキである入川勝夫氏より、結願祭資料の提供を受けた。設営後、舞台の奉納芸能開始。
- 16:40 調査終了。公民館長、副館長、南集落ブンドゥル家ミンドゥナカスの大石田鶴子氏、ウヤンキの入川勝夫、キヨ夫妻に挨拶。
- 16:50 バスにて小浜港へ移動。
- 17:15 安栄観光定期船にて、石垣島へ移動。



<参加者>

田島 吟（県立南風原高等学校三年生）
前外間 清己（県立南風原高等学校二年生）
小池 康仁（一般社団法人与那国フォーラム）

<報告>

前外間 清己（県立南風原高等学校二年生）

小浜島は、練習のときからちゃんと稽古着をつけて稽古をしていて、与那国と違うなと思いました。また、狂言の所では男の人たちだけがいて、お茶を出したりなど、全て男の人だけでやっていたのでびっくりしました。

豊年祭とか行事の練習になったときに、踊りは踊り地謡は地謡で別々で（与那国）はやるんですけど、小浜島でやっていたように、一緒にやってみたいなと思いました。また、（御嶽の森に入れて頂いたことで）自然を大切にしたい。

自分たちの祖父母、また、その前の世代から今、現在にまで伝統芸能が引き継がれてきて、自分たちも島の伝統芸能に関わることができて、また関わっていくうちに島の芸能が好きになって、凄いなあ、良くなって改めて思うことができました。

小浜島に行って与那国とは違った芸能を練習から本番まで見ることができてとても良い経験になりました。この経験を生かして与那国の伝統芸能を大切に継承していきたいです。

田島 吟（県立南風原高等学校三年生）

「一回目の小浜」

事前に小浜へ行った時は、結願祭の練習風景を見学し、結願祭本番の日には、朝早くから、船へ乗る（帰る）ギリギリまでと、充実した素晴らしい時間を過ごすことができました。

まず、練習風景を見学した時、一番最初に感じたことは、同じ離島でも、やっぱり与那国とは違うんだなと、面白い雰囲気を感じました。与那国と比べた時に一番大きく違うと思った点は、練習時の“服装”でした。小浜の方たちは、自分の着物を身に付け、クバオージを持ち、何か、昔のおじー、おばーを思い起こすような服装で練習をしていました。私が高校へ上がる前までの与那国の練習には、練習着（稽古着、もしくは着物）などを身に付けて練習するという事はなかったので、その光景が素晴らしく思い、感動しました（高校三年間のうちで、与那国も変わっているかもしれませんが・・・）。

ただ、服装が違うだけと思ったりもしますが、やっぱり見た目から、雰囲気から入っていくことが大事なのではないかと感じたりもしました。気持ち入れをしなくても、何か一つがそろふことで、身が締まるような気がします。また、小浜の方たちが身に付けていた、その着物は「昔、母が縫ってくれた芭蕉の着物」だと言っていて、家には必ずあると言っていました。そのことから、舞踊や、狂言など、そういうことだけを受け継いでいるのではなく、昔ながらの伝統織物など、違う視点からも、沢山の事を気づかぬうちに伝承しているのではないかと思います。

練習風景を見ていて、狂言でいえばセリフ、踊りでいえば手順など、自分のできる物じゃなくても、みんなが覚えていて、それを同い年同士、先輩から教えてもらいながらの練習だったり、お酒も飲みながらゆんたくしたりと、練習と休みのケジメをつけながらと、真剣に取り組む様子（与那国も一緒だと思います）を見ることができました。

また、他にも与那国との違いがあり、小浜は、一度島から出た高校性や大学生が何名か帰島してき

て行事に参加するということです。与那国の豊年祭は、夏休みになることが多いので夏に帰省し、参加するということは可能でも、普段の土、日などに来る行事には参加ができないということがあります。気軽に島へ帰ることが難しく、島の行事に沢山参加したくてもできないというのは、自分たちにとっても、島にとっても、さみしい事だなと感じました。そういう点では、小浜に対して(?)羨ましいな、と思いました。

「結願祭・本番の日」

本番の日はあいにくの雨で、御嶽で見学することはできず、少し残念でした。でも、あれだけの演目を切れ間なくずっと見ることができ、とても良かったと思います。踊る曲も与那国と全く違い、色々な面白い狂言など、一味違う雰囲気を感じられ、とても楽しむことができました。私自身、与那国に住んでいて与那国の狂言を見たことがほんの数回しかなく、小浜で見学している時、もっと沢山、与那国にもあるんだろうなと思いました。

今回、初めての経験をさせて頂き、沢山の事を感じる事が出来ました。同じ離島でも違いがあり、またそれぞれの良い所があったりと、色々な面から見学をする事ができ、とても良かったと思います。

まだ、この年で与那国島を活性化させることは難しいことだと思います。今の私にできることは、故郷のことを忘れず、島へ帰り、島の方たちと一緒に芸能をすることだと思っています。少しでも島のことを考えることが、何かにつながるのではないかなと感じます。

今は何もできなくても、将来、大人たちが残してくれたものを受け継げるよう、今を頑張っていきたいと思います。

宮城 朋世（事務局補助員・久手堅一子琉舞研究所生徒）

今回の訪問は、高校進学に伴って与那国島を離れた高校生二人が調査の一環で参加しました。参加者の二人は長時間の日程でしたが疲れを見せることなく、小浜島の方々が芸能に携る姿を終始真剣な眼差しで見学していました。普段は琉球芸能を中心に取り組んでいるお二人ですが、「与那国、小浜、琉舞、それぞれの違いを見ることができて楽しい」という話をしていました。

この話ぶりから、お二人には島々の芸能の違いを楽しめる素地を持っているということが伺えます。お二人が子どもの頃から、島の芸能、島の祭事に関わってきた経験がそうした素地を育ててきたと言えると思います。またお二人は、「(与那国に)帰れるときは帰りたいし、手伝えるときはできるだけ手伝いたい」「役割という意識より、参加する楽しさの方が大きい」と与那国やその行事に対する思いを振り返っていました。

今回参加した高校生お二人の中には、小浜島の人たちが結願祭にかける思いと同じように、島を思い、そしてそれを楽しいと実感することのできる心が育まれています。確かに、小浜島の取り組みは継承の体勢が与那国とは違い結束力が強い印象を受けました。実際に、与那国島の芸能に関する体勢は生活スタイルの変化や人口の関係で形を変えてきていると感じます。しかし、その体勢の違いは人々の思いそのものを反映しているとは言い切れません。高校生二人の話からは、島の人間として、「思い」の継承はそれぞれの島において絶えず繋がってきていると感じました。形に見えるものからアプローチするという方法もありますが、この若い世代の子たちが言葉にすることで見えてくるものもあるのではないかと感じました。

高校生や若い島出身の人たちが今心の中で何を感じているのか、若者の目を通すと島の芸能の今、そして未来像はどのように映っているのかという点を、今一度丁寧に聞いていく必要があるのではないのでしょうか。彼女たちには決して、小浜島と比べて自分たちができていないという感覚はありません。

やり方の違いがあり、その違いを知れば与那国でも試してみることはできるのかもしれない、というようにとても柔軟性のある考え方です。

今まで、かつてを知っていた世代の方の話を聞く中ではこうした発想はあまりなかったと思います。あと10年もしたらこの世代の子たちが中心になって活動していくことでしょう。その想定をし、若い世代がどのような気持ちでいるのか、またどのような未来像を持ち、島の芸能や島の祭りに関わっていくことができると考えているのか、幅広く意見を取り入れ、今後の与那国の芸能継承に役立てていくべきだと感じました。

(2) シティブディ復活に向けた継承者育成に関するヒアリング報告

シティブディで演じられる組踊も、舞踊や棒踊などと同様、公民館に属する座によって継承が成されてきた。そのうえ、公民館ごとに異なる演目が1点ずつ演じられていた。こうした背景から、組踊への出演経験者に対して、今後どうすれば組踊復活につながられるのか、ヒアリング、及び復活に向けての取り組みを話し合う協議を実施した。また、組踊復活には、踊り手の養成に加え、地謡の養成が不可欠だが、組踊の地謡の曲目を弾きこなせる琉球古典の演奏者は、現状では与那国には、師匠も含めて不在である。そのため、主に与那国民俗芸能伝承保存会を中心として、地謡指導者に集まって頂き、琉球古典も含めて習得する継承者を、どのように育成していくかについてヒアリングを実施した。そのうえで、各公民館の組座の師匠を中心に、立ち方経験者の方にお集まり頂き、地謡と同様、立ち方の継承者育成方法についてヒアリングを実施した。

さらに、かつてシティブディにおいて披露されていた狂言も、現在、座としての定期的な練習の機会はなく、実演者は前年度の芸能交換会で狂言を披露した60代より若い世代はいない状況である。この狂言についても、芸能交換会に出演した東狂言座、そして西狂言座で出演した経験者にお集まり頂き、今後の後継者育成の方法についてのヒアリングを実施した。

①組踊地謡継承者育成会議報告

・日時：令和元年8月23日 会場：DiDi 与那国交流館

・出席者（敬称略）

崎原 孫吉（与那国民俗芸能伝承保存会会長）

田頭 政英（与那国民俗芸能伝承保存会副会長）

玉城 孝（八重山古典音楽安室流協和会師範）

砂川 オトミ（八重山古典音楽安室流協和会師範）

祖納元 健司（組踊地謡経験者）

小池 康仁（一般社団法人与那国フォーラム）

米澤 恒司（一般社団法人与那国フォーラム 事務局補助員）

久手堅 一子（在沖縄与那国郷友会会員 オブザーバー）

新川 千枝子（在沖縄与那国郷友会会員 オブザーバー）

昨年度の事業成果に基づき、シティブディを復活させるためには組踊を復活させなくてはならないため、組踊において最も育成に時間がかかるといわれる地謡の育成方法について、組踊や舞踊の地謡経験者からの意見を伺うため、組踊地謡継承者育成会議を実施した。与那国フォーラムよりお伺いし

た質問は、概ね以下のようなものである。

- (1) 継承者育成（教習）の主催者について
- (2) 継承者育成（教習）の方法について
- (3) 継承者育成（教習）の場所について
- (4) 講師の選定について

会議を始めて、最初に聞かれた主な意見は、組踊の地謡を育成することの難しさであった。与那国の組踊で地謡を務められるようになるには、野村流の最高賞が取れるくらいの技量をもたなくてはならない、そのためには既に与那国で地謡の経験がある人でも、最低三年はかかる、という意見もあった。またそこまで習い、取り組めるほどの人が若い人の中からは見つからないのではないか？とう悲観的な見通しが多く聞かれた。

そして、研究所の先生を務めておられる出席者からは、まず、講師に野村流の師範をお招きし、基礎から養成して行って、それから立ち方の養成をするべきだ、という、地謡の育成をまず優先すべきである、という意見が述べられた。これに対し、かつて組踊の地謡を務められた出席者からは、まず、各部落の師匠が各演目の台本や工工四、映像などの資料を持っているため、各公民館と師匠に協力を仰いでそれらを持ち寄り、検討した上で、どの演目をやるか決め、その演目の曲から練習していくべきだ、という意見がでた。また、そこからさらに突き詰めて、まず流派のツテを頼って、石垣から野村流の地謡の師範を与那国に連れてくる案、それに対して、演目を決めたと、その演目の地謡経験のある講師を、郷友会や研究者などのツテを頼って沖縄本島から連れてくる案などが出された。しかし、どちらの案も、月1回程度、講師に与那国に来ていただき、与那国で講習会を開く、という点では一致していた。さらに、習うだけでなく、年に1回は何らかの形で発表する機会を持たなければ、モチベーションも続かないこと、そのため、教えに来る講師には、最初のうちは本番も一緒に演奏してもらうようにすべきだ、といった意見もみられた。また、地謡の養成がうまくいき、組踊を立ち方と稽古して復活させる見通しがつくとしても、各公民館で出演者を集めても足りないの、どこかの公民館を皮切りに、一部落ずつ、順番に復活させていくべきである、という意見もみられた。

続いて、どこが主催して講習会を開くかという点について意見を伺ったところ、与那国フォーラムが主催し、DiDiで講習会を実施するべきだ、といった意見もみられたものの、全体的には、公民館が主体となって進めていくという意見が多かった。ちなみに、与那国フォーラムによる講習会場としてDiDiの提供は可能だと思われるが、社内に芸能の専門家がいるわけでもないの、必ず座や保存会等の団体と協力しなければ、単独で主催することは無理であることを小池から伝えた。これらの意見に対して、与那国民俗芸能伝承保存会からは、会の方針として、与那国の曲を継承することを目的としているため、島外の流派の継承を目的とした講習を主催することは難しい、との意見があった。その時点で、概ね、組踊の地謡は、舞踊のように与那国民俗芸能伝承保存会や研究所ではなく、公民館の組踊座を中心として、今後育成していくべきである、という意見が出席者の共通認識になったと思われる。

整理すると、まずは組踊の師匠を交え、各組踊座の師匠や教育委員会が持っている資料を閲覧し、どの演目を復活させるか検討したうえで、公民館と相談し、その公民館の座の協力の下、島中から人を集め、講習会を開くこと、講習会には、月1回程度、島外からその演目の経験のある方を講師として招き、講習会を開いていくことが、大まかな道筋として見えてきた。

②組踊立方継承者育成会議報告

・開催日：2019年9月22日 会場：DiDi 与那国交流館

・出席者（敬称略）

松田 晃源（東組踊座 師匠）

糸数 永久（東組踊座）

崎原 正吉（西組踊座 師匠）

東小浜 功尚（西組踊座）

田島 寛二（嶋仲組踊座）

米浜 玉江（組踊立方経験者）

小池 康仁（一般社団法人与那国フォーラム）

米澤 恒司（一般社団法人与那国フォーラム 事務局補助員）

久手堅 一子（在沖縄与那国郷友会会員 オブザーバー）

新川 千枝子（在沖縄与那国郷友会会員 オブザーバー）

前回の組踊地謡育成会議をふまえ、組踊立方育成会議を実施した。前回と同様に、組踊の立ち方を育成するためには、どのような方法をとれば良いか、各集落から組踊の師匠を中心に、立方の経験者に集まって頂いた。

比川集落の師匠だけは日程の都合が合わず、後日、比川マチリの準備日（2019年11月21日）に、公民館長も交えてお話を伺った。その場で、さらに多くの比川の先輩たちからお話を伺った方が良いということになり、次年度の比川自治公民館総会の席にて、改めてお話を伺うことになった。

この組踊立方継承者育成会議（9月22日）、及び比川での聞き取り（11月21日）での主な質問項目は、以下の通りである。

・質問項目

- （1）継承者育成（教習）の主催者について（立ち方・地謡含む）
- （2）継承者育成（教習）の方法について
- （3）継承者育成（教習）の場所について
- （4）講師の選定について
- （5）育成期間について（立方・地謡）
- （6）育成における郷友会会員の協力について

まず、師匠たちからの意見としては、シティブディを復活させる場合は、5公民館の館長が集まって話し合いを持ち、一緒にやると決めなくてはできない、というものであった。これは、各公民館がお互いに演目を出し合って競うスブグトゥ（勝負事）の伝統があるため、どこかの公民館だけでシティブディをやるということになると、やらない公民館の館長は、館民から非難されることになるから、ということであった。そうすると、恐らく祖納豊年祭で綱引きをする年は、忙しくてできないから、その翌年になるだろう、とのことである。もう一つの提案として、組踊を継承のために映像に記録して残すということであれば、DiDiが主催して公民館に呼びかけ、毎年、東、西、嶋仲、などと1公民館ずつ持ち回りで発表会をするというものであった。

これに対しては、小池より、DiDiは協力（共催など）をすることは可能だが、主催者になることは芸能の継承組織ではないため、できないと回答した。しかし、今までの事例で考えると、組踊は大人

数が必要なため、公民館が主催するか、もしくは町、あるいは小学校の100周年記念など、記念行事の際に町もしくは小学校などが実行委員会を組んで、人を集めないことには出すことはできない、ということであった。

そこで、理想としては、例えば東が組踊を出すならば、西は踊り、嶋仲は棒、などのように、各公民館が演目を持ち寄って出演するならば、シティブディを開催して、必ずしも全ての公民館が組踊を出さなくても、各公民館長も納得するのではないか、ということであった。つまり、かつては一つの公民館が、組踊、舞踊、棒と全ての演目を出していたので、三日間かかったということであるが、現在は人が少ないので、組踊を出す一つの公民館で他の演目まで出す余裕はないだろう、という意見である。例えば、組踊1点だけでも1時間半～2時間半程度はかかるので、それに舞踊と棒を3点ずつ出したとしたら、4時間はかかることになる。また、かつても、組踊の配役の人が棒や舞踊など、他の演目と兼任した例もあるということだった。そうすると、確かに演者の負担も大きくなる。そのため、概ね、各公民館が必要な演目を持ち寄り、組踊は各公民館が毎年持ち回りで出演するのが理想、ということで意見がほぼまとまった。また、もし各館が持ち回りにするのであれば、例えば祖納の公民館だけ参加しても最低3年連続してやらなくてはならないが、出演者も、公民館長の判断次第で、その集落の出身者で他の集落に移住した人を呼び寄せる、あるいは、島中から出演者を募る、といったことも可能になるだろう、との意見があった。

次に話が出たのが、地謡継承者育成会議のときと同様に、地謡の育成に時間がかかるということであった。町内では、組踊に必要な野村流の古典音楽を弾きこなせる地謡はいないため、いっそのこと、沖縄本島の在沖縄与那国郷友芸能愛好会に、沖縄本島での育成をお願いした方が良いのではないか、という意見も出た。その場合、組踊の地謡は町内では育成せずに、組踊上演のたびに、常に郷友会から演奏に来てもらう、ということになる。その方が、郷友会との絆も深まる、というものである。これに対しては、来てもらうのはいいが、やはり町内で地謡を育てないと根付かない、という意見が出た。結局、地謡も立方に合わせてセリフの直後に音を出すなど、場面に合わせた技術が必要になるため、合同で練習する期間が必要になるからである。その意味では、郷友会から地謡が応援に来たとしても、合わせるのに最低1週間、理想としては、1年くらい練習期間をとり、その中で月1回でも合わせに来てくれるのが良いとのことであった。前回の地謡継承者育成会議では、地謡の養成には最低3年かかるということだったが、立方の場合、まずセリフを覚えるのに1か月、立ち居振る舞いに1か月、全体練習に1か月かかるということなので、最低3か月は練習期間が必要とのことである。しかし、次回は復活ということになるので、立方も最低1事業年度の期間で育成を考えた方がよいとのことであった。組踊の地謡となると、最低3名はいないと迫力がなく、本当なら4、5名は必要、ということである。

そのため、立方は島内で揃え、地謡は郷友会から野村流の指導者が練習指導、そして、島内で地謡が育つまでは一緒に演奏するサポートに来ることが理想的である、との意見でまとまった。また、野村流の人財育成としては、沖縄本島などに進学した子供が、野村流の指導を受けて、組踊の地謡を身に付けてくれたらいい、という意見もあった。比較的短期間で育成するには、そのような案も有効かと思われる。

復活に向けた話の順番としては、まず、公民館長で話し合ってもらって、もしシティブディを復活させようということでもとまれば、どの公民館が組踊を出すか、毎年の持ち回りを決めてもらう。そのうえで、組踊を出すことになった公民館が組座の師匠と相談し、どの演目を出すか決めて、その演目に必要な地謡の曲、立方を集中して練習していくこと、その練習には、郷友会を通じて野村流の指導者に与那国に月1回くらい来て頂いて指導してもらおうと共に、本番でも一緒に演奏してもらう、という

のが理想であること、地謡の育成に最低2～3年、また立方の育成も1年程度かかるため、少なくとも、2年以上の時間をかけて復活の準備をしていかななくてはならないだろう、ということが共通認識となった。また、嶋仲のように、経験者がほとんどいなくなってしまった集落については、復活させるとしたら、映像や台本などの資料を掘り起していく必要があるため、これまで与那国の組踊を研究してきた研究者などにも資料提供などの協力を呼びかけた方が良いということである。

尚、シティブディが復活した際の会場については、これまでは大人数の入る学校の体育館や比川総合センターなどが使われてきたが、大昔は野外で、個人宅の庭などで開催されていたので、復活させるならばそのような雰囲気も含めて復活させたい、特に、体育館のステージは高いので、もっと低いステージがいい、という意見も出た。そのような意味では、せいぜい200名ほど観客が入れば会場として十分なので、DiDiも雰囲気があって良い、という意見があった。その一方で、DiDiの舞台は畳のため、組踊の立ち居振る舞いには板敷きのステージでなければならない、という課題も指摘された。

③狂言継承者育成会議報告

・開催日：2020年1月7日 会場：DiDi 与那国交流館

・出席者（敬称略）

請舩 庄市（東狂言座）

前黒島 勇市（東狂言座）

東小浜 功尚（西狂言座）

小池 康仁（一般社団法人与那国フォーラム）

狂言についての継承者育成方法について継承者からヒアリングを行う会議を開催した。東狂言座にいる2名と、西集落で狂言を経験された1名にご参加頂いた。質問は以下の通りである。

・質問項目

- (1) 継承者育成（教習）の主催者について
- (2) 育成候補者
- (3) 継承者育成（教習）の体制について
- (4) 継承者育成（教習）の場所について
- (5) 育成期間について

この会議では、組踊とは対称的に、島中から1カ所に人を集めて、後継者育成をした方が良いということが、全員からの意見であった。というのは、現在、東の狂言座しか残っておらず、師匠もいないので、狂言座そのものが消えかかっている状況であり、他の公民館も、狂言座が無くなっているため、部落ごとの育成が難しくなっているという。逆に、例えば、公民館長たちと相談し、了解を得たうえで、狂言愛好会のような組織を立ち上げ、島中の狂言を映像や台本などの資料を掘り起こしながら練習していった方が良いという。その中で、部落にこだわらず、他部落のものも練習して、もし人が足りない場合は他部落でも応援に行けるようにした方が良いとのことであった。逆に、シティブディなどで出演の機会があった場合は、館長が愛好会に依頼し、愛好会の中で相談したうえで、その演目をできる人を出せばよい、という提案もあった。

また、今回の会議出席者には郷土学習で教えた経験のある方もいるため、後継者育成のためには学校とも相談し、郷土学習にも取り入れてもらい、学習発表会を目標に練習させた方が良いという提案があった。それと並行して、月に最低2回、夜の時間帯に2～3時間程度、子供から大人まで、集まる機会を設けて、

島中から希望者を募り、子供にはお菓子なども出しながら、参加者で方言の練習から始めた方が良く、とのことである。本当は週1回やりたいところだが、そこは状況をみながら、方言を忘れないように最低月に2回として、もし学校が郷土学習に取り入れてくれれば、そこも連携するのが良いのではないかと、いう。これを事業化するのであれば、1年では教えてもすぐに消えてしまうので、最低2年は続けた方が良く、とのことである。尚、指導するのは経験者になるが、島外の郷友にはそうした方が思い当たらないため、方言の練習も考えると、島の中の経験者がお互いの部落の狂言も勉強しながら、補い合っただけが良いだろう、とのことである。並行して、映像資料や台本などの資料の掘り起こしを進め、勉強していく。台本の残っていないものは、映像資料などを頼りにして、台本を書き起こすところから始めなくてはならないという。また、地謡の入る演目もあるので、地謡の育成をするならば、一緒に練習できる機会も作るべきだ、とのことであった。練習会場は、集まりやすいように、公民館やDiDiが良いとの意見があった。

発表の機会としては、シティブディはもちろん良い機会だが、前回の組踊継承者育成会議の出席者とは逆に、毎年シティブディをするには、今は移住者が多く、他部落との勝負事にしようにも、そこまで愛着もないはずだから、現状では難しいのではないかと、という意見が多かった。そのため、むしろ、シティブディ開催は4～5年に1回ぐらいにして、成果発表会という形で毎年やってはどうか、という提案もあった。その成果発表に、郷土学習の学習発表も連携できれば、より理想的だという。

(3) 郷友会ヒアリング報告

今年度は、在沖縄与那国郷友会から、昨年度事業に協力して頂いた久手堅一子氏等とのご相談により、在沖縄与那国郷友会より与那国に久手堅一子、新川千枝子を中心に、郷友会で芸能継承に関わっている方を派遣してもらい、与那国民俗芸能伝承保存会より与那国の舞踊を教習して頂く講習会を実施した。そのねらいは、それまで郷友会でも継承が途切れかかっていた舞踊を島と共有することで、郷友会においても今後、定期的な練習会を実施し、郷友会における舞踊の継承者を増やすことである。特に進学のため、与那国から沖縄本島に移住した高校生などを練習会に呼び込み、一緒に練習することで与那国の芸能に親しむ機会を作り、近い将来、豊年祭などの行事に出演するために島に戻りたいと思う若者を増やすことに貢献することにある。

このような企画を実施すると同時に、教習を行う与那国民俗芸能伝承保存会からも郷友会の継承状況に関する関心の声を受け、在沖縄与那国芸能愛好会、在石垣与那国郷友会に対して、郷友会での継承状況についてお話を伺うヒアリングを実施した。

①在沖縄与那国郷友芸能愛好会

・開催日：2019年9月8日 17:00～19:00

会場：那覇市 タイムスビル 1F 喫茶店



<参加者>

新崎 長吉（会長）
真地 利尚（副会長）
松田 尚（幹事長）
富川 泰幸（副幹事長）
田頭 政英（与那国民俗芸能伝承保存会副会長）
久出堅 一子（事務局補助員 オブザーバー）
宮城 朋世（事務局補助員 オブザーバー）
小池 康仁（一般社団法人与那国フォーラム）

「情報共有、そのための交流と予算」

在沖縄与那国郷友芸能愛好会（以下、愛好会）は、1981年頃に発足した。初代会長は富村用一氏。在沖の登野城や小浜の郷友会と合同での、郷友会による琉球新報での芸能発表会がきっかけであったという。その後、郷友会の40周年記念祝賀会の頃まで、舞踊と地謡が合同で、首里公民館にて稽古をしていた。初期に舞踊指導にあっていたのは、主に富里康子さんを中心としたメンバーであったという。当初は舞踊を含めて40数名の会員がおり、週1回の稽古であった。しかし、指導者の不足によって10年ほど前から月1回の稽古になっているという。また、会員も減り、15年ほど前から舞踊の参加者がいなくなり、以後は地謡のみの稽古となっている。愛好会の現状と、継承者育成の課題についてお話を伺った。

現在は、唄三線と笛、琴の演奏ができる会員数名が、毎月第三木曜日、夜8時頃から2時間程度、浦添グリーンハイツ公民館にて練習をしている。与那国民謡工工四を使用して、掲載されている与那国の曲を、1回に10～15曲くらいまで練習しているという。愛好会独自でかつて地謡のテープを作成したが、保存のために、13年ほど前にそれをCD化し、愛好会の名義で発売した。これは、主に郷友会会員に販売したほか、与那国の教育委員会や、漁協にも寄贈したという。また、以前は発表会もしていたが、現在は郷友会総会での出演が主な披露の機会になっている。衣装道具は各自で保管しており、また地域の公民館を借りていることから、郷友会で独自の集会場があれば、もっと練習もしやすくなるだろう、という意見も聞かれた。現在、総会の1ヶ月前から、舞踊は久手堅一子氏の琉舞道場に集まって週2回のペースで稽古を始めるため、その間に舞踊と調整しながら、道場や公民館などで2、3回合わせて、出演に臨むという。

愛好会の予算としては、年間一人200円を会費として集め、練習場所となる公民館の借料に充てているという。また、総会などで出演した際には、一人2,000円程度の謝金がでるため、その中から衣装のクリーニング代等に残しておく程度、とのことであった。郷友会も会員からの年会費は徴収しておらず、予算は成年合同祝賀会の会費のほかは、運動会等の行事における会員からの寄付金によって賅っているとのことであった。愛好会、郷友会とも、年間予算は厳しい中でやりくりしているという印象を受けた。また、12、3年前までは郷友会に町から補助金も支出されていたが、町財政が厳しくなり、郷友会側から辞退したという経緯も伺った。

世代的には、愛好会メンバーは60代以上となっており、若い人にも声かけをするものの、なかなか続かないという。小池より、与那国の中学校の郷土学習の中で、舞踊や地謡の教習は25年以上続けられ、卒業生には近年沖縄本島に進学する子供も多いが、そうした子供たちは参加してこないのか、状況を伺ったところ、子供の親戚などが知人にいれば情報が入るものの、ツテがなければわからないということであった。人材についての与那国との情報共有に課題があるように思われた。そこで、愛

好会としても、与那国と交流できるような事業をすれば、状況も良くなるのではないか、という意見があった。ただし、進学してきた子供を育成するという点については、与那国と違い、それぞれ居住している住所が広い地域に渡っているため、練習場所に集まるためにも移動に時間がかかること、特に女子の場合、夜になると一人で帰せないで、自宅まで送らなければならない場合があり、また、寮生の場合には門限もあるため、平日の夜の稽古は難しいという指摘があった。そうすると日中では、土日や公休日にしか練習ができなくなるので、月1回の練習をしている現状では、子供を加えた場合、練習日時の調整にも課題があると思われた。

また、現状で継承者を増やすために、与那国との情報共有の他に、どのようなことが必要か訪ねたところ、やはり発表の場、そして、発表会や与那国と交流するなどの事業をするための予算であるという意見が多かった。特に、与那国へ行くには東京よりも航空運賃が高い、といった切実な意見も聞かれた。

小池より、仮に与那国で組踊を復活させようと考えた場合、地謡について指導や協力は可能か、という質問をしたところ、会員の中に野村流の研究所に所属している方がいらっしゃり、かつて与那国の組踊にも応援で出演したことがあるとのことだった。そこで、与那国の組踊の経験者などと協力し、映像や工工四などの残っている資料を使いながら、練習して地謡を務めたり、指導する、あるいは所属の流派から指導者を探すことも可能、とのことであった。また、野村流に限らず、琉球民謡協会や八重山古典の流派に所属している会員もいらっしゃった。総じて、ほとんどの方は個人で流派に所属しているものの、会では与那国の地謡のみを練習しており、そのような人たちが10名近くまだ練習を続けているという点では、主に、八重山古典の研究所の先生お二人が与那国の唄三線の指導をされている与那国の現状に比べれば、指導者人口は愛好会の方が多いのではないかという印象を受けた。

棒踊の現状についても伺ったところ、かつてカンチャテ会という組織が活動していたものの、会員数の不足により10年ほど前に解散し、道具は与那国中学校に寄付したという。そのため、近年与那国から出てきた20代を中心とする若者たちが青年会を組織し、与那国で身につけた棒踊を維持しているという状況であった。

今後、かつて与那国で指導を受けた琉大の八重山芸能研究会OB・OGや、研究者の力もお借りして、資料の掘り起こしもしながら、与那国と交流する機会を持ちたいとの抱負を伺うことが出来た。

②在石垣与那国郷友会

日時：2019年12月8日 14:00～17:00

会場：石垣市内

<参加者>

小池 康仁（一般社団法人与那国フォーラム）

田頭 政英（与那国民俗芸能伝承保存会副会長）

12月8日正午より、石垣市内にて在沖繩石垣郷友会に出席し、芸能の継承状況について、ヒアリングを行った。本調査では、小池の他、与那国民俗芸能伝承保存会副会長の田頭政英氏が同行した。田頭氏の報告は後段にゆずるとして、小池は主に会長の川満祐次氏、役員で、総会などで舞踊の出演をしている砂川なおみ氏の二人から、郷友会の芸能に関する状況を伺った。そこで聞かれたのは、近年、総会などに出席する会員数が減っており、人口的には2,000人以上の出身者とその家族が石垣島に居住しているものの、このままでは郷友会の存続が危ういという危機感であった。

芸能は、主に毎年9～10月に行われる敬老会で披露されるということだが、八重山舞踊が主となっており、与那国の舞踊はほぼ出していないとのことである。しかし、地謡としては、与那国の曲を弾

ける先輩が数名おり、現在も活躍しているが、全員 50 代以上で、若者の後継者はまだ育っていないように感じられた。

砂川氏も、与那国にいた頃に与那国の舞踊を身につけてはいるものの、与那国の舞踊は二人以上で踊る演目が多いため、一緒に踊る人がいないとのことであった。逆に、砂川氏には、与那国フォーラムの事業で在沖縄与那国郷友会から、久出堅一子氏や、新川千枝子氏が与那国に舞踊を習いに来ていることが耳に入っており、こういう方法もあったのか、と感心されたとのことだった。

そこで、小池より、川満会長と砂川氏に、もし来年度以降、在沖縄与那国郷友会と同様に、与那国フォーラムから在石垣与那国郷友会へ依頼し、砂川氏のような舞踊に関心のある人を、与那国へ舞踊教習に派遣してほしいとお願いした場合、郷友会として対応可能か訪ねたところ、それは可能との回答を得た。むしろ、再来年に在石垣与那国郷友会は結成 70 周年を迎えるため、その記念公演に向けて、与那国の芸能を練習する機会が設けられれば望ましい、との回答を頂いた。以上の状況から、在石垣与那国郷友会でも舞踊と地謡の後継者育成は少なくとも課題と認識している方々がいらっしやることと、後継者育成については、在沖縄与那国郷友会と同じ方法が可能かもしれない、という意見を聞くことが出来た。

在石垣与那国郷友会での与那国民俗芸能後継者育成に関するヒヤリング報告

与那国民俗芸能伝承保存会副会長 田頭政英

高齢化、少子化が進むのに伴い、離島では長い間受け継がれてきた伝統行事が、ややもすると簡素化され、民俗芸能の座に至っては後継者が育たず存続が危機的状況にある。離島に起こりうる課題だが、与那国島も例外ではない。

そのことをふまえ、島外在住の与那国郷友会員らが活動の中で郷土の民俗芸能を伝承し、どのようにして後継者を育成しているのか。

このほど、在石垣与那国郷友会へのヒヤリングをするにあたって、「一般社団法人与那国フォーラム」の小池康仁氏に同行し会員の思いなどを聞いてみた。

令和元年（2019）12月8日正午から開催の同郷友会元年度定期総会に出席した。午前11時に会場入りして川満祐次会長始め、会員の米城スエ子氏、宮良純一郎氏、砂川なおみ氏、新崎昌治氏他、若い会員の長尾蓮さん、高島忠蔭さん等にも同会内での郷土芸能伝承活動について訊ねてみた。

川満、宮良両氏は「与那国の踊りや地謡の後継者が育たない話は聞いてはいるが、郷友会も似たようなもので、しっかりした形で継承している訳ではない」と二人の言は共通している。この先の不安は拭えないようだ。

新崎氏は「立ち方、地謡は何とか居る人で間に合わせている」と現状を話してくれた。かき集めてその場を乗り切っているが、今のところそれで十分だ、と言い「いつまでもそうはいかんでしょね」と付け加えた。砂川氏も新崎氏と同様の考えである。郷土芸能後継者育成については満足できる事例はなかった。

総会が始まるまでの午前の2時間ほどは図書館で、与那国島で演じられている組踊について調べてみた。砂川氏が「むかし与那国島の組踊でサンガイイソバの首を撥ねる場面があったそうなのですが、そんな話ありましたか」と訊いてきた。そのようなシナリオは考えられないので総会後に市立図書館で物の本を開いてみた。また各館の代表的な出し物で東公民館の「村原敵討」、西館の「雪払い」、比川の「久志の若按司」などについても調べてみたが、原作の筋書きからかけ離れた物語が見受けられた。

「イソバ首撥ね」については今後、それに至った筋書きに繋がる調査を継続して話の出所を探りたいと思っている。保存会役員の立場上、隅におけない問題である。

節目ふしめに行っていたシティガンの組踊や狂言がこの10年余、演じられていないのは忍びない。伝統芸能伝承に向けて後継者育成に意を集中したい。以上

(4) まとめ 一人財育成計画のねらい

以上、平成28年度から30年度までの事業内容について、報告してきた。平成31年度事業の内容は、特に平成30年度(2018年)8月6日に実施した、舞踊・地謡座談会「民俗芸能の未来のために、今できること」の議論に基づいて構成されている。それは、同座談会にて町への提言としてまとめられた、(1)継承のために、芸能をより魅力あるものにしていくこと、そのために、地域と学校が協力関係をさらに深めていくこと、(2)10年ごとに行われてきたシティブディが、前回の10周年目にならなかった、このまま無くさないように、復活させていくこと、以上の2点について人財育成計画書を通じて町へ提言することを目標に、事業内容を構成しているためである。平成31年度に発行する、「人財育成計画書」は、上記の(1)(2)を町へ提言するにあたり、その具体策の提案として構成したものである。

本報告書の最後に、今年度の事業成果をふまえ、人材育成計画書の内容に関する編集方針を示し、まとめとする。

①ヒアリングのまとめ

平成31年度の事業では、郷友会との人材育成に関する情報交換と課題共有を目的とした交流として、与那国民俗芸能伝承保存会から、在沖縄与那国郷友会有志への舞踊教習を実施してきた。加えて、在沖縄与那国郷友会愛好会に主に地謡の継承状況について、そして在石垣与那国郷友会に舞踊と地謡の継承状況について、それぞれヒアリングをさせて頂いた。そこでみてきたものは、大きな流れとして、郷友会でも出身者の会員から2世、3世へと下るにつれて参加率が下がり、会員数の減少につながっていること、そうした状況の中で、かつては盛んに行われていた舞踊や地謡の練習や発表も、参加人数の減少によって演目が減り、あるいは舞踊を出せなくなるなどの影響がでていることであった。

そのような状況を改善するためには、当然継承者や練習への参加者を増やさなくてはならないが、何か新しい事業を起こすだけの予算立ても難しく、また、与那国から進学のために出てくる子供たちの情報も入りづらいという、予算と情報の両面での課題がみられた。この課題へのアプローチとしては、与那国島と交流して情報交換をする、発表をする機会を持つなどの事業を実施することが効果的ではないかという意見が多くみられた。本事業年度において3回ほど実施した与那国民俗芸能伝承保存会からの舞踊教習においても、終盤になると与那国で発表する機会を持ちたいという声に参加者から聞かれるようになった。

これは、昨年度までの事業の中でたびたび指摘されてきたように、特に地謡のように育成に時間のかかる担い手ほど、定期的に発表できるような目標が必要であるという意見と重なる。加えて、シティブディの復活のための組踊、及び狂言の人財育成に関するヒアリングにおいても、やはり発表する目標が必要であり、それは発表会という形式ではなく、むしろ、たとえ1年間でも、シティブディ開催を目標に練習した方が良く、という意見が聞かれたことも同様に、目標となる舞台が無いと、演目の復活は難しいことを表していたように思われる。

②シティブディの運営体制について—伊江島方式と多良間方式

そこで、与那国と郷友会の交流、そして組踊や狂言などの現在演じられていない演目の復活、その

両方にシティブディの開催は有効ではないかと考えられる。シティブディそのものが主に芸能発表を目的とした祭事のため、そこへの出演を目標にすると、郷友会も定期的に与那国へ帰る理由ができるため、郷友会、あるいは行政などで予算立てをするための議論が活発化するのではないと思われる。通常の発表会の場合、毎年継続的に実施できる保証はないが、祭事ならば少なくとも公民館の年中行事の一つとして、毎年でなくとも（例えば豊年祭の綱引きが隔年実施のように）定期的に実施するという形で制度化できるからである。

では、どのような形でシティブディを復活させたらよいのだろうか。シティブディは、近年10年ごとに町制の周年記念行事として、町が組織する実行委員会によって行われていたが、前回の70周年記念の年には復活することはなかった。従って、今後も町主催実行委員会方式で良いのか、それとも別の方法が良いのか、検討する必要があると思われる。そこで、本事業では、与那国と同じ一島一自治体で、国の重要民俗文化財指定を受けた芸能を継承している県内の伊江村と多良間村に、その運営体制に関する調査を実施した⁷。それぞれの教育委員会に対してヒアリングを行ったものだが、両者の事例は好対照だと思われるので、それぞれ便宜的に伊江島方式と多良間方式として紹介したうえで、与那国が実施しやすい運営体制について検討したい。

伊江島は沖縄本島北部に位置する周囲22.4キロの島で、与那国より面積は小さいものの、人口は4,522人（2020年1月末現在）⁸と与那国の2倍以上である。平成10年12月16日付で、「伊江島の村踊」として国の重要無形民俗文化財に指定された。その芸能は、毎年11月に実施される伊江村民俗芸能発表会にて披露されるが、この発表会は伊江村が主催するものの、昭和48年から各区輪番制といって、村内の八つの区（東江前、川平、東江上、西江上、阿良、西江前、真謝、西崎）が毎年交代で実行委員会を組織し、芸能発表をすることになっている。

民俗芸能発表会に関する実行委員会への村からの補助金は、村の一般財源（文化財保護に関する負担金）、伊江村芸能振興基金条例に基づく積立金、（公社）沖縄県地域振興協会の助成金（旧対米請求権）から拠出し、200万～150万円ほどであった。実行委員会の予算は、それに区の積立金や寄付を足して、おおよそ450万円程度の予算で実行しているという。実行委員会の組織としては、平成31年度の実行委員会を例にすると、区長の下に実行委員長が置かれ、その下に事務局と総務部が置かれ、事務局には監査が付き、総務部の下には舞踊部、山々棒、地謡部、施設部、ハッピー部が置かれ、それぞれの部に郷友会からも参加者が入るといった構図になっていた。また、別に実行委員会の顧問が置かれている。これらは区民で構成されていた。

⁷ 2019年10月17日、伊江村教育委員会にてヒアリング実施。宮里徳成教育長、知念浩司社会教育主事にご対応頂き、資料提供を受けた。（一社）与那国フォーラムから小池康仁、他にオブザーバーとして狩俣恵一沖繩国際大学特任教授が参加した。2019年12月4日、多良間村教育委員会にてヒアリング実施。桃原薫社会教育主事にコーディネートして頂き、池城三千雄教育長、仲筋字の特別会計事務経験者の垣花剛氏、塩川字の会計をされている清村賢一氏、仲筋字会長の大城隆夫氏をご紹介頂き、ヒアリングにご対応頂くと共に、八月踊に関する資料をご提供頂いた。与那国からは（一社）与那国フォーラムから小池康仁、町役場から小嶺長典企画財政課課長、町教育委員会から川越義希教育課学校教育班主査が参加した。ご協力頂いた皆様に、記して感謝する。

⁸ 伊江村ホームページ、<https://www.iejima.org/>（2020年2月9日）。



与那国と大きく異なるのは、区は自治公民館ではなく行政公民館であるため、区の中に常勤職員の書記会計（1名）がいることである。区長をはじめ、その他の役員は区民の輪番制であるが、書記会計は実質的に交代しないため、他の区長の交代や、教育委員会の人事異動があっても、民俗芸能発表会を含め、区の業務引き継ぎに対して問題が起こりにくいことであった。区の上には中央公民館が組織されているが、事務局は教育委員会の全職員（11名）が兼務しており、中央公民館長は教育長が兼任している。そのため、区長交代に伴う引き継ぎがスムーズなことに加え、教育委員会と区とは通常業務を通して意思疎通が円滑に行われているため、区が実行委員会を組織しても、教育委員会との連携の下、運営が円滑に行われている印象を受けた。与那国の自治公民館は任意団体のため、社会教育の義務はないものの、館長、役員共に書記会計を含め、完全な2年交代制となっているために祭事に関する引き継ぎが、もしうまくいかなければ、次年度の運営に大きな支障をきたす恐れがある。そのため、副館長には書記会計経験者が就任したり、二期連続で役員になったり、あるいは、役場職員がその事務処理能力を期待されて書記会計や副館長等の事務局部署に就任して、職員の負担が増えるという状態がしばしばみられる。これに対して伊江村の場合、役場職員も当該区の住民であれば実行委員会に参加するのが慣例ではあるものの、40代以下は出演者としての参加であり、主に役者を終えた50代以上が執行部に入っていた。つまり、役場職員だからといって、事務局部署への就任を必ず期待されるということは無かった。

その代わりに、与那国と異なり、村内で字の神行事は行われておらず、民俗芸能の披露の場は祭事ではなく、民俗芸能発表会のほかは敬老会や、小学校の学習発表会、家々の祝い事などであった。つまり、私的な祝い事を除けば、芸能継承の機会には行政主催の行事に限られていることであった。そのような意味では、与那国のように集落主催の祭事が無い分、行政が芸能の保存継承の第一線に立たされているといえる。そのため、行政主導の制度化された継承システム、つまり各区輪番制の実行委員会方式が整備されたのではないかと思われる。

このような伊江島方式（＝各区輪番制の実行委員会方式）に対して、多良間村では、対称的に、国指定重要無形民俗文化財となっている「多良間の豊年祭」（八月踊）の運営に役場は全く関わらず、主に字と、その下にある座を中心とした運営と継承を行っている。座の機能については、与那国と同じく、集落の中で舞踊や地謡などの芸能ごとに座がおかれ、祭事の2週間前から師匠を中心とした指導によって練習が行われているという点は共通している。与那国と異なるのは、与那国ではかつて九つあったといわれる座が減少し、現在、実質的には舞踊と棒の二つの座しか残っていないという状況で

あるのに対し、多良間では、与那国よりもはるかに多い数の座が字の中で活動しており、さらに機能としても多様である点であった。多良間島は、面積 19.75km²と与那国より小さく、人口は 1,134 人で、若干少ないという印象を受ける。しかし、現在郷友会に頼らなくても、ほぼ島内の住民だけで八月踊りを実施できるうえ、地謡や踊り手もまだ十分な人数を揃えているという。そのような意味では、与那国よりも継承は安定しているのではないか、という印象を受けた。

八月踊は字が主催となり、塩川字と仲筋字が開催する。多良間でも、伊江村と同様に行政区がおかれているが、字会長の下に各区の評議員と区長が配置されている。八月踊ではこの評議員と区長によって中老座が組織され、企画責任者に当たるようである。これは、与那国町では実行委員会に当たるのではないと思われる。その下に字三役が置かれ、さらにその下に、幹人座、支度座、羽踊座、組座、地謡座、獅子座、笠座、狂言座といった座（幹人座と笠座は仲筋字にしかない）がおかれ、座単位で演目が披露される。座の中にはもちろん師匠がいるが、師匠だけから演目を習うわけではなく、その演目経験者の先輩から後輩へと継承されていくようである。与那国でも、かつては踊りの道具を扱う花座や、旗頭や獅子を保管する旗座が活動していたといわれるが、多良間では、道具を扱う支度座の他に、八月踊において字全体の会計を扱う幹人座、そして企画運営に当たる中老座など、与那国にはない会計や事務局機能を担う専門の座が存在している。そして、八月踊執行予算約 150 万円のうち、役場からの補助金約 10 万円は字には入るが、ほとんどは衣装道具や備品費に充てられるため、踊り座の運営費には充てられていない。残りの 130 万～140 万円は世帯ごとの徴収金（1 世帯 500 円）と個人、企業からの寄付金であった。また、字からの分配の他に、座には地域住民からの寄付金収入があり、それを扱う会計担当が座にいるということであった。与那国でも、棒座に書記会計を置いている公民館もあるが、必ずしも座の中に役職としての会計がいることが一般的ではないと思われる。また、羽踊座など、舞踊でも特定の演目を継承することを目的とした座が存在するなど、座を機能によって細かく分けている、という印象を持った。

そのように、与那国では公民館役員や実行委員会が担うような書記会計や企画運営は、多良間では主に座によって担われ、その書記会計や企画運営の職務そのものが、座の中で継承の対象となり、芸能の演目と同様に、先輩から後輩へと引き継がれていくことになる。そのように考えれば、多良間では練習期間も信仰に基づいて開始の日取りなどが決まっているため、座の中での継承さえ絶やさなければ、毎年慣例に則って、芸能出演者だけでなく、企画運営についても本番までの段取りが毎年変わることなく、その分安定して続けていけるということになる。

また、祭事に関しても、多良間では司や、ニサイガッサと呼ばれる、与那国ではティディビに当たるような役職も、地域の中で 2 年交代の完全な交代制になっていた。与那国では司だけでなく、たとえばミルクの役も特定の家の世襲であることを伝えると、逆に多良間の教育委員会職員が驚くくらいであった。さらに、徴収金を出す単位となる世帯数は塩川 363 戸、仲筋 150 戸で、計 513 戸ほどであり、与那国では 5 公民館合わせて 956 戸⁹であることと比べると、字や座など、地域組織の運営がいかに自立的に行われているかを物語っているように思えた。与那国ではそこまで地域組織による集金と運営が徹底されているようには思われないが、それでも公民館ごとに数名しかいない役員が書記会計や単純労働だけでなく、実質的にティディビの役もこなしながら年間数十回の祭事を続けていられるのは、司や旧家のような神行事の執行役を世襲する家や、あるいはミルクやドゥナイドゥといった特定の演目を世襲する家だけではなく、公民館長の家など、家とその親戚を中心とする単位で村の行事を支えてきたのではないと思われる。これについては、多良間村教育委員会職員より、芸能演目までもが世襲制であるなど、家単位の世襲制が根強く残っているという意味では、与那国は、

⁹2019年12月31日現在。与那国町「人口及び世帯数調表 令和元年12月31日」。

多良間よりもむしろ大神島に近いのではないか？という意見も聞かれた。大神島では、祭事の主たる役割が世襲制の家々によってまかなわれてきたため、その家が引っ越してしまうと、急激に衰退してしまうのだという。

多良間村教育員会職員からの助言として、役場主体の実行委員会方式によって復活させた場合、一過性のイベントとして終わってしまいがちなのではないかと、継承ということを第一の目標にするならば、多良間のように座を細かく作っていき、その座ごとに毎年同じことをしていれば、実行委員会の事務局が大変な労力を払い、毎年段取りについての調整に時間がかかることもなく、八月踊のような大きな祭事もこなしていけるのではないかと、このことであった。

以上、伊江島方式（各区輪番制の実行委員会方式）、多良間島方式（字の下に座を中心として、自立した複数の地域組織が連動する運営方式）の二つを紹介してきた。単純に図式化すると、一方は行政主導、もう一方は地域社会主導の運営方式といえるが、どちらの方式においても共通していえることは、書記会計の役割が常勤職員である、座における継承の対象となるなど、長期間にわたり交代しない、あるいは、同一年度に複数人の担当者がおり、その中で先輩から後輩へと教えながら引き継がれていくという人事制度であった。与那国の祭事で書記会計を担うのは、主に公民館役員の中の書記、会計、事務局長、副館長などの担当者であるが、これらの人事は館長と共に2年という短期間で完全に入れ替わってしまうため、細かい業務の引き継ぎがしづらく、人材育成の面から考えても効果的ではないのではないかと考えられる。そのように短期間で入れ替わる少人数の役員を補助し、与那国の祭事の運営を支えているのは、公民館長や役員の家族、親せきを中心とした地域の手伝い人たちである。これに棒座なども協力する場合があるが、基本的には公民館長の血縁を中心とした人事制度のため、館長や役員の家族の負担も大きくなりがちで、公民館長の成り手が不足しているといった声は、こうした要因から起きているのではないかと考えられる。

さらに、その事務処理能力を買われて、役場職員が公民館の書記会計を頼まれることも多い。たとえば、平成30年度の与那国町役場の非常勤職員も入れた職員総数は、約69名といわれる¹⁰が、平成30年度の5公民館の役員のうち、役場職員は9名入っており、そのうち8名が書記、会計、事務局長、副館長という、書記会計あるいはそれを統括する総務部門の要職についていた¹¹。与那国町は行政主催のイベントも多く、また働き盛りの年代には学校行事やPTA、子ども会、法事など、参加しなくてはならない地域行事も多い。そのような中で、69名の役場職員のうち9名が公民館役員を担わなければならないという現状は、行政の生産性という面でもインパクトは決して小さくないのではないかと考えられる。これに加えて、与那国町には行政公民館はなく、その代わりに公民館の連絡組織である与那国町自治公民館連絡協議会があるが、これも事務局は教育委員会であり、会計は教育委員会が預かっている。教育委員会は年間約300万円程度¹²の補助金を公民館に支出しており、祭事の運営費としては伊江村などと比べても少ない金額ではないと思われるが、それだけではなく、行政は労働力としても公民館の負担を支えているのではないかと考えられる。そもそも与那国町の行政職員数も不足しているため、今後、担い手が不足しているために公民館は行政の支援をますます必要とすると思われるが、職員不足のために職員の負担が増え続けている行政にも余裕はないため、祭事はますます簡略化、縮小化の傾向をたどるのではないかと懸念される。祭事は学校と同様に地域社会の求心

¹⁰ 小嶺長典与那国町役場企画財政課長のコメント。2019年3月31日。

¹¹ 与那国町自治公民館連絡協議会提供の組織図による。

¹² 平成29年度与那国町自治公民館連絡協議会収支計算書、平成29年度久部良自治公民館収支計算書、比川自治公民館平成29年度社会教育活動費育成補助金申請書、平成29年度祖納自治公民館連絡協議会収支計算書を参照。

力の一つであるため、祭事が簡略化、縮小化することは、過疎化が進む与那国島の人口流出をさらに加速させることになるだろう。

そのような、いわば行政と公民館の共倒れの未来を回避するためには、公民館祭事についていえば、地域社会からの参加者をさらに増やし、そしてその中から、書記会計や総務を担える人材を安定的に育てていくことが、一つの方法になるのではないだろうか。その意味では、行政公民館が復活するのであれば伊江島方式も一つの参考例になるであろうし、現在の自治公民館制度を維持し続けるのであれば、多良間島方式の方が参考にしやすいのではないと思われる。以上をふまえ、このたびの当フォーラムの人財育成計画では、主に多良間島方式を参考に作成することとした。

③ マネージメント人材の育成

平成 30 年度の芸能交換会の前後から、与那国の棒座以外の芸能継承組織では、師匠以外に、練習に人を集め、練習の段取りをするマネージャー役も不足しているのではないかと、という懸念がみられるようになった。というのも、座の中でそのような役割を担うのは、一部の棒座で役員を置いている以外は、多くの場合、師匠がそうした役割をも兼任しているように見えたからである。そのような意味で、発表の場を作るにしても、練習環境や本番までの段取りが整わなくては、出演者のモチベーションが下がってしまうし、今後シティブディを復活させていくにしても、練習をするための人集めや段取りがうまくいかなければ、かつてのような裏方を含めて 150 人規模の芸能¹³ はそもそも実施が難しいと思われる。

そのような、組織運営に関するマネージメント人材の在り方について、行事における新規練習参加者の比較的多い嶋仲踊座が参考になるのではないかと考えた。嶋仲踊座の参加者は、嶋仲婦人会の参加者とほぼ重なっていると思われる。また、婦人会には、公民館から活動費の補助が出ており、それが活発化を促しているという意見もある¹⁴。実際、嶋仲で踊りを指導する婦人たちが女性部を主導して山菜取りなどのイベントを行っているほか、婦人会主催のバザーが行われているなど、しばしば活発な活動が見受けられる。また、婦人会会長は館長婦人が就任するのが習わしということである。

そのように、婦人会活動が活発なために、踊座にも婦人会を通じて新規参加者、特に移住者の参加者が増えているのではないかと推察している。平成 29 年度に嶋仲踊座を取材させて頂いたときには、婦人会主催で、月 1 回、町の保健センターにて地域のお年寄りに驚の鳥節などの踊りを観てもらい、一緒に方言で歌をうたうなどの交流会を実施していた。そうした催しにおいて、参加を呼び掛けていた元婦人会会長の地域活動も参考になるのではないかと思い、2 回ほど、元婦人会会長の方が運営する地域の高齢者を対象にした地域活動を取材させて頂いた¹⁵。そこでは、ご本人の運営する織物工房を会場にして、月曜日から土曜日まで、午前と午後の 2 回に分かれてイベントが組まれていた。これは、与那国町の平成 31 年度生活支援体制整備事業を受託した町社会福祉協議会による住民主体サロン（通いの場）事業補助金を受けて運営しているものであった¹⁶。主に 65 歳以上の高齢者の健康づくりと介護予防を目的として、高齢者の歩いて通える範囲内にサロンを設置し、地域住民による有償ボランティアのコーディネーターを一人置いて、健康づくりのための様々なイベントを実施するというもの

¹³ 与那国町文化財調査委員会編『与那国町の文化財と民話集』「与那国島の無形文化財」与那国町教育委員会（1992 年）p.29

¹⁴ 当フォーラム事務局補助員慶田嵩正弘のコメント。

¹⁵ 2019年12月17日、2020年1月9日、花ゆり工房を取材。

¹⁶ 与那国町社会福祉協議会提供「H31年度生活支援体制整備事業 事業実施計画書」「H31年度事業計画書 生活支援体制整備事業」「住民主体サロン（通いの場）事業要綱」参照。

である。主なプログラムは、健康づくり体操や、三線教室といったもので、三線教室は、与那国民俗芸能伝承保存会でも師範を務めておられる与那覇令子氏が指導しておられた。しかし、芸能継承を目的とした練習ではなく、あくまで健康づくりが目的の会であるため、65歳以上の方々が和気藹々と、楽しみながら演奏している雰囲気であった。会場内には、事業とは直接関係ないが、嶋仲婦人会の活動の様子がわかるイベントの集合写真なども貼られており、婦人会によく参加される会員の方が、ボランティアで手伝っておられた。

こうした地域活動が、継承組織におけるマネージメント人材の育成にどこまで効果があるのかについては、さらなる調査が必要だが、座のような継承組織も地域活動に関わることで新規の参加者が入りやすい雰囲気が作られる可能性が高いため、婦人会の中で地域活動の幹事役を担う人に公的補助を出して支援することは、翻って座のような継承組織に新規参加者を増やし、活性化にもつながるのではないかと考えられる。特に、近年の祭事の準備や芸能継承の場においては、80代以上のお年寄りを見かけることはほとんどない。本来、祭事などの地域行事の場は芸能だけでなく、方言や道具作りなど、生活文化に関する様々な知識を先輩から後輩へと継承する場でもあったと思われるが、祭事に高齢者の参加が少なくなっている分、今後は子供たちの育成と合わせて、そのようなお年寄りからの知識の継承の場を作っていく必要があるのではないかと考えられる。その意味でも、芸能継承の組織と地域作りや高齢者福祉に関係する活動が連携していくことは意義深い。

以上の点をふまえて、当フォーラムの人材育成計画においては、人財育成の実施にあたって来年度以降計画の細目を詰めるにあたり、地域活動と連携しながら人材育成を行う方法を検討していく。

④他島との芸能交流を通じた、継承者育成の在り方

平成28年度事業から、竹富島、小浜島、西表島祖納、干立をはじめとした、八重山の他の島々との交流事業を続けてきた。その目的は、調査に留まらず、芸能の継承者同士の交流を通じた人材育成に関する情報交換と課題共有が目的であった。このような調査事業は、他島の豊年祭や結願祭、種子取祭といった芸能出演を伴う規模の大きな祭事とその練習を調査させて頂くことから始まり、与那国でのシンポジウムや芸能交換会といった交流会も実施させていただいた。特に、平成29年度に竹富島の竹富公民館に受け入れていただいて実施した芸能交換会「民俗芸能の未来のために、今できること～継承者育成の実践と精神～」は、好評を頂き、竹富側からも、このような芸能交換会は継承に役立つので、定期的で開催した方が良いとのご助言も頂いた。そうした経緯から、平成30年度には、規模を拡大して与那国の5公民館と竹富公民館による第2回芸能交換会「民俗芸能の未来のために、今できること」を実施し、好評を得た。

芸能交換会については、その事業効果から考えれば、できるだけ頻繁にこのようなイベントを実施した方がよいと思われるが、予算の大きさと他島の継承組織との本番までの調整にかかる時間と労力を考えると、毎年開催するのは難しいと考えられる。これに対して、地謡を中心とする今後の人材育成においては、少なくとも年1回程度の定期的な発表の舞台が必要になるため、芸能交換会はこうした必要性には必ずしもマッチするとはいえない。また、他島の祭事とその練習を調査に行くという方法については、現在現役の師匠や、出演者たちは他の仕事や育児、地域行事などで忙しく、特に祭事は与那国も他の島も開催日が重なることも多く、そのため調査に行くための日程を空けることが難しい場合が多い。

そこで、平成31年度は高校生を対象にして、他島の祭事の練習と本番の調査に行ってもらった。高校生ならば、大人に比べれば日程調整がしやすく、また、大人同士のコミュニケーションよりは、初対面でも打ち解けやすいという利点があった。それだけではなく、今回の小浜の調査では、祭事に合

わせて島外から帰ってくる同年代の高校生たちとの交流も生まれていた。同年代の生徒は、芸能に関心があれば八重山や県内の高校で郷土芸能部などに所属するケースも多いため、本事業の調査が終わったのちも、高校生を対象にした芸能大会等で顔を合わせる機会も生まれるだろう。そのような意味では、大人同士の交流よりも絆が生まれやすく、芸能関係者のネットワーク作りという点でも、長期的なつながりが期待できるのではないかと考えられる。

以上の点をふまえ、他島との芸能交換会については少なくとも数年単位の間隔で実施することを視野に入れ、別事業での実施を検討することとし、当フォーラムの人材育成計画では今年度の成果に倣い、島内の中学生や、進学したばかりの高校生が学校同士、あるいは地域の社会教育委員同士のつながりなどを活かして、他島の祭事の芸能継承者と交流する事業を与那国町の文化行政に対して提案することとした。

以上が、今年度までの事業成果をふまえた、人材育成計画の基本的な編集方針である。はなはだ不十分な調査結果ではあるが、人材育成計画も一つのたたき台として、町内外からのご批判やご意見を伺いながら修正し、実践に向けて町内外に働きかけていく予定である。

VI. 資料

1. 平成 29 年度民俗芸能交換会・シンポジウム 「民俗芸能の未来のために、今できること ～継承者育成の実践と精神～」芸能出演者一覧・写真

竹富公民館出演者一覧

	氏名	役割
1	上野 虹紀 (むりか星) (西支会)	舞踊
2	藤井 可菜美 (むりか星) (西支会)	
3	上勢頭 舞音 (むりか星) (西支会)	
4	友利 友紀 (安里屋) (東支会)	
5	中村渠 成代 (安里屋) (東支会)	
6	根原 富江 (揚作田節) (仲筋支会)	
7	島仲 やよい (揚作田節) (仲筋支会)	
8	上勢頭 立人 (副館長)	地謡
9	野原 健	
10	萬木 忍	
11	内盛 正聖	太鼓
12	上勢頭 同子 (西支会)	舞踊師匠
13	新盛 桂子 (東支会)	
14	島仲 由美子 (仲筋支会)	
15	内盛 朝佳	ナレーション
16	水野 景敬	舞台技術者
17	登野原 栄立 (副館長)	舞台技術者補助員
18	上勢頭 篤 (館長)	舞台技術者補助員

与那国側出演者一覧

	氏名	役割
1	米澤 恒司	地謡
2	慶田嵩 正弘	
3	前濱 由紀	
4	与那覇 ひとみ	舞踊
5	鳩間 美都子	
6	前浜盛 里亜	
7	小嶺 奈々子	
8	前西原 たかね	
9	我那覇 美穂	
10	西新田 みなみ	
11	前浜盛 美也	

道唄



むりか星



ちでいん口説



安里屋



揚作田節



与那国ぬ猫小節



竹富公民館の地謡と、ナレーションのみなさん

2. 平成30年度 第2回民俗芸能交換会 「民俗芸能の未来のために、今できること」

竹富島 演目歌詞・解説（狩俣恵一著）

仲筋ぬ又ペーマ（仲筋集落）

仲筋ぬ又ペーマ節

- | | |
|------------------|----------------|
| 1 なかすじぬ 又ペマ | 仲筋村の 又ペマ |
| ふんかどうぬ みやらび スリヨー | 組角（仲筋の対語）の 乙女 |
| ヒーユースー ヨー ヒーヨナー | |
| 2 一人ある みどうなふあ | 一人っ子の 娘が |
| たぬぎゃある ちむぬふあ | 大切に育てた 可愛い子が |
| 3 ばなりぶとう むたしょうり | 新城島の夫と 結婚させなさい |
| うどうぎゃぶとう むたしょうり | 役人と 結婚させなさい |
| 4 いきやぬゆい 又ペマ | どういうわけで 又ペマ |
| なぐぬゆい みやらび | なぜ 彼女（は結婚したのか） |

安里屋節（早調子）

- | | |
|---------------|-----------------|
| 1 みじふにぬ なちきし | （母親は）水汲みに かこつけて |
| ンブフルに はりぬぶり | ンブフルに 上り |
| 2 みらでしや なみぬはな | 見えるのは 海原ばかり |
| みなだまり みらるぬ | 涙が出て 見えない |

仲筋の又ペマは、竹富島仲筋村の幸本家の娘で、実在の人物である。

1730年頃の竹富島の水がめは、質が悪く、御用布の原料になる良質の苧麻もなかった。それで、竹富島の玉得与人は新城島に渡って、「苧麻の種」と「バナリ焼の赤がめ」を譲って欲しいと申し入れた。新城の新垣与人は、「竹富島には美女が多いと聞いている。ついては、竹富島の美しい娘を賄女にしたい。ぜひ世話して欲しい」との交換条件を出した。

竹富島に戻った玉得与人は、賄女の物色を命じたが、希望する女はなく、適当な女も見つからなかった。それで玉得与人は、村番所に奉公に来ていた幸本山戸の一人娘の又ペマに白羽の矢を立てた。新城島へ行くように命じられた又ペマは、泣く泣く新城島に行くことになった。

そして、別れの時は、母娘が抱き合って泣きくずれていた。それを見た玉得与人は、自分が命じたことだったが、胸も張り裂けんばかりになった。そして、自分の娘を遠い新城島にやるような気持ちになり、涙とともに即興で歌い出したのが「仲筋ぬ又ペマ」の歌であった。

「仲筋の又ペーマ節」では、「仲筋村の又ペマ、大切に育てた一人娘の可愛い子を新城島の与人役人の嫁にした。どうして嫁がせたのか」と歌う。そして、つづく早調子の「安里屋節」では、「母親は、仲筋井戸に水汲みに行くと言い訳して、ンブフルの岡に上って新城島を見るが、又ペマを見ることは

できない」と歌う。

ところで、竹富島の美女と言うと、安里屋ユンタのクヤマが有名だが、クヤマとヌペーマは、同じ18世紀の女性である。「仲筋のヌペーマ節」は、悲しい歌であるが、深みと抒情性がある。それに対して、「安里屋ユンタ」は明るく軽快な歌である。

てーどうんくどうき
竹富口説（インノタ集落）

き ゆたか たけとみ
扱ても豊かぬ竹富は

さても豊かな竹富島は

しま なが みわたし
島の流れを見渡せば

島の流れを見渡せば

みどりあおば その けしき
緑青葉の其の景色

緑青葉のその景色

いやいや八重に花咲く果報の島 さて

かぜ しずか あめ いつか
風や静かに雨は五日に やわやわ賜れば

つく むずく まんさく たみ ゆたか
作る物作り満作そうりば 民の豊や

うむしる なま くどうき ゆ ゆ
面白むぬさみ今ぬはやしに 口説詠み詠み（囃子）

は ぎ まくうしくほしり ぬぶてい
玻座間小城走り登てい

玻座間村の小城に 走り上り

しほう けしき なが
四方の景色ゆ眺むれば

四方の 景色を 眺むれば

こころ ゆたかぬ ちじ うえ
心ゆたかぬ 頂の上

心豊かの 頂きの上

いやいや村のかいさや 辻の美らさや

高さ低さぬ となみ無らんさ 前に見ゆるは

ばなり くるしま あとう いしがき たとう
新城 黒島 後や石垣 人間例えば腹の中ていさ

いやー 富貴繁昌 富ぬ島ていさ

なま くどうき ゆ ゆ
今ぬはやしに 口説詠み詠み（囃子）

とうときそせん おんとく
尊き祖先の 御徳の

尊い祖先の 御徳の

めぐみ こ ふね
恵うけたる 此の船に

恵みをうけた この船に

えいやえいやと 舵をとる

えいや えいやと 舵をとる

いやいや じっとしぱりよ 二歳達

でき 油断やならんさ

まい ちん まさ
米ぬのうりや常ん勝んとてい

えいやえいやと持ちゆる力 米ぬ山や

船に積みこみ 前や吾が島

あとう みかじ かりゆしかりゆし
後や新風 へいへい 嘉利吉嘉利吉

さてさて船頭船子や 喜び勇みてい

うた はや うむしる なま
歌を囃しす 面白むぬさみ 今ぬはやしに

くどうき ゆ ゆ
口説詠み詠み（囃子）

たけ しま さくはな 竹の島に 咲く花を	竹の島に咲く花を
なが こころ 眺む心の たのもしや	眺める心の 頼もしさ
きょう あそび たみおどり 今日の遊びの 民踊り	今日の遊びの 民踊り
いやいや てん めぐみ かみ うかぎ いやいや 天ぬ恵ん 神ぬ御蔭ん	
じゅうじゅうさまさま かな ん 重々様々 叶てい見ちゃりば	
りいぎ うい わか ありが禮儀や 老てい若さん	
くぬ うどう きょうぎん さみせん 好める 踊り狂言 歌や三味線	
た に どうりよい うむしる なま 種子取祝ぬ 面白むぬさみ 今ぬはやしに	
くどうき ゆ ゆ 口説詠み詠み (囃子)	

のぼ あさひ ただひと 昇る朝日は 唯一つ	昇る朝日は 唯一つ
人の心も 一つなり	人の心も 一つなり
かみ しむ もろとも 上や下までい 諸共に	上や下まで 諸共に
いやいや うつぐまさ むかし いやいや 打組勝りや 昔のさまさま	
はじ たきどうん いやー 昔 にしどうがみ 始めや竹富 いやー 昔 西塘神の 教えを	
まむ いくよ 深く守らば 幾世までも さてさて	
島の光や 神と共に 歌にかきられ	
くどうき ゆ なま うどう 口説に詠まりさ 今ぬはやしに 踊りむどうらな (囃子)	

(解説) この口説は、竹富島の風景、文化、生活、古代信仰、由緒を正しく謡い、島民の協力、西塘精神を説いた歌ばやしの口説である。昭和12年丑歳(*上勢頭同子氏の指摘による)の種子取祭に際して、上勢頭亨氏が作詞・振付した。

(上勢頭亨『竹富島誌—歌謡・芸能編』法政大学出版局,1979年,pp.206-208より、小池が転記)

種子取節 (アイノタ集落)

大原越地節

1 ちちぬにぬ たにどうる シタリーヌ	戊子の 種子取祭
たにうるしぬ うにがい シタリーヌ	種子下ろしの 御願い
ウヤキ世バ タポラルヨ	ウヤキ世バ 賜ルヨ
2 うふはたぎ まきいり シタリーヌ	大畑 蒔き入り
たふはたぎ まきいり シタリーヌ	たふ畑 蒔き入り

ウヤキ世バ タボラルヨ ウヤキ世バ 賜ルヨ
 3 いぬがきに にぎうい 犬の毛並みのように 生えて根が張り
 シタリーヌ
 まゆがきに むとううい 猫の毛並みのように 繁茂し
 シタリーヌ
 ウヤキ世バ タボラルヨ ウヤキ世バ 賜ルヨ

はしゆば節

1 ちちぬにぬ たにどうる うにがい 戊子の 種子取祭の 御願
 ウヤキ世バ タボラルヨ ウヤキ世バ 賜ルヨ
 2 ゆしきだき いばんだぎ さかりょーり ススキ 力芝草のように 繁茂して下さい
 ウヤキ世バ タボラルヨ ウヤキ世バ 賜ルヨ

種子取祭の踊りとして仕組まれた。歌は、「大原越地節」と「はしゆば節」で構成される。「大原越地節」の内容は以下のとおり。今日の戊子の日の吉日に種子を蒔き入れ、豊作を賜るよ。大きな畑に蒔き入れ・平らな畑に蒔き入れ、豊作を賜るよ。蒔いた種子は、犬の毛並みのように生え、猫の毛並みのように繁茂する。

「はしゆば節」の内容は以下のとおり。今日の戊子の日の吉日に種子を蒔き入れ、豊作を賜るよ。ススキのように 力芝草のように、繁茂してください。豊作を賜るよ。

ソープリキョンギン（芋堀狂言）

与那国島でキングイ言われる狂言は、竹富島ではキョンギンという。ちなみに、沖縄本島ではチョーギンと称する。このソープリキョンギン(芋堀狂言)は、笑いを主体としたバラシキョンギン(笑い狂言)である。ソープリとは、「芋堀り」の意。登場人物は、女A・女B・男の3人。

1 女Aの名乗りと女Bを誘う場面

登場した女Aが、「〇〇家の〇〇です」と名乗り（自己紹介）をする。そして、私の両親が、「結願の前に芋を掘って大勢の人たちの食料の準備をしなさいと言ったので、女Bの〇〇家の〇〇さんを誘いにいきます」と観客に向かって告げる。そして、楽屋に向かって女Bを呼び出し、芋堀りに誘う。女Bは、楽屋に入って芋堀りの準備をして再び登場し、2人は揃って芋畑へ行く。

2 芋畑へと歩く場面

女Bが「どこの畑に行くの?」と尋ねると、女Aは「シージャ（兄さん）」とこたえる。すると、女Bは「兄さんには、シージャではなく、ピラーといって敬うべきよ」と、勘違いの忠告をする。すると、女Aは「違うのよ。畑の名前がシージャですよ」とこたえる。

3 芋畑を褒め、芋の種類を説明する場面

芋畑に到着すると、女Aは、「私の父親が真面目で働き者だから、たくさんの芋を作ったのよ。南の畦から北の畦を越えて、ウラミゾからヤロザキまで全部我が家の芋畑よ」と自慢する。

そして、昔の芋は3種類しかなかったが、今は「与儀紫」「農林1号」「南国」「沖縄1号」、それに「バカ」と、芋の種類はたくさんあると説明する。すると、女Bが「私をバカと言うの?」と怒ると、女Aは「そうではない。よく稔る芋だから、稔り過ぎるのでバカと言うの」と、こたえる。

4 芋掘りの場面

「芋の葉節」の曲に載せて「芋堀の歌」を歌いながら芋を掘る。最初は「島の男を夫にすると、芋を掘ることになる」と歌い、2番目の歌は、「金持ちの嫁になれば、革の草履が履けるようになりたい」と歌う。そして、ガーサラ、ガーサラ、パッターラ、パッターラとはやす。

すると、女Aが「あなたのガーサラ、ガーサラ、パッターラ、パッターラは、ヤシガニがアダン林の中で歩き回っているようでおかしいよ」という。女Bは「私の歌には意味があるのよ」と言い、「父さん母さんが私を大切に育てたので、成長したら、お金持ちの嫁になり、ガーサラ、ガーサラ、パッターラ、パッターラと、音のする革の草履で歩けるようになりたいという願いを込めた歌なの」という。

そして、女Bは、女Aに向かって「あなたの先ほどの歌はどんな意味なの?」と質問する。すると、女Aは「恋人を待つわ、という意味よ」とこたえ、「恋人がいて妊娠しているの」と告白する。

5 男が登場する場面

場面が変わって、男が登場して「芋を運びに行く所です」と観客に告げる。一方、女2人の会話はつづく。女2人が妊娠三ヶ月だと話していたときに、男がやってくる。二人の会話を聞いた男は、「お前たちは芋を掘らずに、三ヶ月だの、三角だの、四角だの、無駄話ばかりして」と怒鳴るが、女2人の説明を聞いて、既に芋を掘り終えていたことを知る。

6 天秤棒で芋を担ぐ場面

男は、畚に入れた芋を天秤棒で担ごうとするが、天秤棒がかたより過ぎて持ち上げられない。「お腹に子どもがおり、二人前なので片寄ってしまう」と言うと、男は「誰の子だ」と尋ねる。すると、女Aは、「あんたの子じゃないから心配するな」という。

そんなやりとりの後、男が「お尻を持ち上げろ」と言う。女2人は、畚のお尻を持ち上げるべきだが、男のお尻を持ち上げて、男をひっくり返してしまう。お尻違いである。男に水を飲ませて介抱すると、男は元気になり、怒って2人の女を追い回す。

ドタバタ騒ぎの後、女二人の協力で、男は天秤棒担ぎ上げる。そして、女Bが、女Aの頭にザルを載せる。最後の女Bが、1人でザルを頭に載せるとき、「俺の天秤棒を下して、お前を手伝おうか」と、男が言う。女Bは「やっつとで担がせたものを下すんだって?」と、ビシヤリと男をやり込める。

7 神様に豊作を感謝し歌いながら帰る場面

男は、竹富島のムーヤマ（六御嶽）・ヤーヤマ（八御嶽）の神様に芋の豊作を感謝する。そして、「作たる米節」の曲に載せて、芋の豊作を歌いながら3人そろって退場する。

与那国島 演目歌詞・解説

(与那国町教育委員会編『与那国島の祭事の芸能』(昭和63年)より)

みていうた
道唄

くとうちとうち はどうみよ スウリヌ
うぬんとうち はどうみよ ウネシュラヨ 今年の年始め う年始め

とうかぐしぬゆあみよ スウリヌ
やばやばと たぼらり ウネシュラヨ 十日越しの夜雨 やわらに給われ

んかていくるとしやよ スウリヌ
みるくゆば たぼらり ウネシュラヨ 迎える年は 弥勒世を給われ

うむたくとう かなし スウリヌ
にがぬちでい ちなしよ ウネシュウラ 思った事が叶え願ったことも果たし

(大意) 新しい年を迎え、祈願が叶えて豊作が賜り、島を挙げて喜び、舞踊り、尚来年もより一層の五穀豊穡が賜りますように、重ねて神に祈願をし自ら歌い喜ぶ。

アサカッティ(祖父捨て)

(あらすじ)

我が家の祖父は心のやさしい祖父で、毎日三度の食事也喜欢いなく腹いっぱい食べていた。ところが、近頃では老人ボケで、差し上げる飯に、あれこれ文句をいい、ついにご飯をひっくり返し、あげくのはては、家の道具などを割ったりして始末におえないので、友人を頼み、祖父を東崎につれていき、海に投げ捨てようと押し問答しているところに獅子が現れて、かみついてきた。孫は自分の非をわびて獅子に帰ってもらい、祖父をお供して家にもどり、一層孝行にはげんだという。

たびがふうぶし
旅果報節

かりゆしぬふにや かりゆしばぬしてい 嘉利吉の船は 嘉利吉を乗せてい
たびぬいていむどういや いたうぬういから 旅の行き戻りは 絹布の上から

んでいていやくよなしぐわうぎていやうみぐわ 行って来いよ産子 用務をおえて来いよ思子
うやや やどうむとうに うにがいしゆるた 親は宿元にお祈りしているから

(大意) 離島苦の悩みの中で、大事なわが子の旅立ちに、海上安泰を祈願し、無事に帰宅するまでを念願する所作である。

ながく^{ぶし}節

たいかくからふくろくじゅ ゆなぐににいいもうち 大国から福祿寿 与那国にお出になり
みやからゆや みるくゆがふでむぬ 今からの御代は弥勒世果報です
ミンミンミン チーヤーブ

しまなかぬういに くがにとうるさぎてい 嶋仲の上に黄金燈籠下げて
うりがあかがいに みるくんかい それが明りで弥勒世をお迎えし

みるくがなしいいもうち あしばばんあしび 弥勒加那志お出でになり 遊ぶなら遊べ
ぶどうらばんぶうどうり みるくうみんぐわ 踊るなら踊れ 弥勒^{うみくわ}思子
ミンミンミン チーヤーブ

うまんちゆぬたみに くぬしまにいいもうち 万民のためにこの島にお出でになり
うりしやふくらしや さんさしらん 嬉しさや誇らしさや 限りない
ミンミンミン チーヤーブ

とうかぐしぬゆあみ ふいちじちたぼり 十日越しの夜雨 降り続き給われ
んかていくるとしや ゆがふでむぬ 迎えられる年は 世果報です
ミンミンミン チーヤーブ

んかしゆぬなぐり とうかぐしぬゆあみ 昔代の名残り 十日越しの夜雨
ぐくむじくいや まんさくさびん 五穀作物は万作です
ミンミンミン チーヤーブ

(大意) 弥勒を島にお迎えし、泰平な御代を賜り^{ごふうじゅうう}五風十雨に恵まれて、五穀豊穰を給わりますよう祈願し、島の繁栄と慶びを祝う踊りである。

ひがわみやらび
比川美童

うらうら ふか ひがわむらふか
浦々ぬ深さ 比川村深さよ
みやらび うむ
比川的美童ぬ ジントヨー想い深さ
ゆなぐに たまみし
与那国ぬ比川 アンダ玉水やよ
いろちゆら うたぐい ちゆら
ぬみば色清さ ジントヨー唱声ぬ美らさ
ちち あし ひがわはまう
月ぬ遊びや 比川浜下りてよ
ちゆら うどう あし
浜ぬ清らさよ ジントヨー踊てい遊ば
さびしいさや比川 波にかくまりていよ
あさゆうしらなみ うとう ち
朝夕白波ぬ ジントヨー音どう聞ちゆる
いかな比川ぬ さびしい村やていんよ
さと たい
里とう二人やりば ジントヨー花の都

(歌詞提供：比川自治公民館)

与那国^{まやぐわぶし}ぬ猫小節

ゆなぐにぬまやぐわ うやんちゆだましぬやから 与那国の猫小は 鼠をだます奴原
ハリ 若者をだます奴
にさいだましぬやから 聞いてください主の前
しきわりようしゆぬまい
ハリ ヨーヌヨーシュヌマイハリ シタリョーンツ
ハイヤ サーツァ
いりからぬ うぶんみしゆ 西からは大嶺主
ありがらや やいまぬしゆ 東からは八重山の主
まんなかから みかかぬ とびきてい 真ん中からみかか(醜女)が飛
はいりきたんとんはり びこんで来たそうな
ハヤシ
うぶしきとうぶていだとう お月様とおてんと様とは
あがるみや ひとつ 上る穴は一つ
はざまぬしゆとう ばんとうぬ なかや 玻座間の主と私との仲は
ひとつち 一つである
ハヤシ
やぶりびょうぶぬなかなけえ 八つ折り屏風の中に
はなうり しだていば とりうとうし 花織手拭いを取りおとし
うりとうい かなじき それを取る振りをして
みやらび みまい きたんとうんはり 女童見舞に来たそうな
ハヤシ

(大意) お役人の愛を見事に勝ち取った娘を、利口な猫に例えて、相手の愛を手中にしたさまをユニークに歌っている。

ほうねんかげき
豊年歌劇

* 農業の中に稲作、甘藷作、刈取作業、精米作業が次々と演じられる。

(白保節)

どうなん島ぬ上ながい みるくゆばたぼらり 与那国島の上に弥勒世が給わり
ユリティクユリティク ブドリアシバ
うらぶたぎぬぶてい ^{にちんか} 北向てい見りば 宇良部岳に登って北に向かい見れば
たばるだ ^{まい} 田原田ぬ稲や 田原(地名)田んぼの稲は
あぶしらまくら ハヤシ 畔をまくらに実っている

(シンダスリ節) (甘藷豊作歌)

くにぐにゆみぐてい 国々ゆ廻り
どうなんちまにわたていすだたる 与那国島に渡って育てられた
わみや かふなむぬよ 俺は果報者である

シンダスリ サースリヨー	
にせーたーや ゆうちきよ	若者達よく聞けよ
エニシシュぬ うじぐわ かなさしいね	エーニシ種の砂糖きびを大事に育てれば
わしまや くがにぬしまなゆん ハヤシ	我が島の繁栄は間違いないよ
わらばなかさなよ エニシシュぬ	童達泣くなよ エーニシ種の
サーターぐわ なみらしいね	砂糖を嘗めらせば
わらい うどうい	泣いている子も笑顔で
あしぶんどろ ハヤシ	踊り喜び遊ぶでせう

^{しんどうぶし}
(船頭節) (豊漁歌)

エー ^{せんどう}船頭さん 船頭さん 今日の船は何処へ出す
新そね向かって メクラぞねに メクラソネニ

エー 鳥巻ちゃ 鳥巻ちゃ 鯉釣れ釣れ大ばんぢや
七色、八色の大量旗、ハヤシ

エー 一人配当金は千五百万円
今年巳年世 果報年 ハヤシ

(汗水節) (農漁民合同で)

あしみじゆながち	汗水を流し
はたらちゆるひとぬ	働く人の
くくるうりしさや	心は嬉しいぞ
ゆすぬしゆみ ゆすぬしゆみ	他人ではわからないぞ
ヨイヤサーサ ゆすぬしゆみ	
いちにちぐんじゆ	一日に五寸
ひやくにちにぐくわん	百日で五貫
たみてすんなゆみ	と貯えて 損になることはない
んかしくとば んかしくとば ハヤシ	昔からの言い伝え言葉である
あさゆはたらちよて	朝な夕な働いて
ちみたてるじんや	積み立ててある銭は
わかまちぬさかい	若松の栄え
としととむに としととむに ハヤシ	年々と栄えて行く

(バガフニディラバ) (稲刈り歌)

エーヤ いやばしき	申すから聞けよ
ゆまばしき なみなみよー	話すから聞けよ 皆さん
エーヤ ばがふにぬ	新造船が出来上がり
かりゆしぬ んまりやよ	嘉利吉ぬ良い船だ
エーヤ なゆるひに いかぬひに	何の日に如何なる日に 造った船か

^{ゆんぐと}
(読事)

^{くとうち}今年や ^{まい}くうんに^{でーぎー}稲ん^{うぶた}出来 ^{うぶまちかいあん}大田 ^{ふがら}大柵^{うとうだんた}刈上げ^{かあ まい ふしつくろ}ぎい ^{んにてい}有難さ兄弟^{つあん}達 ^{とういどうな うさ あま}刈る^{ぼんたんばあたんくたは}稲や^{まあとうぎーはい}乾^{ぎーは}繕^{ぶうる}いきい ^{ぎーはい}稲^{ぎーはい}扱^{ぎーはい}てい

^{つあん}精^{とういどうな うさ あま}ぎい^{ぼんたんばあたんくたは}納^{まあとうぎーはい}税^{ぎーは}ん^{ぶうる}納^{ぎーはい}み^{ぎーはい}余^{ぎーはい}いや^{ぎーはい}私^{ぎーはい}達^{ぎーはい}腹^{ぎーはい}満^{ぎーはい}食^{ぎーはい}い^{ぎーはい}ん^{ぎーはい}だ^{ぎーはい}ぎ ^{まあとうぎーはい}今^{ぎーは}一^{ぶうる}気^{ぎーはい}張^{ぎーはい} ^{ぎーはい}気^{ぎーはい}張^{ぎーはい}い^{ぎーはい}ど^{ぎーはい}う ^{ぎーはい}き^{ぎーはい}い^{ぎーはい}ら^{ぎーはい}り ^{ぎーはい}り^{ぎーはい}や ^{ぎーはい}全^{ぎーはい}員^{ぎーはい} ^{ぎーはい}気^{ぎーはい}張^{ぎーはい}

とうらし わーり ^{たん}頼で ^{うとうだんた}兄弟達んたー

一部下達

おー いた ^{どうんぐう}道具 ^{とう}取んで ーでい

(訳)

今年はこのような豊作で大田 大榎刈上げ 中田 中榎も刈り終わり ほんとに有難う 皆々様方
刈り取った稲は乾燥し稲扱きし 尚精米して義務の納税を納め 余りは私たちも腹いっぱい戴くよう
もう一頑張り 頑張りましょうよ 皆さん さあそうしましょう

^{いにしりぶし}(稲摺節)(精米作業歌)

くなしだぬまいや	手入れして作った稲は
あぶしあぶしまくら	田んぼの畔を枕にする程によくできた
ンニシリ シリヨ アバユイ ユイヨー	
なちなりばかやい	出来た稲は夏時期になれば刈り取り
まじんまじんしゃびら	稲叢がたくさんできた
なんだうしたていていくがに	銀の臼を 黄金の
じいくいしてい	軸に据えて 稲摺りだ
まんくくぬくみやしりどう	たくさんの米俵が摺り上げ
しりどうしゃびーる	その数は万石にも数えられた
ちちやまますんでい	あまりの嬉しさで
さんかうていば	鉦鼓をたたき
村 村ぬ	村々の
にせたーどうどうしたぎやる	若者達が寄り添い、獅子舞で舞い踊る

出演者・スタッフ名簿

竹富公民館（テードウン）		
館長 上勢頭 篤		
結願狂言部		
	氏名	役割
1	島仲 彌喜	師匠
2	上勢頭 巧	狂言
3	大浜 信一郎	狂言
4	登野原 栄立	狂言
5	前本 福貴子	子役
6	前本 賢之輔	子役
7	宮城 幸潔	子役

竹富公民館		
仲筋支会（ナージ）		
	氏名	役割
1	前本 隆一	顧問
2	島仲 由美子	師匠・着付け・化粧
3	前本 賢二郎	出演者補助
4	野原 健	地謡
5	野原 駆	笛
6	宮城 桃	舞踊
7	前本 由貴子	舞踊
8	前本 武子	応援団
9	松原 香代子	応援団
10	仲村 富士子	応援団

竹富公民館		
東支会 (アイノタ)		
	氏名	役割
1	大山 榮一	顧問
2	新盛 桂子	師匠
3	大山 ミツ子	着付け
4	萬木 忍	地謡
5	友利 由紀	舞踊
6	内盛 こずえ	舞踊
7	仲村渠 成代	舞踊
8	西盛 浪代	舞踊

竹富公民館		
西支会 (インノタ)		
	氏名	役割
1	上勢頭 同子	師匠
2	上野 由美子	着付け・化粧
3	藤井 ひろみ	着付け・化粧
4	新田 長男	地謡
5	上勢頭 立人	地謡
6	宮良 次子	舞踊
7	富本 詩野	舞踊
8	上間 ひなの	舞踊
9	新田 七海	舞踊
10	富本 宏	応援団
11	富本 直子	応援団
12	富本 詩葉	応援団

東自治公民館（アンガマイ）

館長 福里 貢辰

	氏名	役割
1	前濱 郁子	師匠
2	大城 加奈子	着付け・化粧
3	與那覇 有羽	唄三線
4	前濱 由紀	太鼓
5	祖納元 楓	舞踊（道唄）
6	金城 ゆかり	舞踊（豊年歌劇）
7	西新田 みなみ	
8	仲本 ゆりか	
9	金城 ゆりか	
10	上荷 智代	
11	前登野城 汐海	
12	上荷 藍衣	
13	金城 のりか	
14	南風原 明美	
15	金城 まどか	
16	崎原 永治	狂言
17	前黒島 勇市	
18	請舛 庄市	
19	前登野城 勇介	

西自治公民館（イリマイ）

館長 真謝 喜八郎

	氏名	役割
1	与那覇 令子	師匠
2	崎原 弘子	舞踊指導・着付け・化粧
3	大嵩 用子	着付け・化粧
4	砂川 オトミ	唄三線
5	米澤 恒司	唄三線
6	池田 真鈴	唄三線
7	田頭 政英	笛
8	請花 ヒロ子	太鼓
9	我那覇 美穂	舞踊(道唄)
10	与那覇 ひとみ	舞踊(旅果報節)
11	小嶺 奈々子	
12	小嶺 祥子	
13	与那覇 亜里砂	

嶋仲自治公民館（シマナガ）

館長 鳩間 信助

	氏名	役割
1	新里 恵美子	師匠
2	田島 笑智子	舞踊指導・着付け・化粧
3	大宜見 智恵子	舞踊指導・着付け・化粧
4	後神村 市子	舞踊指導・着付け・化粧
5	砂川 オトミ	唄三線
6	米澤 恒司	唄三線
7	池田 真鈴	唄三線
8	慶田嵩 正弘	唄三線
9	田頭 政英	笛
10	請花 ヒロ子	太鼓
11	富澤 怜実	舞踊（道唄）
12	鳩間 美都子	舞踊（ながく節）
13	国吉 円	
14	稲蔵 愛子	
15	稲蔵 範子	

比川自治公民館（ンディマイ）

館長 嵩西 茂則

	氏名	役割
1	前浜盛 二美子	師匠
2	與那覇 桂子	着付け・化粧
3	青野 雅人	唄三線
4	青野 和真	唄三線
5	田頭 政英	笛
6	請花 ヒロ子	太鼓
8	前底 かつる	舞踊（比川美童）
9	東浜 みずき	
10	前浜盛 美也	
11	前浜盛 里亜（道唄）	
12	永田 亜矢子	
13	大田 倫子	

久部良自治公民館（クブラ）

館長 柿本 太蔵

	氏名	役割
1	玉城 好子	舞踊指導・着付け・化粧
2	米浜 エリ子	着付け・化粧
3	玉城 孝	唄三線
4	與那覇 有羽	唄三線
5	前濱 由紀	太鼓
6	玉城 みさね	舞踊（道唄）
7	前西原 たかね	舞踊（猫小節）
8	城間 美香	
9	尾辻 史華	
10	柿本 ちづる	
11	柿本 ゆい	
12	西浜門 徳俊	
13	當間 春奈	
14	鹿川あゆみ	

道唄



仲筋ぬ又ペー



竹富口説



種子取節



シーブリキョングン



アサカッティ



旅果報節



ながく節



比川美童



与那国ぬ猫小節



豊年歌劇

第二回 民俗芸能交換会

民俗芸能の未来のために 今できること



カチャーシー



集合写真

